明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可
（毎月一回一日發行）

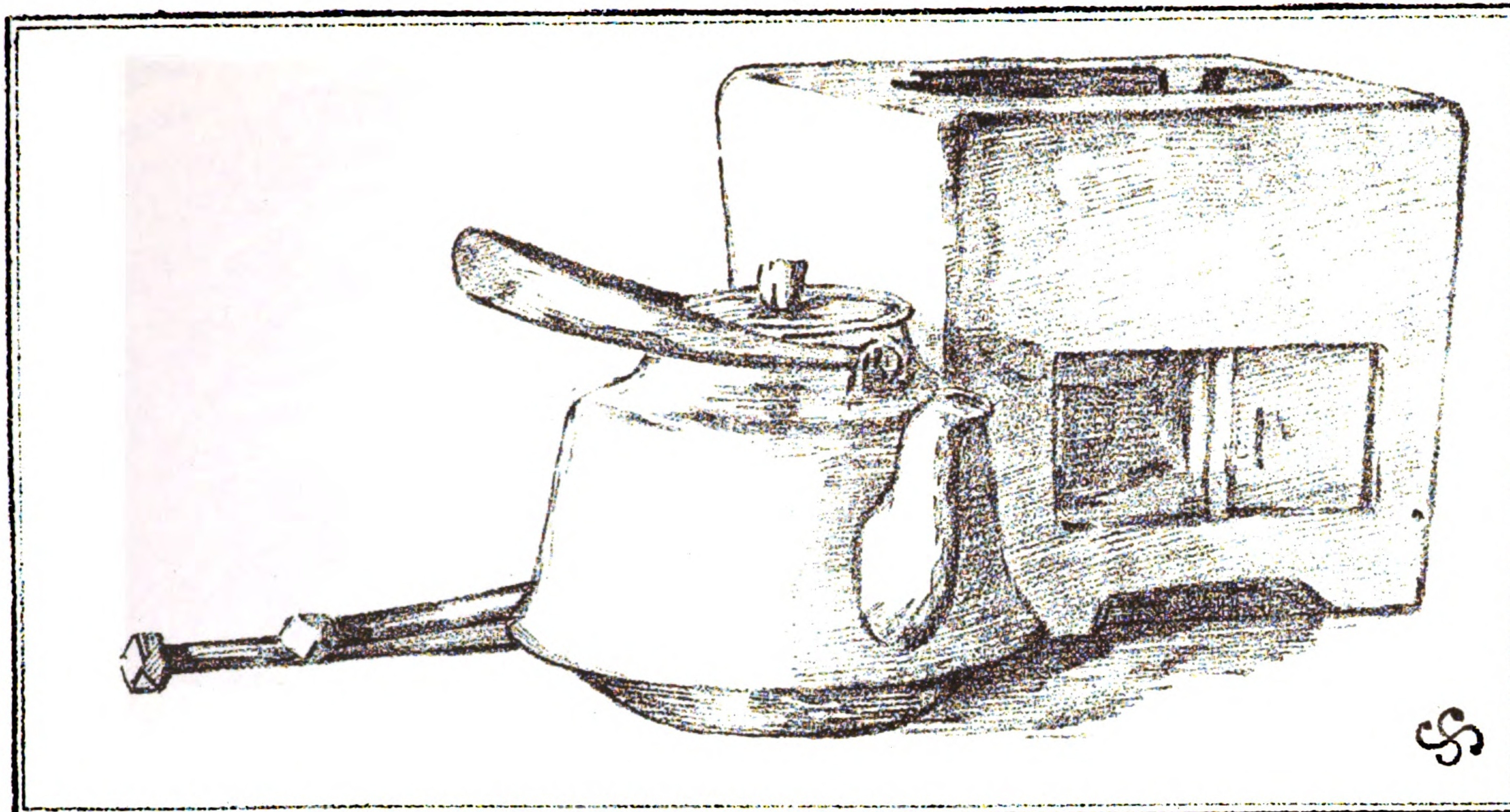
女子文壇

第四年第二號



明治四十一年貳月一日發行

勝手道具



重松せい子筆

女子文字の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

どんな美しい方でも文字の拙き程耻かしきことはありますまい、それで惡筆の方は本會の特許速成法にて特許草紙に特許墨で練習なされば、僅かの間にて誰でも驚く程上達することは調度機械的であります。



特許習字の練習程面白い事はあるまい

圖の如く初めに白抜き手本文字の上を辿りて、白色の特許墨を付けて並らんで居る特許草紙に白抜き文字を見競らべて書くと直に赤色に現はれて、手本の文字と少しも違はざるは、手本と草紙とが相並びて兩者共に一視眼の中に入るが故てある、尚赤色文字は忽ちに消失して元の白紙となる、それで如何なる習字嫌ひの者でも夢中で數回の練習をするので、何時上手になつたのか自分ながらも不思議の樣である。

清書大展覽會開催 來る四月三日於神田錦輝館 出書者には賞状及同誌報無代進呈す

變體四十八音**和歌、假名**交り作文、**楷行草**三體細字共**六ヶ月**

卒業毎月貳部發行 入會金拾錢 **會費**壹ヶ月參拾五錢 全期分金貳圓

見本 詳細會則進呈

○○**男子部 楷行草**三體書簡文細字共六ヶ月卒**業**

○月謝女子部と同じ別に小學部もあり

帝國習字速成學會

東京 本郷森川町壹

振替口座第六八三一

女子文壇第四年

毎號 皇太子妃殿下御尊覽の榮を賜ふ

本欄

▲口繪▼





第貳號目次

花苑



東京丸の內田中寫眞製版所製版

（西洋名畫）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

全紙悉く寫眞挿入優美艶麗畫報兼備

文章平易

婦人世界

説明親切

二月一日發行 毎月一回 三巻 第貳號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 六冊分郵税共九十錢 十二冊一圓七十五錢

▲男女結婚論（愈よ出でて愈よ佳境に入る）　村井弦齋

◎婦人の愼しむべき言葉使ひ……　西田敬止

◎少女物語 時計物語

◎摸範とすべき米國女學生の寄宿舎生活……　ドクトル夫人 川瀬富美子

◎私は山脇房子女史の如何なる點に感心せるか……　代議士夫人 栗塚龍子

◎私の母棚橋絢子より受けたる家庭の教訓……　工學士夫人 横河下枝子

◎斯くの如き女學生は必らず成業す……　白露生

◎習字は如何にせば上達するか……　御歌所寄人 坂正臣

◎良人を助け愛兒を教育する私の日常生活　鳩山春子

◎日本婦人が初めて米國に渡りし時の實驗談　跡見玉枝

◎注意すべき小兒の夜泣　醫學博士 加藤照麿

◎牛肉料理　弦齋夫人

▲本號には懸賞附録當選發見法あり

東京京橋南紺屋町十二　實業之日本社　郵便振替貯金口座參貳六番（電話新橋八七四番）賣捌全國書店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

造花通信教授講義錄

●わかりやすく趣味多く質問もできます●

詳しきことは要領と申す美しき小冊子にあり 無代進呈 郵券二錢

●會員は十八ヶ條の特典があります入會できます●

造花界優勢なる團躰

豫約募集

會員募集

東京市牛込區水道町五〇

大日本婦人造花學會

振替貯金口座一一一三〇

伯爵大原滋
乃木兩閣下
題字醫學士
常持閑弘濟
院中南著

肺病全治秘訣

肺病は善良の療法と藥物とに依りて根治し得るは近世學術界の公論也本書は著者全快の實驗より得たる根治的療法を叮嚀に記述せし物一讀再生の効を奎ふすべし

○當分の内切手貳錢御送附あれば無代進呈す

◎申込所◎東京市芝區愛宕町二丁目十四番地◎弘濟院

男ちゞれ 女くせ 毛

赤毛は何程の難毛も直に根治黑變し良き艶の出る奇術を郵券封入申込の方に無料教授て美髮にして差上げます

東京麻布區材木町 岩阪澄子

どもり

聲惡き人返信郵券送附あれば余が全治せしハエル博士の吃音必治療法を敎へ升

東京礫川指ヶ谷町卅番地 櫻井

あざ 赤鼻

なます●ほくろそばかす●いぼにきびの新療法を郵券封入御申越の方へ敎示す

●東京小石川區久堅町五十八 池田兵三郎

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

入學試驗に及第する法

中學校や高等女學校その他の中學校に入學する諸君は必ずこの三書を御參考となさい
入學試驗科目の國語と算術について試驗に出そうな問題を撰びてかゝげてありますよ

貳拾五版

文部省前國定教科書編纂委員 廣山德次郎著

中學校 高等女學校 入學受驗準備書

（明治三拾九年拾月初版）

洋裝全壹册
定價金卅五錢
郵稅金六錢

訂正五版

寶文館編輯所編纂

中學校 高等女學校 入學受驗豫備教科書

（明治四拾年九月初版）

洋裝全壹册
定價金廿五錢
郵稅金四錢

訂正八版

寶文館編輯所編纂

中學校 高等女學校 入學受驗豫備獨修書

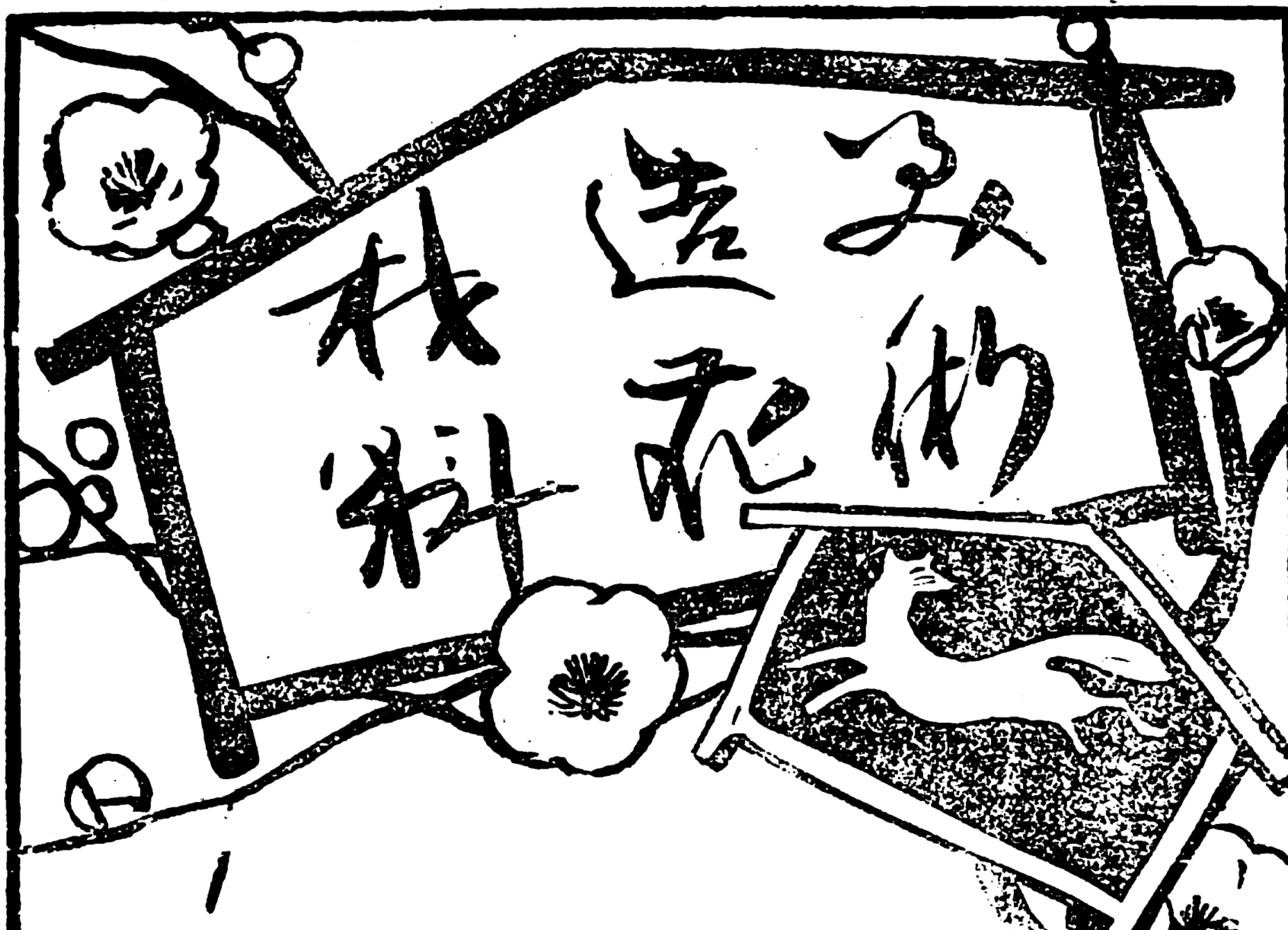
（明治四拾年拾月初版）

洋裝全壹册
定價金四拾錢
郵稅金六錢

そして諸君がとりまちがへそうな事柄は注意して欄外に示して便利よくしてあります
試驗を受けるに及第するように受方をくわしくこれもかいてあります實に良書ですよ

發行所 寶文館
東京市日本橋區本石町三丁目
大阪市東區備後町四丁目

女子文壇の廣告により御申越し際に其旨御書添を乞ふ



發賣御案内

造花用電燈

盛籠用、花輪用、花簪用、枝花用等各種

營業概目、造花半製品、造花用染料、造花用器具、摘ミ細工材料、金銀モール、擬寶石、電氣用眞線

東京市日本橋區横山町壹丁目十六番地

美術造花材料商 天野卯兵衛商店

特長電話浪花一六四三番

振替貯金口座四九七〇番

切取線

造花用カタログ及材料案内御入用ナレバ此切取相添ヘ御申越被下度候

縣　郡　町村

女子文壇

(乙の七)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

大日本淑女學會

會員募集

講義録は何時にても一號より送る

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ヶ年で會費も低廉であります

▲會員には講義録の外『姫百合』と云ふ美くしい躰裁の利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

本會の講義録

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲毎號科外講話を附録とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義録は貳ヶ年完結とす

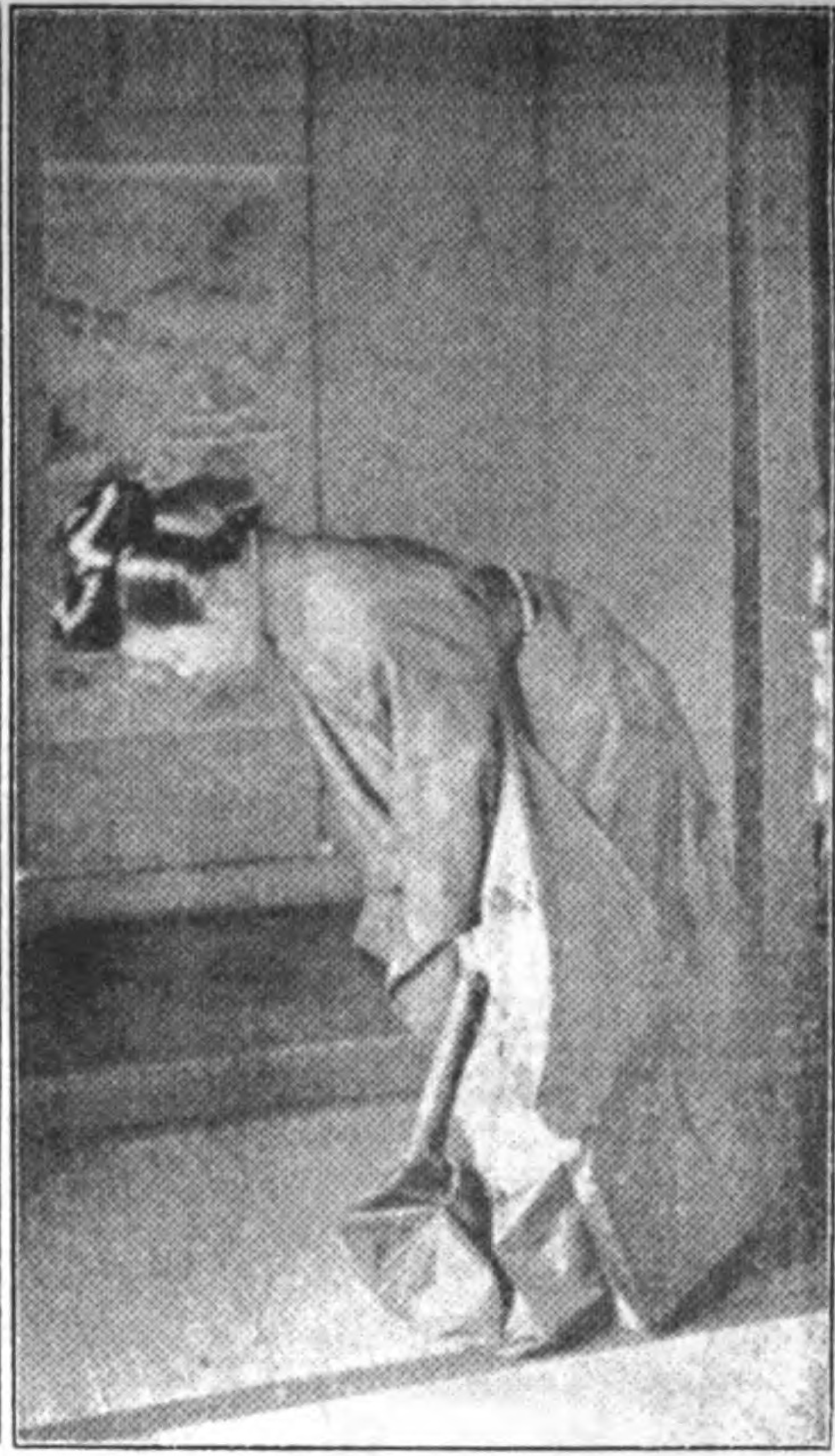
◉詳しい規則書は申越次第差上げます

◉東京神田駿河臺（電話本局三千四番）

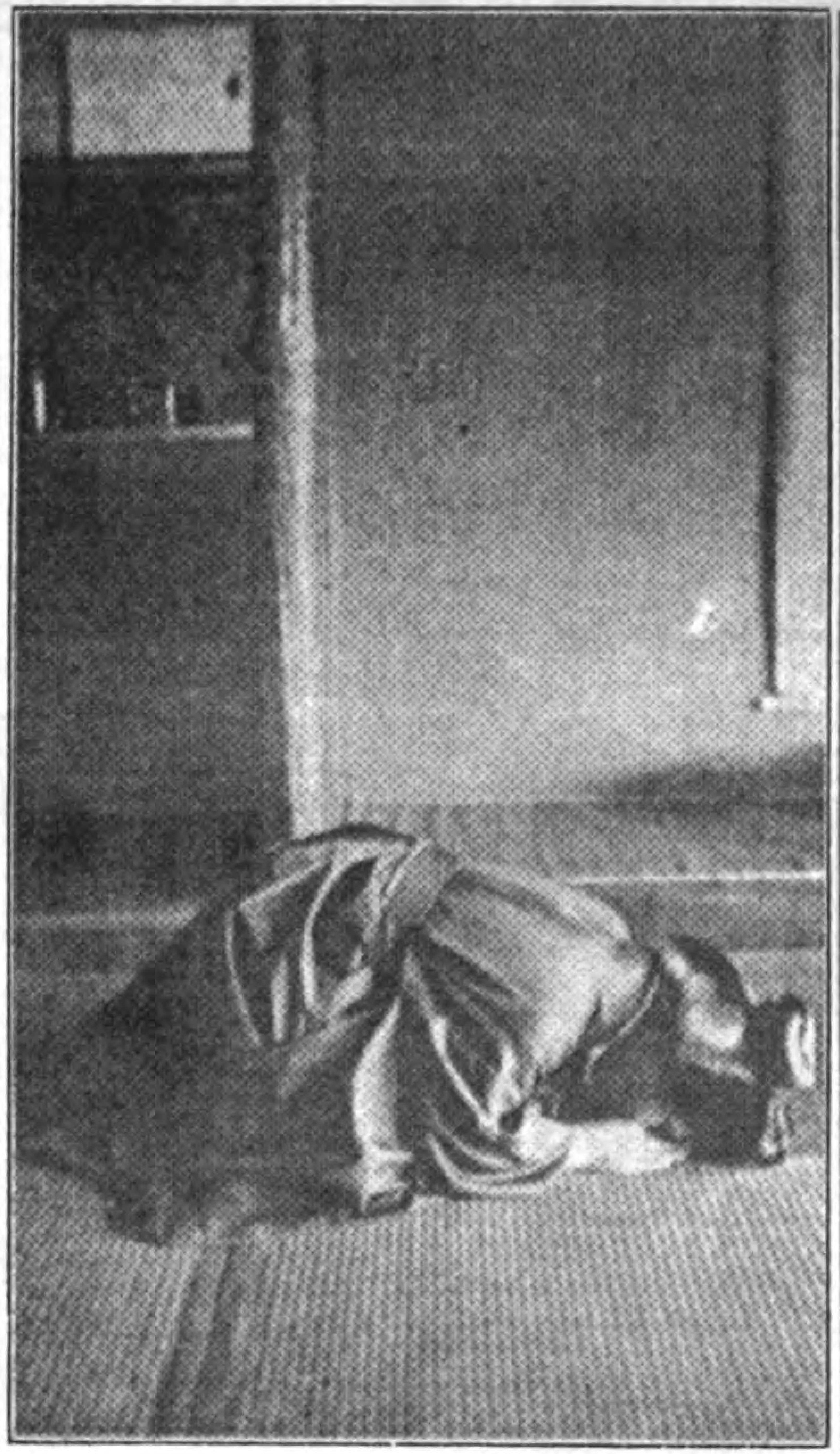
大日本淑女學會

小笠原女禮式作法(其二)

(寫眞研究會主事 坪川辰雄氏寄)



上級者に向ての立禮



上級者に向ての座禮



下級者に向ての立禮



春のうた

（大坂　しらゆき女寄）

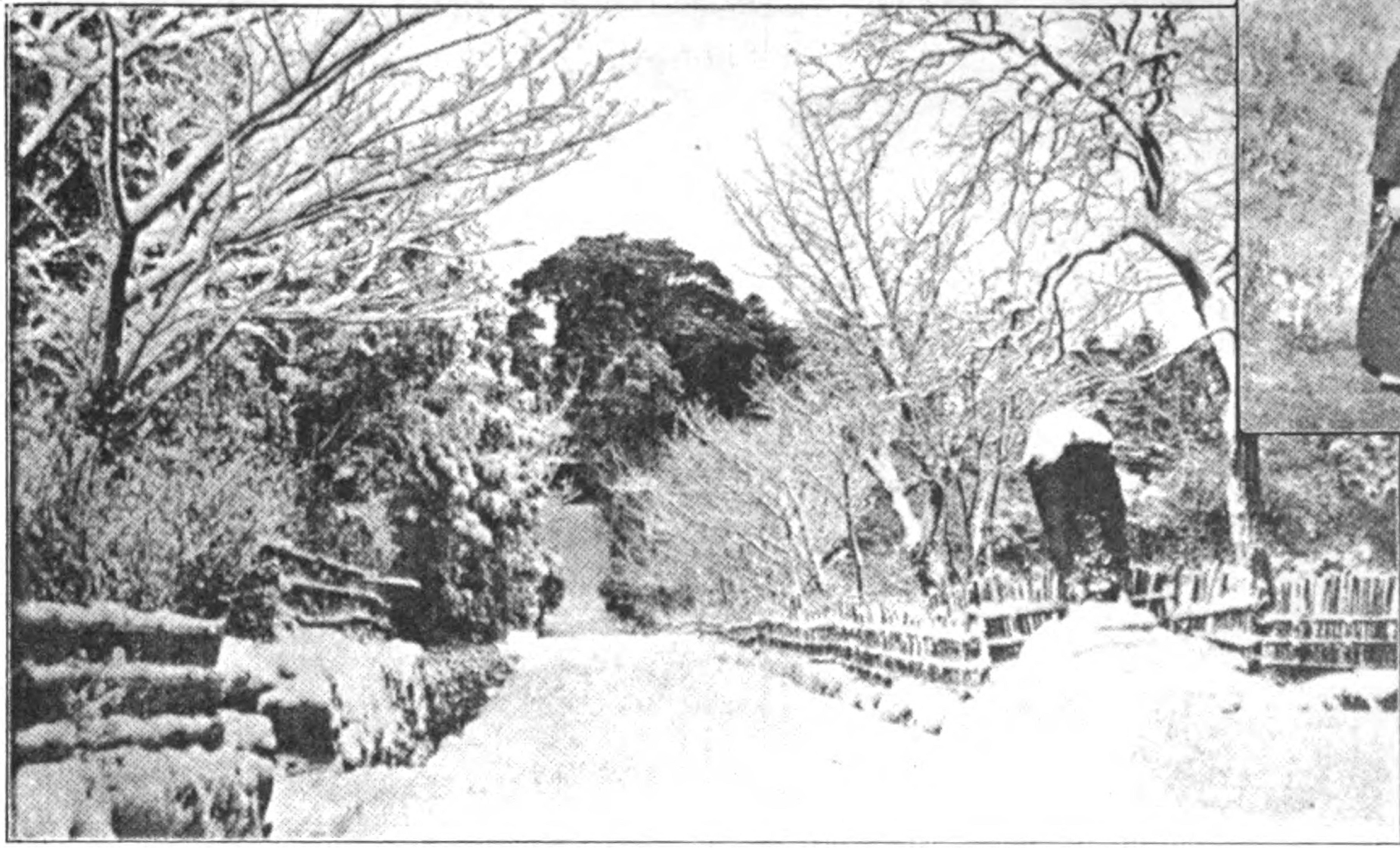
春のひかり



（山城　つや子寄）

淡雪

（埼玉　境野茂登子）





（かすみ女寄）

誌友寫眞（三）



（石見）松浦信子



（大坂）野邊の小草

（松江）古志益子



（栃木）福井八重子



（根室）上坂登女子



誌友諸嬢方、遠慮なくお寫眞を送つて下さい、着順に掲出の上お返し申ます、

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇臨時増刊大懸賞募集

文壇の花

文才詩才ある諸嬢の見発すべからざる新事實は本社に於て企てられんとす從來年に一冊宛發行し來れる**女子懸賞文集**の**代り**とも見るべく更に**大懸賞**を以て諸嬢の**新作を募り**一冊子となして**『文壇の花』**と名づけ來る**四月十五日**博く江湖に其才華を示さんとす、之れ一個の新しく編輯されたる女子作文の摸範的良書なり、選評の懇切なるは本社が是迄の經驗に徴して諸嬢の熟知せらるゝ處なれば復た敢て喋々せず、請ふ左の**方法**に據り**奮つて投稿**せられんことを希望す

▲大懸賞投稿募集課目（十種）

編輯局選評

●**甲種**

小説……總振假名付一行廿四字二百行限

●**乙種**

お伽噺……總振假名付一行廿四字百行限

美文……一行二十四字五十行限

論文……一行二十四字三十行限

●**丙種**

日記……一行二十四字三十行限

書簡文……一行二十四字三十行限

新體詩……總假名付二十行限

短文……總振假名付一行廿四字五行限

和歌……一首限

俳句……一句限

（方法は次頁に詳しくあり就て見よ）

投稿三月五日〆切

文壇の花大懸賞品

甲種	天賞	金貳拾圓		（正金を呈す）	一人
	地賞	金拾五圓		（正金を呈す）	一人
	人賞	金五圓		（正金を呈す）	一人
乙種	天賞	絹地袴	壹着	（價格金七圓）	六人
	地賞	反物	壹反	（價格金五圓）	六人
	人賞	懷中化粧道具	壹函	（價格金參圓）	六人
丙種	天賞	帯地	壹本	（價格金四圓）	三人
	地賞	縮緬帛紗	壹枚	（價格金貳圓）	三人
	人賞	蒔繪硯箱	壹個	（價格金壹圓）	三人

▲投稿者心得▼

○投稿は一人一章又は一首限りとし、題と文體とは各自の隨意とす。
○投稿用紙は半紙又は原稿紙に限る、字體は楷書、假名は平假名を用ふること、但し和歌俳句は一首或は一句を半紙半枚に認むべし。
○投稿は各種類を異にすることに必ず別の用紙に認め、題の上に各その種目を書し、題下には必ず住所姓名を明記すべし。
○投稿には句點を施すべし、圏點は決して附すべからず。
○投稿は女子文壇社編輯局宛にし、封筒には必ず『文壇の花原稿』の文字を朱書すべし、但し各種取交ぜ開封にて差出せば三十匁迄郵税二錢なり
○投稿中には他の用事の文句を記すべからず。
○投稿は必ず自家の作物たるべきこと、若し剽窃の疑あるものは當選無効とす。
○當選者の肖像は寫眞版にして挿入す。發表前に通知を受けたる者は差支なき限りは送付ありたし、用濟の上は返送すべし。
○投稿は一切返附せず、又不足、未納税のものは受取らざるべし。
○當選者へ懸賞品送付は發表一ヶ月後たること。

▲投稿及發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 女子文壇社

文壇の花は定期增刊にあらず臨時增刊なり即ち『四年第六號』として來る四月十五日發行す

●文壇の花 紙數二百五十頁 口繪揷畫澤山揷入

▲定價金貳拾錢 郵税貳錢（凡て例號の倍數となる）

直接申込愛讀諸君へ謹告

『文壇の花』は來る四月十五日を期し號を逐ひ臨時增刊（是は年四回の定期增刊と異なるもの）の上例號に倣ひ送本致します、都て例號の倍數に相當する故定價も亦二冊分となります、假令は第四巻十六號迄前金お拂込の分は夫が爲め第四巻十四號迄に繰上る譯ですから其御積で之に相當する分至急お拂込を願ます。

紀念特賣は出版界空前の廉價好機逸すべからず

小森松風著

美文作法

全一冊洋裝大判並製　正價四拾錢

廉賣金貳拾錢　郵稅四錢

▲中央新聞評　本書は總論に於て美文の起原名稱種類を說明して抒事文、抒情文、抒景文に關する古今文士の文例を出し次に文體の種類美文作法美文と韻文普通文小說との關係を述べ更に美文飜譯法漢文の素養讀むべき書類、各時代の美文名家文話等を詳說したり美文研究者の一讀すべき良書と云ふべし

小森松風著

言文一致文範

全一冊洋裝大判並製　正價四拾錢

廉賣金貳拾錢　郵稅四錢

▲中央新聞評　言文一致の起源より發達、種類、作法等を示し文範として諸名家の論說、抒事、抒景、日記等數十編を示したり、斯道研究者の歡迎を受くるものならん

河井醉茗選著

●詩と美文 玉むし　價六十錢

諸大家選評

●懸賞文集 第一　價廿五錢

右兩書とも發行元は賣切れに付當分增刷いたさず候

●第二懸賞文集の特賣廣告は次項にあり

○本社創業滿三年紀念

特賣廣告

賣切れぬ内に早く求め給へ

▲發兌元　東京市京橋區大鋸町十、十一　振替貯金口座第一七二九番

女子文壇社

中村報知新聞記者著

實地精查 女子遊學便覽

全一冊洋裝校長肖像入並製　正價三拾錢

廉賣金拾五錢　郵稅四錢

▲萬朝報評　都下各女學校の世評と、其校則の概要を揭ぐ、坊間幾多の遊學案內が、麗々しく改版と稱し訂正增補と號しながら數年前の舊規則を揭げたるものに比すれば、調査は善く行屆けり、尙ほ職業案內及學費の概算をも加へ、殊に無鐵砲に東京遊學を鼓吹せずして、東京遊學の危險なるを說き、嘗て都下の新聞に連載せられたる女學生誘惑の手段等をも書き添へたれば、上京に念ある女學生と其父兄とには頗る便なるべし。

鈴木秋風著

小說美文 朝ばれ

全一冊綴本彩色繪入美裝　正價四拾五錢

廉賣金貳拾五錢　郵稅四錢

「萬朝報」曰く　どれ是れも極めて溫雅な文體で女學生の好きさうな冊子なり。

「都新聞」曰く　いづれも短篇の小說ながら、著者が所謂寂寞の歷史に得たる感興と省察とは、能く此裡に露はれたり。

「女學世界」曰く　新たに發行したる少女趣味の小說で何れも未だ浮世の荒波にもまれない青春の女の幽情を寫したものです。

此紀念特賣廣告により御注文の方へは當分の內

上記の通**大割引**

但し郵送料は別に申受けます

郵券代用は壹割增

紀念特賣は空前の廉價なり此好機逸すべからず

創立滿三年紀念大廉賣

●女子作文速成の良書●

沼波文學士。佐々木信綱
巖谷小波。河井醉茗 先生序文

第二 懸賞文集

好評

全一册上等紙五百頁 洋裝美本

正價金三拾五錢の處、滿三年の紀念を祝する爲め

▲當分の内特別廉價金貳拾錢 外に郵稅六錢

空前無比の廉賣なれば賣切れぬ内に早く購求あれ

東京市京橋區大鋸町十二番地 女子文壇社出版 （振替貯金口座第壹七貳九番）



女子文壇四年二號

明治四十一年二月一日發行

自分の價値

近頃文壇に自然主義が起り、自然主義でなければ小説も作家も無いやうに言ひますが此自然主義が文壇に入つて來たことは決して偶然でなく、深い根底のある事だらうと思ひます、それで單り文壇の問題でなく、人間の思想が根本から動いて來た兆だらうと思はれます、手輕に説明は出來ませんけれど、皆樣に只一つ注意すべきことは自覺と謂ふことです、今まで諸嬢は何の爲に生れ出て、何の爲に生存してゐるか、只意味なくうか〳〵と暮して來られたかも知れませんけれど、人間界の大勢は覺醒かゝつてゐます、根本的に人間の思想が革新されやうとしてゐます、自分と云ふものゝ力を出來得る丈け働かせるのです、それを外で粧ほふのでなく、内に働かせるので、外面ばかり豪さうに見せかけたり、世間的に向上だの、活動だの、成功だのと云つた處で、其生命は短いものです。内部の生命乃ち精神の働き、靈魂の向上を計ることが第一です、人間の眞個の價値は其處について來るのです、地位や、名望や、權勢だけでは世間で許さなくなるでせう、女は殊に此の自分の價値を安く見たり、又全く忘れてゐる人もあるやうですから、氣を附けて眞個の人間の働きを忘れてはなりません。

二月（閏）［小］

日曜　二日　九日　十六日　廿三日

祭日　紀元節　十一日

節分　四日

立春　五日

初午　九日

名流婦人の處女時代

三人の級

幸田延子

外神田に住つて居りまして、よく覺えて居りませんが、何でも極く近くにありました只今の幼稚園、其頃ては寺子屋風のところへ、二年ばかりも通ひましたてしやう、それからお茶の水の師範學校の、附屬小學校に入り、其處を卒業てから、直に音樂學校に移りまして、引續いて只今まて居りますので、妾の經路は誠に單純なもので、少しもお話するやうなとは御座いません。

何うして音樂に志したかとお尋ねになりましても、妾のは皆樣のやうに、自分で斯う爲やうとか、斯う成らうとか思つて成つたのては無く、初めから自然に、成るがまゝに任して、今日までまゐりましたので、尤も小學校に居ります頃、米國から聘せられて來まして、日本へ初めて唱歌を傳へられた、メーソンと云ふ先生が、妾どもにも唱歌を敎へて下さいまして、其先生から、音樂を學ぶやうに、と申されたことはありましたが、それが爲めに別段何うしたと云ふ譯ても無く、矢張り自然に音樂學校に入るやうな機に成りましたから、入學ましたといふだけて、一寸も申上げることは御座いません、そんな具合てすから妾は只今ても、之から先のことなどに就いて考へましたことはありません、たゞ其日々々に爲すべきことを、可成手落ちの無いやうに致しさへすれば、それて宜しいと思つて居りますので、學校ても自分の預ります生徒の方に、少しもよく解るやうに自分の知るところをお傳へしやうと思ふ外、更に何ごとをも考へませんのてす。

音樂學校に入りましたのは、明治十五年て、丁度妾が十三歳の時てした、只今の音樂學校が、まだ音樂取調所と申しました頃て、妾の級は生徒がたつた三人しかありませんてした、妾どものつぎの級に男子が十人許

り、外に各府縣から派出されました取調員とか、傳習生とか云ふ人達が僅少居りました位で、人數は極めて少數で御座いました。唱歌は其頃はメーソン先生が既に御歸國になられましたので、上眞行先生から敎を受け、今の瓜生海軍中將夫人、繁子先生にピアノを敎へて戴きましたが、只今と違ひまして其頃の生徒は、何でも學校で敎へて呉れるものを學ぶのでしたから、妾共も何や角や種々のものをごた／＼習ひました、樂器はピアノも、バイオリンも、整然と揃つて居りました。

洋行いたしましたのは、明治二十二年でした、自分では夢にも思ひよりませんでしたところへ、不意に洋行せぬかと云ふお話がありましたので、遣つて下さるならばまゐりましやうと申しますと、行くにしては、少し語學を覺えて置いたが宜しからうといふお話で、それから急に語學を學ぶと云ふ始末でしたが、丁度其時でした、文部大臣の森樣(有禮氏)が暗殺されたやうな出來ごとが御座いましたから、多分斯のお話も沙汰止みに成ることだらうと思つて居りましたが、其事件以前から決定つて居りましたものと見えまして、到當まゐることに成りましたのでした。

有爲の精神

嘉悅孝子

皆樣よく「出來ぬものは何うしても出來ぬ」とか、「零に幾ら零を掛けても矢張り零である」とか申される方が御座いますが、妾は決してさうで無い、爲やうと思へば何んなことでも、出來ぬといふことは無からうと思ひます、妾などはその覺悟で只今までまゐりましたので、學校は駿河臺の成立女學校を卒業ました、其頃はまだ、高等女學校と云ふものはありませんでした、尤も跡見女學校其他二三の女學校は、ずつとそれ以前から御座いましたが、極く微々たるものでして、其頃新進の女學校としては、先づ麴町の明治女學校と、妾共の居りました成立女學校で、男子部が鈴木町にあり、

女子部は袋町にありまして、生徒も大分御座いました、學校の出來ましたのが明治十八年で、妾の入學しましたのは其翌年の十九年、丁度妾が十九歳の時でしたが、妾は國(肥後の熊本)に居りましては、殆ど學問と云ふことを致しませんでしたので、小學校には入學ことは入りましたが、妾より先輩の人達が、少し學問したものは皆、基督信者に成ると云ふやうな先例がありましたものですから、女子には決して學問させるもので無い、女子に學問さすれば何うせ碌なものには成ら無いと云ふやうに一般に思はれて居りましたので妾も十一歳の時、小學校を退めまして、其頃父が製糸工場を起して居りましたから、其工場の方に廻されて、十九の歳…東京へ出ますまで、繭をたてたり、糸ひきをしたりして、女工の生活を送りましたので、女學生と云ふ年頃には、少しも勉強することは出來ませんでした。

妾は別段、教師に成らうの何うのと云ふ考へは持ちませんでしたが、何うにかして自營の途を立てなければ成らぬと云ふこと丈けは、始終心がけて居りましたので、よく鏡を取出して見ては、獨で泣きましたさうで、家のものが、何故お前はさう鏡を見ては泣くのだと尋ねますと、妾をば親達が斯んなに無器量に生で呉たものだから、何處へもお嫁に行くことが出來ぬと云つては、よく困らせたさうですから、其頃から自分で何かやらなければ成らぬと云ふ考へは、多少ありましたのでしやう、それに妾の祖母と云ふのは、國でも有名の賢女として知られて居りましたもので、父の若い頃も、丁度横井小楠先生のお隆んな時分で、當時血氣の若者は皆横井先生の門に出入しましたが、祖父と云ふのは極くの喧しやで、父にはそんなところに行つては成らぬと申して、嚴しく止めてありましたのを、祖母が夜窃りと祖父に秘して父を出しては、横井先生のところに通はしたと云ふ位の人でした、妾はまた其祖母が大好きで、妾は何うにかしてお祖母さん丈けは粗略にせぬやうに、お祖母さんには絹物ばかり着せて大事にしてあげねば成らぬと、始終申して居りましたの

て、祖母に大層可愛がられまして、「お前は假令女てあつても、是からの女は學問しなければ成らぬ」と云はれて、祖母にも餘程使嗾されました方てす。

けれども其頃、兄が既に東京に出て居りますし、父は熊本て政黨の牛耳を執つて居ります傍ら、製糸事業の外、更に製糖事業を起して同業者と競爭を始め、猶其他にも二三の事業に關係して失敗を重ねる、同時に一方には縣會議員の運動もすると云ふ始末て、到底妾の學資まて出して與れることは免されませんてした、ても弟は男子のことてすから、何うにかして自分て學問しなくては成らぬと申しまして、默つて國を逃げて東京にまゐりまして、之は幼年學校に入學り、續いて士官學校に入りましたから、弟の方は別に多分の學資を要せずに濟みましたが、妾はさうまゐりませんて、殘念て堪りませんてした、其うちに大學に居りました兄が健康を害して、何うしても國へ歸らねば成らぬことに成りましたから、此機會を失つては成らぬと思ひまして、父に頼んで見ましたところ、よい具合に免されまして、成立女學校に入ることになりましたのてすが、

妾は何ごとにも負ける嫌ひの性質て、幼さい時分から、歌留多を取つても何をしても、人に負けるのが大嫌ひて、何ごとにも人の上に立たねば承知せず、負ければ口惜しがつて泣くのが癖て、よく泣きましたさうてす。

てすから、成立女學校に入ることになりましても、何も分らないのに、下の組に入學のが何うしても厭て厭て堪らず、到當一等上の組‥‥確か本科二年てしたと思ひます‥‥に入りましたが、皆樣は無論小學校は滿足に卒業してゐらつしやるし、仲には師範學校を出た方もありまして、漢文は文章軌範、英語はナショナルの第三リーダーをやつて居りましたので、田舍から出たばかりのものが、其中に飛び込んだものてすから、入學して半年ばかりと云ふものは、何が何だか全て夢中て、敎場へ出ても何處を敎はつて居るのやら薩張り分らず、歸つてから複習しやうと思つて書物を開いても少しも解りませんので、幾ら口惜くて泣いたか知れ

ませんてした、最初から寄宿舎へ入る筈てしたが、少し土地馴れてからが宜しからうと申しまして、日本鐵道に務めて居る知己のところに暫く世話になつて居りましたから、漢文は其人の暇な時に少しづゝ見て貰つたりなど致しまして、何うにか明る年の試驗には及第いたしました、それから段々に分つてまゐりまして、別段の苦勞もなく、進んて行かれました。てすから、只今ても妾は、如何樣なことても、爲やうと思へば屹度出來ないことは無いと思ひますから、よく學校の生徒達が「何それが六ケ敷くて出來ない」と申します時には「能はざるに非ず、爲さゞる也」てあると、何時も申しますのてす。

寄宿舎に入つてからは、妾より一級上の組て、何事にかけても好くお出來になる方が居りまして、歌を詠んても何ごとをしても、何時も其方が好かつたり、妾の方が好かつたりして居りましたものてすから、何ても其方と大競爭て、勉強仕合つたことがありましたが、不思議に又其方とは仲善しして、何か事を爲さうと云ふ場合にはいつも一處にいたしましたものてす、寄宿舎ては妾などが暴れ大將て、只今思ふと眞に冷汗が出るやうなことをいたしました、寄宿舎と申しましても、先生のお宅に居りましたのてすが、餘り妾共が暴れますので、先生の方ても一歩讓つて、隨分妾共をば大切にして、特別に待遇つて下さいましたのてすが、其頃は又それをさうとも氣附かず、唯好い氣になつて、益附け上りまして、種々の惡さを致しましたもので、譬へば、牛肉などの御馳走を下さる時ても、生肉て下さつて、妾共て煑て、銘々人數だけに分けて食べるのてしたが、その肉が澤山ある時は宜しう御座いましたが、それが若し少なかつた時には、一同て相談しまして、御飯から何まて其處に出してある丈けのものを不殘食べて了ひまして、後てお勝手の方て食べるものが無く成つて、困り切つて、狼てゝ再御飯を炊くやら何やら大騷ぎするのを、知らぬ顔して濟して居るのが面白かつたのてす、ても惡さを爲て仕舞つた後ては、妾などは惡いことをしたと思ひまして、居たゝまらなく、

堪えられない苦痛を覺えましたが、何うしたものか、其塲に臨みますと、何だか遣つて見たくて仕方がありませんてした、只今から其當時を懐想いたしますと、實に慚愧に堪えませんので、何うしたならば、其時の先生に償ひが出來やうかと考へて居りますのです。其頃愛讀しました書物では、ジヨセヒンの傳などを好みました、父が政黨に關係して居たからでもありましやうが、露西亞の革命黨の歴史を書いたものなども好きて、殊に其中にある女性が、堂々たる男子の中に交はつて、男子も及ばぬ位の活動するところを讀むのが愉快て御座いました。

（以上談話筆記文責在記者）

遠人

——迴浦の埋れ草——

夜雨

かつては雲の
紅く浮く
山のまほらの
國戀ひて
草の音聞く
野にしては
一人の上を
忍びしか
芒の塚の
火こそあれ
煙は霜に
靜められて
夜の東雲に
龍膽の
花の常陸に
咲きぬれば
鞍だに置かぬ

荒牧の
駒は斷えて
地を蹴るに
霧橋架くる
大川の
川門に、秋は
過るらむ

今、遠人を
夢にして
涙ぞおつる、
夢に逢はゞ
死なんと言ひし
瞬間の
顔よき人の
名は知らず
わが生くるべき

天地の
狹くなりぬる
心から
飽浦の濱の
『埋み人』
しきりに人の
見まほしき

冬の旅

文學士　中村枯林

晴れわたる冬の日よりに旅だちたる心地、まづうれしく、汽笛の聲にいくつかの驛をすぎすぎて、國府津につきぬ。松原ごしにみゆる海の色、いつみてもすがすがしく、むかしの夏の事どもさへ忍ばれて、沖漕ぐ舟におもひを乘するも面白し。

小田原を過ぎ箱根路にかゝれば、谿流の音なつかしく、うち仰ぐ空高くそゝりたつ芝山の上の一つ家、いかにさびしかるらむをなど、かたみに語り合ふ夕暮、底倉

の宿につくに、やさしき歌聲聞ゆ。いづくの女學生の旅ぞとおもひやる。

それより大地獄にゆき夕月の影あびて歸る即ち湯に入れば、桝にあふるゝ溫泉の心地よさ、手足を心ゆくままうち延ばしたる心地、極樂はこゝにこそと思ひぬ。こゝの下婢は皆年若く極めてしとやかなり。夕食したたむる時、この宿に泊まれるはいづくの女學生ぞと問ふに、かゝる人なしと答ふ。さらば最前の唱歌の主はと折かへし云へば、おもはゆげに身共にてこそと答ふ。ゆかしくてなほ問へば、夕食前唱歌、七時より十時迄讀書算術、客少き時は一時より作法を學べりといふにいよ〱ゆかしく、注意して見るに、茶の出し方、床の敷樣、丁寧にして事々に意をそゝぎたるさまに、宿の主人の心のゆかしさ、そゞろに思ひやられたり。

　底倉や蔦屋のやどのあたゝかさ
　　ひとりいてゆにかぎらざりけり

あくれば空のすが〱しさ昨日の如し。この宿を立去らんとして何となく思ひのこる心地すなど一人おもへるに、良雲の君、かくてはなか〱心なき家に宿乞ふべかりしをといひつゝ打嘆くに、狎るゝもつらき明日の故郷の歌などおもひやられつゝ、

　なつかしき少女心は中々に
　　つらきおもひの種と生ひけり
　一夜さのかりのやどりを後ろ髮
　　ひかるゝごとくかへりみしはや

かへりみれば谷河のあなたに見渡さるゝ二階の一間に、二人の少女は立てり。朝の新しき空氣は心地よく胸にしみ入りて、山の色空の色、心そゞろにたのし。

　たゞずみて見おくる人の影二つ
　　杉の木立にかくれけるかな

面白きは人の心、物に觸れ事につけつゝ感ずればこそ憂きふしもあれ、はたゆかしきふしもあれ、馬耳東風と空さりげなくうそぶく人こそ、すさまじく愛なき極みなれなどかたりつゝ、さればなか〱悟りきらぬ人こそあらまほしき方もありけれなど笑ふ。

　石の上に臥すてふ人も人なれや
　　かへりみがちのけふの山窓

友の君二人は三寳に歸依したまへばなり。坂をのぼりて湖をみる。離宮前に小さく、茅ぶきの古宿の立ちならぶさま、廣重の繪さながらなり。一鳥谷に叫びて山いよ〱靜かなり。俊虎の君うめきて曰く、

　百年の人も住みけり菊の里

湖畔をたどり坂をのぼり駿河の方をみれば、ほのぼの見渡さるゝ海の色、故郷の空とて何となく心動きて眺め入りぬ。

それより引かへして舊道をたどりゆく程に、日は漸々傾きぬ、湯本にて土産物求め、小田原に下り宿につく即ち入りし風呂の汚さに昨日の宿を忍ぶもをかし。

あくれば雨ふりいてぬ、傘もとめて最乘寺にゆく、木立もの古りて開山の人の徳しのばれゆかしき境なり。

堂にのぼればひろ〳〵として心地よく、二の膳つきの饗應甘き羊羹もうれし。

晝てゝをみすてゝ松田驛にいて汽車にて歸るみちすがら、連の人々をかへりみつゝ、待つらん人を家にもてる身の今日のうれしさを思ひやりぬ。

彼如何にせし（小説）

齋藤弔花

一

日記をくり披げて讀んでゐると、記臆より、逸してゐたあらゆる事實が眼のあたり活々と現はれて來る。

外ではしと〳〵と時雨がして、颼々と空つ風が冬と秋との慘ましい戰ひを續けてゐる。自分は、机に凭れて、古い日記を讀みはじめた。

——明治三十八年六月〇日

といふのが出た。赤い罫紙に鉛筆の走り書き、これは武州府中の宿屋の、薄暗い行燈の影に書いたのだ。

「この家に着いたのは午後六時頃、町には夕靄の影が漂うて居るが、多摩川の方一面を染めた夕燒雲が、この淡靄に射し込んで町は薄紅をさした練絹で裹まれたやうだ。町並の不揃ひな、生活の不調子なこの宿場の初夏の暮方、表通の人聲に背いて、裏の方の障子を開くと、低い黑板塀の陰には、茂つた綠葉の影が濃く、こゝめ花が處々に時ならぬ雪を降らしてゐる、大きな柚の木が向い立つて二本あるが、その林の茂には、村雀の落付かぬ塒を爭つて騷がしく囀いてゐる。塀越しに多摩の松蓮寺山の嶺が見える。

寒くもなく暑くもない。この頃の氣候は、何處かに汪蕩として人を蕩かさんばかりの派手やかな色が浮んでゐる。物成が生々として夏の繁榮を誇りがほてあるが、この勁い自然の溢れに接すると、俄かに人間が小さく便りなく見えて、自分は、今何故に宿屋に來り、

今、何を思ひ。何を爲しつゝあるかとの不安は直ちに胸に迫ると、俄かにその邊の風景が悲しみを誘起す種となつて國に居る母親や妹の事などを懐かしく思ひ出しては、耐らなくなるのがこの頃自分の心の著しき傾きてあつた。

「お光。お前は二十才と云つたね。」

不意に隣の間に尖つた、鋭い聲が聞えた。

「可哀相てすよ。妾……。」

「まだ若いのか。十九かい。十八？。」

「十七才だわ。進藤さんは來る度に妾の齢を聞くんてすもの。」

「左樣だつけな。俺は來る度にお前の年を訊くつてかい。あハ……耄碌すると忘れつぽくなるからな。」

「耄碌なさるお歳てもないぢやありませんか。」

女は笑ひながら「當てゝ見ませうか。」

「俺は何歳に見える。」

「進藤さんは歳より老けてらつしやるのね。さうね。宅のお内儀さんは五十位だと仰有るけれど……。」少し考へて「四十七？エ。當つて？」

「あッハヽヽ」と哄然として男の笑ひ聲は起つた。「四十七に見えるか。お光。俺が四十七なら、お前は二十五だぞ。これ、俺の面を見ろ。何處かに若い光があらう。四十七ではこの艶はねいぞ。」

「だつて宅の旦那はすべ／＼と光つてるぢやないこと。あれは五十八てすよ。」

「光り處が違ふわ。此處の亭主のは藥鑵頭が光つてゐるばかりぢやないか。あハヽ進藤隼之進も、小西屋の隱居と一緒にされちやア最う最期だ。」と終りの一句にはやゝ眞面目に自家の徂落を物語つてゐる。しばらくは無言。

「お光、お前が四十七だの五十だのと云ふから俺は變な氣持に成つた。併しだね。お前達にアまだ解らないが、苦勞をすると年を取るぞ。苦勞は全く身の毒だぞ。あハヽヽ。精出して浮氣をして年を取らぬ工夫をするだ。凝つた眞似をするなよ。酒。熱いのをな。」

「まだ飲るの？」

「正宗をな。二合罎を二三本持つて來てくれ。」

「あら、貴方、酔てるぢやありませんか。」と女は氣遣ふ。進藤先生は、濁た調子て、

「可いて事よ。酒、酒!!。酒より外に世界はない。天若し酒を愛せずんば酒星天にあらじか、巧いことを吐した。」

女中は立つて行つたらしい。ドシンと隣まで響くほど太い音がした。先生が寝そびつたのに違ゐない。

「地若し酒を愛せずんば、地應に酒泉なかるべし……天地既に酒を愛す、酒を愛して天に愧ぢず……天に愧ぢずと來てらア。」

自分は思はず隣客の事に氣を奪はれて居る。女中が燈を持つて來たのではじめて吾に返ると日はずつぷり暮れて、靑い空にはこぼれ落ちるばかり燦爛と星が輝いてゐた。

二

自分が夕飯を了い、帳場に出て、火の入つた往來を見てゐると、醉つぱらつた進藤氏もやつて來た。自分が座を外すと進藤醉客はしばらく大聲に元氣な話を帳場の藥罐に吹きかけてゐたが、餘り調子に乘つた返事をせぬので氣拔けした形であつた。ドツシ／＼と椽側を踏み鳴らして流石に障子の外から、

「先生。まだお寐んか」

的然進藤氏の聲だ。女中との對話に何か曰くのあり相な人だと思つてゐた自分は平生醉漢を嫌ふ蛇蝎の如きに拘らず、快よく之を迎へた。座につくと自分の傍に抛り出してあつた寒山詩を抓み上げて、醉つて苦し相な聲をして

「面白い。先生も何ぢやな。こういふものが好きと見える。寒山といふ奇坊主も中々妙な言を言ひますおや。」と突然奇言人と騷がして、

「寒山有一宅、宅中無欄亭、六門左右通、堂中見天碧、房々虛索索、東壁打西壁、其中一物無、免被人來借、寒到燒輭火、飢來煮茶喫、不學田舍翁、廣置牛莊宅、盡作地救業、一入何夢狂、好々善思量、思量知軌則。」先生。寒山は悟つたことをいふ樣ぢやが、まだ煩惱は離れん。弘法の方便もかういふ消極では不可。吾輩(馬鹿に鹿爪らしい)はこの洒脫の氣象は寒山如き乞食坊主には負けん……かぢや、これて熱い血の通つてゐる人間ぢやからな。」血走つた眼を上げて「吾輩も若い……先生位の年には、かういふ馬鹿坊主の呪咀を聞いて、案を拍つて感心したものぢやが、紛紜の小面倒な世の中に立つと、堂中碧天を見るぢやア、可愛い妻子の涙の雨がそれ降るぢや。あハヽヽ。一杯失禮してやる。先生、御迷惑ぢやらうがどうかな、狂人に暴れ込まれたのも何かの因緣ぢや。」

「構ひませんとも。僕は貴下のお酒のお肴には少し野暮過ぎるが、それてお構ひなくば。」

「イヤさう云はれるな。氣づゝない。吾輩共はな。これて先生のやうな大人しい若い方を見ると懷しい。て、愚痴も云ひますぞ。全くこれてな、この本にもある「群女戲夕塲、風來滿路香、綴裙俗蛺蝶、抑髻玉鴛鴦、角婢紅羅纈、閣奴紫錦裳、爲觀失道者、發白心惶々」發白心惶々ぢや。これて吾輩も子持ちてな。こんな馬鹿なことを云つてゐる年ぢやないのだけれど……」と勁く手を拍いて、女中を呼び、

「お光……イヤお靜姐さんか。吾輩に今一本な。今度は酒ては利かん燒酎をな……。コップに……先生に御免を被つて一杯飲るのぢや。」と拜むやうに女中に賴む。酒さへ宛がへば進藤氏は上機嫌てある。

單に酒飲みてはない。この人には何か悲慘な經歷があるのだなと、自分は推量して幾分か慰めてやりたい樣な氣がした。

粗放な生活を續けてゐる人の常としていふ事が一向はつきりせぬ。その容貌にも不安の色が滿ちてゐる。が一點蔽ふべからざるは彼が善良玉の如き性質を有してゐることだ。

三

「隨分飲けますね。」

「酒てすか。これが命ぢやからな。」といかにも甘さうに先生は鬚むぢやの口て一口舐めるやうにして、

「私達は何だ。世の中の蠅見た樣なものぢや。イヤに食ひ氣ばかり付いて生地穢なになるばかりぢや。これても吾輩も內務省の官吏をやつたが、腰辨ては到底やり切れない。忽ち長官と衝突してな。鐵拳を一つポカリと食はして直ちに免の字ぢや。その時は「馬鹿野郞！」と威丈高に成つて獅子吼の一喝、盛なものであつたが、何時しか又ぐじ〱と蛞蝓のやうに成つて、妻の奴には逃げられる。その置土產が先生。當年六才になる鼻垂しの娘と三才の小僧だ。泣きたく成つたね。弟息子はまだ乳が欲しい盛りぢや。それを捨てゝ遁げる程の亂暴な女房の乳を吸つて見るより、さアこの父が長官を打飛ばした鋼鐵の腕に縋つて寢ろ。可いか。と無理やりに男の肌に溫めてやつたぢや。嬶奴は吾輩の貧乏を少とも苦勞に思はんといつた。その舌の動き止まぬ先から貧乏はいくらしても構はぬが酒が厭だ。酒を飲むと無理をいふ。大きな聲て吐鳴る。酒を飲んて太平樂をいふのは月給を取つてからにせい。と突かかつて來る。俺の酒飲みは今更ら始まつたことぢやないぢやないか。もう夫婦てこんな喧嘩をする樣に成つ

ては駄目です。先生。先生では呼び惡いな。何と仰有る。——宮澤さん。かうと吾輩の友人にも宮澤といふのが居た。忘れません。地獄耳でござるて。」と彼はヤケに齒莖まで見せた。

「眞面目ぢや有ませんか。燒酎を最一盞取ませうか。」

「澤山……」と進藤氏は手を振つて「久振りで愚痴を言ます。御迷惑でせうが可哀相だと思つて聞て貰いたい。實際この俺に斯な濕ッぽい話を持て居るかと人は笑ふだらうが、眞實がな。こういふ濕ッぽい陰氣な經歷があればこそ、斯なに躁いて、自暴をいふのだ。」

「さうですとも。僕は喜んで貴下のその半生の御經歷の聞き手に成りませう。」

「有難い。」進藤氏は心から氣持ち可さ相に笑崩れて

「その妻といふのが官吏だとか、月給取とかいふの、奧さんで居たいといふ理想ぢやからな。定りのない運命の手に握えられた人間が、箱庭のやうに、きちんと女の求むる希望通りに成るものかい。馬鹿々々しい頭の曲つた吾輩の運命も螺旋形で以つてくる〳〵と回轉して、何の事たアない、氣ばかり逸つて足の隨はん吾輩は直ちに時勢後れと成て了つた。脆いものぢやつた。其旋風に揉まれてゐる中に女房は逃出したてす。」

對手の眉には雲がかゝつた。開け放した窓からは何の香ともしらぬ奧床しい香芬が鼻を撲つ。

「何でももうさらけ出す。今夜は嬉しいから」非常な饒舌に成つて「その後吾輩の額は禿げ上つて、鬚は赤くなつた。さら〳〵と白髮も目に立つやうに成つた。この二三年來めつきり年を老つた。吾輩は初めての運命をくりかへして何時の間にか腰辨に成つて居つたから可笑しい。宮澤さん。吾輩は今此處の役場の書記殿ぢや。相變らず酒を飲む。酒の中には、舊の女房の寫眞でも入てゐるやうに盞を取上げると若かつた歡樂の夢を幻想しては裏悲しくなるぢや。子供といふ奴が苦てな。後繼の女房には一つも懷かない。今度の妻は、柔順な、何一つ口抗をせぬ優しい女ぢやあるが、吾輩は濟まん。實に良心に濟まんが、ガミ〳〵と吾輩をやり込めた末、捨けぼりにした痩せた女房が好い。」と頗る能辨で一氣にまくし掛けたが、

「父さん。父さん。」と優しい聲が外庭の方に聞えると、進藤氏はムックリ起き上つて、「艶子か。父さんに用か。」「信一が寐ません。」「母さんは何うした。」「父さんを呼んで來なつてンです。」「直歸る。」と先生は又元の坐に就いて、酔覺の水を手づから酌ては、ゴリゴリ

咽喉を鳴らしてゐた。

「蠅ぢや。全く蠅ぢやな。進藤隼之進もどんづまりぢや。」手を伸てコップを取り殘の雫をも惜相に嘗て。

「子供が懐かんのは妾の不徳でございます。と今の女房は涙ぐんでいふ。イヤ、俺の子供は野馬ぢや。俺のこの剛い腕枕が可いのぢや。お前の罪ぢやないぞ。こんな野性を吹き込んだこの父が惡いのだ。と何時も云ふ。可笑なもので、こゝには親肉でなくちやならない。子供が大きく成る毎に吾輩のこの放縦の罪が益々深く愧ぢて骨に入る。宮澤さん。この飲だくれの父がな、彼等の爲めには慰藉でな。また唯一の愛ぢや。どーれ大に饒舌つてお眠でござらう。歸つて、子供の枕にならう左樣なら。」

早やその姿は障子の外に出た。

四

翌日、僕は府中を立つて八王寺に行かねばならぬ。ところが妙に進藤氏のことが氣になる。一度逢つて行かう。と思つて宿の勘定も濟まし、小さい手荷物を提げて、進藤老書記の宅を訪れた。

取次に出たのは進藤氏の夫人で、手織の袷にメリンスの晝夜帶をメめてゐた。色の白い細面の、眼に柔和の色を湛えた、一見人の好さ相な婦人、髪はくる／＼卷きにしてゐた。自分と挨拶をしてゐる中に、進藤氏は出て來て奥へ／＼と無理に通された。

「昨夜は失禮いたしました。」と見違へるばかりに謹嚴な主人公である。

「今日はお役所の方は？」

「休みました。珍客が來られるといふ識があつたのでな。留守にしては濟まんから。」

「これは恐れ入りました。僕はこれから八王子に立たうと思ふてす。」

「これから？。ぢやア、君、別盃を汲みませう。」

「否酒は一滴も行ないんですから。」

「君が飲まなきア、吾輩が飲む。酒氣が失せると、吾輩は直ちに萎れて了ふ、悲觀するから堪らない。」

と話の最中に俄かにパタ／＼と十四五羽の鷄が籬を飛越して庭の方に來るや、言ひ合したやうに、菜の葉を啄みかけた。

塒舍の方から長い竹竿を持つて來た少年は、

「先生。駄目です。皆があの塒舍を飛越して畠を荒らすんですもの。」

「泣聲を出すな。そら又二羽飛び出た。仕方がない。

其儘にして置け。」と云て「鷄屋の内職を始たです。」

「大層御稼ぎになるンですな。」

「稼ぐ？」變な目をしたが「稼ぎにア少しもならん。番をする人間までが、鷄と同様に無作法でな。何時庖厨の肉を胡麻化すやら知れんからなア。どうです先生、あの薔薇は？」

狹い畠地には薔薇を植えてある。二羽の名古屋交地が地に穿つて腹を溫めてゐる。

「役所の宛がい扶持では酒が飲めんから鷄を賣つては醉ふのです。醉中有樂趣て、李白ぢやないが一斗自然に合するぢや。お村。お村、酒を出してくれ。お客様と醉つて語るのぢや。君。あのよく肥えたのね。あれは膏がのりましたよ。一つあれを絞めやう。」

鷄屋の主人は、椽側の草履を引かけるや、馳け出して睦まじ相に夫婦て、花下に眠つてゐた白い牝鷄の首を握つて拉げて來た。

けたゝましい鷄の哀聲は園に滿ちた。鼠色の壁に凭れて姉娘は、赤い帶を日光に照榮さして茫然と此方を見てゐる。弟は踞がんで、砂の上に臀をつけて、砂こねに無中だ。

この寂れをる一家の中に自分は坐つて、觀察の眼を光らして同情の心に燃えてゐる。

客を見て賣品を惜氣もなく「絞め樣か」をやる進藤氏は、何より第一に酒の興が浮んで來のであらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

その後の頁を開くと、

〇月〇〇日

多摩の謫に進藤氏に逢つてから一月ばかりして自分は會社へ出やうとすると、郵便脚夫が一葉のハガキを手渡して行つた。慥かな筆蹟で。

「鷄肥えたり、一醉催ほし度ものかな、君も奉公を可い加減にして明日の土曜を多摩川畔に暮らしなされては如何酒あり肴なしこの良夜を如何などゝ貧乏めいた事は申さず、酒は昔を思ひ出せとか灘の友より樽を贈つてくれた。鷄は手前もの。商賣するなどの野心グワラリと捨て申候」とある。

食ふに鷄ありか。と自分はしばらくこのハガキを手にして車の上でも種々なことを想像した。

その後この人は如何したらう。すべて過去は雲の如く、瞬く間にその影を止めないが唯自分の腦髓は深くこの時の光景を印刻して忘れ得ないのである。

witch like her mother, she sewed a charm inside them. Then when the King was absent, she took the little shirts and went into the wood, and the ball showed her the way.

森中に入れば糸毬は城への途を示せり。

The children, who saw from afar that some one was coming, thought it was their dear father, and full of joy ran to meet him. Then she threw one of the little shirts over each of them, and no sooner had the shirts touched their bodies than they were changed into swans, and flew away over the wood.

小供等は遙より來る人あるを見，愛する父の來ませしなりと思ひて走り出て歡迎せんとするを捕へて后は各自に襯衣を頭より被せしに，襯衣の身躰に觸るゝや直ちに小供等は白鳥に變じて彼方の空に飛び去りぬ。

The Queen went home thinking she had got rid of the children, but the girl had not run out with their brothers, and the Queen knew nothing about her. Next day the King went to visit his children but he found no one but the little girl.

一人をも餘さず子供を拂ひ除けたりと皇后は思ひて歸りけれど，小女のみは，兄等と共に外出せざりしを后は知らてありけり。翌日王は子供等を尋ねしに，こは如何に，小女の他誰をも見ず，

"Where are your brothers?" asked the King.

「兄樣方は何處に？」と問へば，

"Alas, dear father, they have gone away and left me alone!" she answered and she told him that she had seen how her brothers had flown away in the shape of swans.

「アー父君よ，兄上一同此身一人を置去りて，何處へか行きませり」とて白鳥に化して飛去りし由來の一部始終を談りけり。

(continued)

（つゞく）

daughter was sitting by the fire. Though the girl was beautiful, he could not look at her without secret horror. After he had taken the maiden up on his horse, the old woman showed him the way, and the King reached his palace again and there they were married. The King had already been married once, and had by his first wife seven children, six boys and one girl, whom he loved better than anything else in the world. As he now feared that the new Queen might not treat them well and even do them harm, he took them to a lonely castle which stood in the midst of a wood. It was so hidden, and the way was so hard to find that he himself would not have found it if a wise woman had not given him a wonderful ball of yarn.

When he threw it down before him, it unwound itself and showed him his path. But the King went so often to his dear children that the Queen became curious, and wanted to know what he did when he was quite alone in the wood. She gave a great deal of money to his servants and learned the whole secret. And now she knew no rest until she had learnt where the King kept the ball of yarn; then she made little shirts of white silk, and as she was a

内にて爐邊に坐し居たる娘は美人なりしかど，見る毎に密なる恐怖の念を王に懐かしめけり．王は馬上に彼女を坐しめし後，老婆は道案内をして彼等を山中より出でしめ，終に王は宮殿に達するを得．華燭の盛典を擧ぐ。王には元再婚にして先后に六男，一女あり　世界中の何物よりも王には此七子こそ尊かりける。王は繼母の子供等を慘酷にし而も彼等を害傷せんを恐れて林中に孤立せる城中に隱せり。其道は全く隱匿して王自身すら迷ふ計りなれば，若し考慮深き其賢女の糸環なかりせば，彼は其城に行く道を見出し能はざりしは必然なり。

王此糸環を己が前に投せば，直に糸自から解けて行く道を示すを常とす．彼屢々愛子の許に通ひしが故，皇后不思議に思ひ，何故王は獨りて森に行くやを調べんとし，侍從等に多額の金子を與へて終に秘密を發けり。彼女は其糸環の收めある處を知るまでは，安心のありし事なし又彼は白絹にて小さき襯衣を造り，自身も彼母の如き巫女なれば呪物を縫ひ入たり。斯くて王の不在を見計らひ，襯衣を提へ

As every word we utter leaves an impress on some human heart, let our words be kind, polite, and true; that the impress may be that of the rose and not of the thorn.

Reverence the highest, have patience with the lowest.

我等の一言一句何人かの心に印象を與ふるものなれば，吾人の談る處をして常に親切に，慇懃に，眞實たらしめ，斯して荊棘にあらで花をば常に印象たらしめよ。

高貴なるもの敬ひ，卑賤なるものに忍耐せよ。

The Six Swans.

六羽の白鳥

Once upon a time a King was hunting in a great wood, and he had lost his way. He tried to find a way out of the wood, but could find none. Then he caught sight of an old woman who was a witch.

"Good woman," he said to her, "can you not show me the way through the wood?"

"Oh yes, I can and I will if you in turn will do one thing for me," she answered.

"What is it?" asked the king.

"I have a daughter," said the woman, "who is as beautiful as any one in the world; if you will make her your Queen, I will show you the way out of the wood." In his sad plight, the King agreed, and the woman led him to her little hut where her

昔し王ありて，一日森林に狩獵に出て途に迷へり 彼は森より出てんと勉めたれども能はずして，途に一老巫婆に逢ひたり。

「お婆さん，此森から出る途を敎へて與れぬか」と彼は依賴せり。

「敎へて上る事は出來ますが，其代一つ用をして戴き度い」と返事す.

「何事か」。

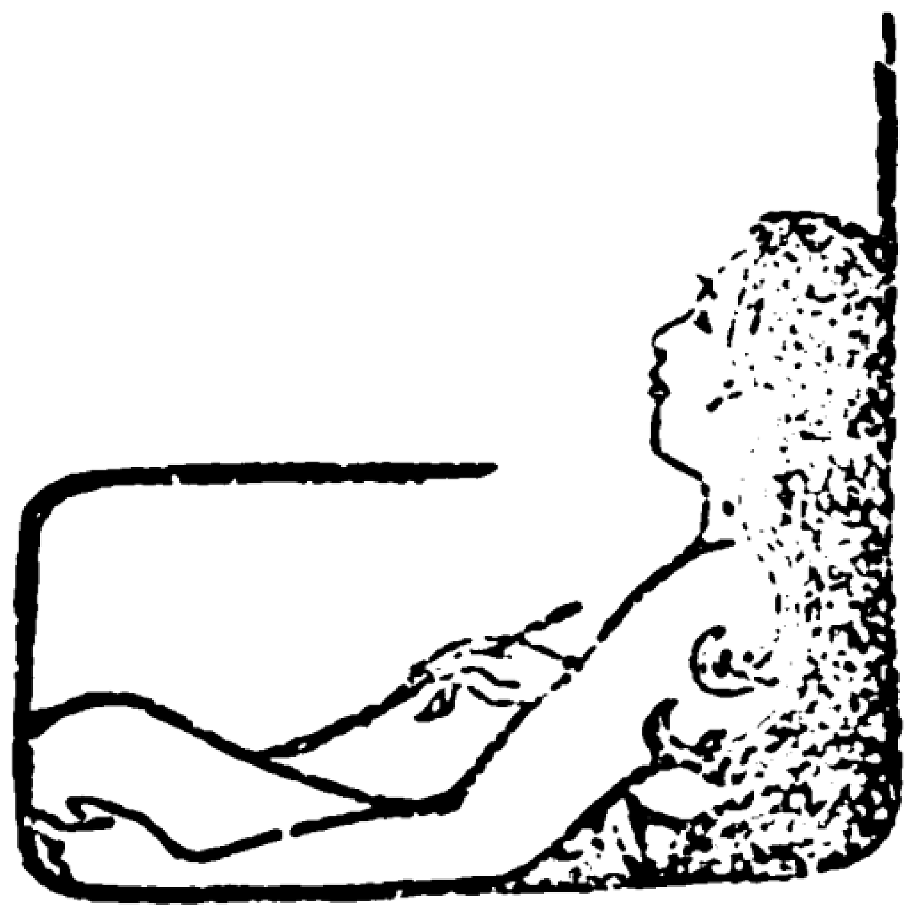
「實は手前に一人の娘があり世間に出して恥かしい器量じや御座いませんから，此子を御前の御后にして下さいますならば途の御案內を申ます。」

王は進退極りし時の事とて，老婆の云ふに合意したりければ，嫗は己が小屋に王を伴ひけり

英　文

（第四年第二回）

女子英學塾講師 河井道子



Winter.

Why must the flowers die?
  Prisoned they lie
In the cold tomb,
      helpless of tears or rain.
O doubting heart!
They only sleep below
  The soft white ermine snow,
While winter winds shall blow,
  To breathe and smile upon
    You soon again
        (A. A. Procter.)

冬

花や何故　　死すべきぞ，
涙も雨も　　届きえぬ
冷き墓に　　閉ざされて。

疑惑者よ！
彼等は白く　　柔かき
雪毛の下に　　眠るのみ，
北風止む日　　復活り(ヨミガヘ)
君に再び
　　　　　　笑むがため。

Golden Texts.

It's grood to put a bother awa yover night. It all straighten sout in the morning.

A good face is the best letter of recommendation.

The place of duty is the place of power.

Be loving and you will never want for love; be humble and you will never want for guidance.

金言

憂慮は一夜片附け置くを良策とす，翌朝全く消失すればなり。

善良の顔は最上の推薦狀なり。

責任のある處には勢力あり。

愛らしかれ，然らば愛に乏しからず．謙遜なれ，然らば敎導常に汝の身に添はん。

新進作家一口評

○正宗白鳥　長く讀賣新聞の記者をしてゐる人だが評論から創作に移つた、評論に現はれた個性が創作にも現はれて居て其皮肉な我儘な處が却つて面白い。

○眞山靑果　天才と言ふ點では白鳥の上に在らう、筆も現代的で舊い型に捉はれてゐない、少し貫目のあるものを書いて見たら何うだらう。

○水野葉舟　筆の柔か過ぎるのと暢びすぎるのが缺點だが、詩人らしい優しい情の籠つた作を書く、大いに人生に觸れることだ。

○佐野天聲　脚本家として新しい意義を持つて居る單に作家としても超然たる處があつて末頼母しい。

○山崎紫紅　此人も脚本作家として近來大いに活動を初め出した、舞臺の事を心得て居るから其作は場に上る機會が多からうと思ふ。

○森田草平　白楊とも言ひ一定した號もなく作物も際立つたのがないから眼に立たないが、文學士で此れだけ拔けた人は少い、今に文壇に立つさうだ。

○小川未明　短篇作家の中では最も名を知られて居る、詩趣に富んだ若々しい筆が又若々しい人の胸を動かすのであらう、まア大いに苦勞したまへ。

○窪田空穗　出さうで出ないものは窪田君の傑作である、態度が餘りじみだから世間でも容易に認めない我等ヒイキ連の爲に今年は奮發して貰ひたい。

○高仲銜子　佐久間、太田、重田など云ふ新聞秀作家も澤山のる中で一番書放しの亂暴な作を爲すのは此人だが、けれども見處もある。

○原田讓二　不思議に閃めくやうな天才的な言葉があるかと思へば、不透明な文字が列つて居る、要するに未熟の作品が多いけれど氣を附けて置く一人である

○岡本靈華　餘り知られないけれど、一寸新しい描寫があつて、或は新進作家の一人に加るであらう。

○西村醉夢　東京朝日に入社てから餘り作を見かけないやうだが、作家として此人の定評は未だ聞かない或は本人も未だ得意の作が出來ないのであるまいか。

○生田葵山　あまり新進でもなからうけれど、所謂自然派の方に屬する作家で、出來不出來はあるが概して新しい。

○佐藤紅緑　自然派と云ふことを誤解してゐるのではあるまいか、好んで「復讐」のやうなものを書くと云ふのなら自分は此作家は嫌ひ。（山頭火）

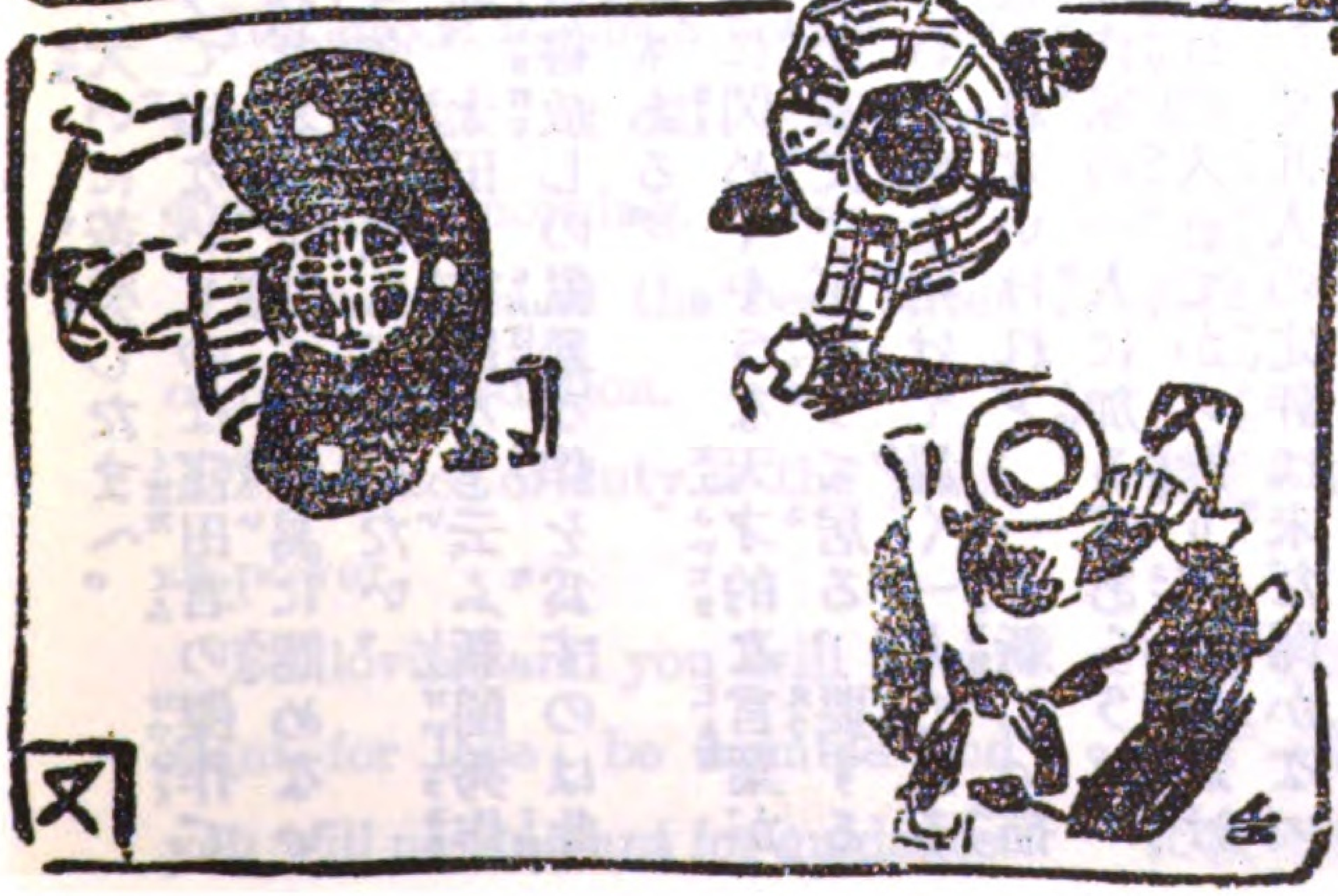
山中古洞先生選

當選繪畫（其二）









(1) 朝寒（二等）　美濃國關町杉山省三方　杉山るい子

(2) 內職（三等）　水戸市馬口勞町二丁裏　立川しげ子

(3) 料理（四等）　麻布區笄町六番地　簗田ちか子

(4) 二階から見た通行人（五等）　府下南多摩郡恩方村　中島縫子

美文



編輯局選

▲規定　本欄は他の各欄以外の一般の文章を採錄す、二十四字三十行以內、用紙は半紙又は罫紙、一人一章に限る事、投書締切は每月十五日、賞品は甲種懸賞規定に據る。

二等　○顔剃り

埼玉縣大里郡吉井村　中村勝子

「さあ少し仰向いて」と母樣は額を濕す。鏡に寫つて た顔を仰向ると暖い太陽の光で眩しい、眼を閉る途端スイ〳〵と剃初める。眉を終る、パッと眼を開くとクルリとした濃い眉がクッキリ鏡に寫る。今度は頰、恍惚として軒の雀の聲をきいてゐると、何か默つて膝に上つた。密と手で探ると軟かい毛が指先に觸る。玉だ。咽喉を搔てやるとゴロ〳〵云て私の手をなめる、くすぐつたい、ホホ……と噴き出すと「マア何だね切るかと思つて吃驚したよ」。手を後に引と玉は眠つた樣子。急に暗くなつたので眼を開くと顎を剃るので母樣が太陽の蔭になつたのだ。暖い母樣の息が顔にかゝる、鼻の穴がよくみえる。眼の玉も二つ此方を向つてる。常の母樣ではない樣、やがて剃終つた。今度は顎、二人の顔が鏡に寫る。親子でも母樣は瓜實、私は圓顔、母樣より色が黑い〳〵といはれてるけれど二人比べてみると私は血氣盛んなだけに艶がある、嬉しい樣な氣がするかと思ふと鏡の顔がニコ〳〵、あわてゝシカメ顔する。カラコロと下駄音高く門前を通る、誰かしらと出來るたけ橫目をしたがみえぬ。うつむいてメリンス前掛の牡丹花に蝶の飛んでる模樣を感心してみてゐると、束髮が段々下つて額越しに前髮が一寸五分もみえる樣になつたかと思ふ途端、前の櫛がスルリと拔けて緣側から辷つて地に落る。玉がムックリ起て飛出すと南天の下に居る雞が一齊にコケッコーと首を伸す。水仙の根本に餌を求めてた雀もパッと飛立つ。「サア奇麗になりましたよ」氣がついて鏡をみるとサッパリした私の顔と母樣の優しい笑顔がうつゝてる。暖い太陽はもう大分のぼつた。

機に入り微を穿つ、寫生文の上乘、此位ゐ自由に筆が動くと、自分でも文章を作るのが面白いでせう（評）

三等　○名殘の夕

羽後　柳子

思へばタイム程早いものはない。昨日迄紙の雛樣作つてあそんだ自分が、あゝ明日はいよ〳〵。泣ひたり笑つたりおこつたりすねたりして母樣からしかられて來

た十八年、あゝまるで夢の樣、ふりわけ髮を隣の梅ちやんの樣に結んでくれとせびつた事、半巾の帶にくちらを入れてもらつたうれしさに、一里半の叔母樣の所へ無斷に見せに行つた事や、絹糸かけの毬を井におとして同じのでなければ入らぬとだゞをこねて町中をさがさした事等もある、それから十六の春、お嫁にゆくのがいやで〳〵泣いて死んでしまふとて家を出た事もあつた、自分は眼をねむつてじつと机にうつ伏せになるとこし方がまぼろしの樣にうかんで來る、と行末の事までだん〳〵泉の樣にわいて來て、色々の感想がもつれ〳〵て糸の樣になつてしまふ、ふと目をあくと床の上に最愛の人形の環ちやんがにこ〳〵笑つて足をのべてる、なつかしさにつと取りあげてひしと抱いた、あゝ十八の今日迄毎日惡い顏一ッしないで自分をなぐさめてくれた環ちやんとも明日はわかれなければならぬ、あゝ私は最愛の環ちやんさへつれて行く事を許されないではないか、もう明日からはなつかしい此の六疊の室ともはなれなけりやならぬ、一日もはなした事のない「花守」さへ許されぬ、一冊の書類も許されぬ、あゝ………そして自分はもうじみな手織のめくら縞に鍬をもたねばならない、なつかしいお母樣、こはい、でも好な父樣、可愛い妹皆今日一日の名殘！朝夕詩にあこがれた、櫻川の堤も明日からは再び見る事が出來ぬ、悲しい！あゝ私はどうし樣お嫁になんか行くのはいやだ！あゝ何故こう年を早くとつたろう、涙は瀧の樣に頰を流れる、突然後から姉ちやんとおぶさる妹、はいと涙をおし拭ふと妹は前にまはつて自分に抱かれる、常ならうるさいとおしのけもし樣が今日はたまらなくなつてしつかり抱いて「道ちやん、姉樣が居なく成てもおとなしくするんです」よと涙にぬれた頰をぴつしやりつけると道子はだまり自分の目をみつめながら「あゝおとなしくするわそして大きくなつて姉ちやんの樣にお嫁にいくわ」………あゝ道ちやん、何といふ無邪氣な言葉でせう私は道子が羨ましい、何故私はこう年をとつたのでせう、「道ちやんあの人形の環ちやんを大切にして下さいよ」「あゝ環ちやんかあいゝわ」と道子は私の膝をとび下りて人形の傍に行つて頰をすりつけたり頭をなでたり、私は又云はれぬ感慨に打たれて居ると後の障子がスウーとあいて一昨年嫁かれた姉樣が水もしたゝるばかりの大丸髷に小紋縮緬の三枚がさね、ルビーの光る指をしとやかについて入つていらしつた、「雪さんお芽出たう」又してものおひやかし。あゝ姉樣は都の文學士の奧樣！私は一生草深い田舍に鍬をとらねばならぬ、たまらなくなつて自分は机の上に泣き伏した。

或る方は經驗されたてあらうし、或る方は未だ經驗されないてあらうけれど、女の身として何れ一度はあるべき名殘の夕、此文のやうなのが留らない情てせう（評）

四等

○上京の前夜

三河　寒菊子

チン〳〵と十一、おやもう十一時、ひとりごちつつ母樣は表口の戸に錠を下してゐられる、母樣どうも御苦勞樣お寒かつたでせうと云へば、あら靜さんまだ寢ないの、さお寢でないか明日の朝一番でと云へば遲くも三時半には起きなきやならないにね、さあ〳〵私もうとつくにお寢だらうと思ってたのにと、今權田へ車夫を賴みに行つて來られた母樣は、お勝手の方から上つて棚の煙草入と煙管とを持つて火鉢の前に座はられる。えゝもう大概之で仕度も整つたんですけれども、つい爪を切るのを忘れてゐたもんですから。ぢやあ妾お先へ休みますよあのそれから母樣お天氣はと問へば眞白い煙を兩の鼻から出して大丈夫安心おし、まるで空はお星樣で埋つてるんだもの、さうですかまあいゝ鹽梅だこと。

床に入つては見たものゝさてどうして寢られよう、ああ明日は父上に連れられて行儀見習の爲東京の親戚へ行くのである、家に寢るのも今夜一晩と思へば急に胸が鳴り響く。生れ出てから十六年、町と云へば北の山一つ越した二里餘りの里町より外出たことはなし、去年小學の四年の時國境の城山へ遠足した時僅か二十分計り山道を汽車に乘つたことがあつたつけが、眞に井中の蛙とは私の事だらう、そんな者が日本一の都へ出るのかと思ふとあゝ心配で〳〵。併し心配の中にも嬉しさは胸に込上る。汽車中の景色はどんなだらう、百里餘も乘つてるんだから醉はなければいゝが、夫が爲仁丹の用意はしてあるけれども、新橋の賑さはどんなだらう、汽車から下りたら何方へ行かうかと迷ふつて、此春博覽會見に行つた金さんの土産話にあつたつけ、でも親戚の方が向ひに出て下さるつて云からいゝはいゝが、又其方を探すにキヨロ〳〵して、すりにつけられる樣な事はあるまいか。向ふの家へ行つたら必と田舍者つて笑はれるに相違ない。が馴れる迄はもう〳〵だまつてゐるからいゝ、それから又方々の見物はどんなに立派だらう、あゝ早く見たい、お友達への手紙には何と書かうかしら。來年の夏歸省する時の嬉しさはどんなだらう、あの村


しばかり

岡山縣　內田しげ子

壇の橋側の駄菓子屋のお婆さんが見たら、きつとあの白い歯をむき出して、やあ靜様か途方もねえ立派にならさつしてなんて云ふだらう、ホヽヽヽヽそれから敏ちやんや美ちやんのお土産は何がよからうかしら、あの喜ぶ顔が早く見たい。……あゝ何だか變になつた、今迄眞暗な天井に白く眞丸くうつてゐたランプの火影も見えなくなつた、何となくボーッとして來た。遙か向ふに西洋風の立派な家がずーつと並んでゐるのが見えるよーな氣がするが……。

上京の前夜、想像する大都會、初めて東京へ出やうとする前の晩、斯ふ云ふ感じは幾度あるだらう（評）

五等

○蟲譜

横濱市岡野町百五十八番地　牧野まき子

蓑蟲のちゝよと鳴くは、肌うら寒く時雨るゝ夕暮なるべし。世をさみて隠れたる心にもしかすがに獨居は淋しかるらん。

くつわ蟲のあはたゞしきより、くだまきの身も引きしまるやうに悲しき聲するが、蟲らしくて懷しくこそ。さるも今日の月見んとて、燈火細めて暗がりの窓に、いつかは飛び來て、鬚ふり立て、翅ぶりおかしく、まじめ顔に歌ひ出てたるは、折からの愛嬌なり。

苔嗅き杉の下路獨下るを、夕暮さそふらん世を淋しう鳴きかはす蜩の聲は、百合の香のさまよふ頃も忍ばするなり。

紙魚は、書物喰ふとて學者には嫌はるゝなるが、某の小猿が書籍を朱染にしけるを、斎生も聖の道を慕ふかと褒めたるありしかと云へば、泥溝はひありく蟲もある世は、え話さるゝなり。

早少女がつゝまし心に、えなかて身を焦しけんなき靈の、神代より天と地とに分れて、夜な／＼人なき闇をまたゝく螢の姿は、墨染の衣に、赤き、若き、燃ゆる心を藏く。さるを窓の雪の友となしけんは、其の心あまりに冷たしや。

三年越學未だ成らず、休暇なりとて汗ふき敢へず、古郷へ土嗅き畑中道をたどるに、螽斯のゆく／＼に鳴くは、行けとてか、歸れとてか、懐しくも、心細くも思はるゝなり。

夏蟬は、暑さに蒸さるゝ苦しき叫びなるらん。命ある三日を歌ひに歌ひて、歌ひ死ぬるもあはれ深しや。つくづく愛しと聞かるゝもあるなり。さるも、ゆくりなく埒の角など過ぎて、其の脱殼見つけたらんには、思はぬ味け句なるべし。

さゝがにの空兵衛姿は、わが宵子の來べき宵とは知らぬ風なり。咲く花を隔てゝ、蝶さへ入れじと、網を張りたる心こそいぶかしけれ。野馬臺の大臣が命救ひける孫は、代々蜘蛛とかゝれたり。

猫さへ炬燵離るゝ珍らかに暖かき小春日かげの、軒の端を辷りて、障子にさしたるを、かさこそと渡る蠅には、慾もあらざるべし。傘に音なく昨雨れ出でたるゝ萩れを、四つ三つと舞ひ出でたる小さき白き蟲は、何とかいふらん、日しひたる女の杖なくして迷ひ出でたる姿なりけり。初夏の蚊は、其の聲美しとか云へり。桐の葉も二つまで散りたる頃、屏風の蔭より幽かなる聲して、浮び出でたる蚊は、はか〳〵しからぬ病に侍る身には、追はん心も、なか〳〵に消えぬべし。苔の裏までもと夕日泌み入る、地藏が額のとんぼは、口に云はゞ古かるべきも、目に入らば、今日も新らしからん。何時の頃なるべきか、淀に臨む合歡の木蔭を、水面僅に離れて、徘徊するとんぼの、折々尾もて水面叩く。友の影も見えねば、こはさびしかるべし、折から降り出でたる雨は、一つづゝ數へらるゝなり。

所謂俳文式、今の世には珍しいもの、作るもよし、作らぬもよし（評）

秀逸

○文さんを思ふ　紀伊　室谷忠子

「文さんは今頃どうして居らつしやるだらふ」と不圖夕方思ひ出して、戀しくなつてたまらず、何のあてどもなく内を出て前の道を思に沈みながら辿りました。「文さん」は私の唯一人の從姉であります、しかも二人は生れてから一度も會ふた事はないのです、實に二人は紀州の南の涯と北の端とに分れてゐるのです。陸路を行けば山道許り三十里、猪ヶ瀬大石が峯等が隔て、海路を渡れば二日路、世に言ふ荒い紀州沖が仲を分けてゐます、かくして私等は磁石の南北ひく如く、南と北とで互に想ひに思ふて暮らしてゐます、私は姉も妹もありません、文さんもありません、誠に二人は同胞の温い情と言ふものを知らないのです、二人がお互に會いたいのも無理はありますまい。噫一度あいたい手を取りあつて心ゆく程泣いて話したい夫が今私等の願です。「貴女を思ひ出しては獨り海岸に立ちて私は泣きました秋の日の暮るゝも知らず涯なき海原を眺めては身も世もあらず我を忘れて冷き砂上に俯しました」是は此間きた文さんの手紙の一節であります、私は是を讀んで亦其夜も枕の紙をしとゞに濡らしました、噫私等は一躰いつ會はれるのだらふ、こんな優しい姉となぜ神樣が逢はしてくれないだらふ、あゝ海と山が中をへだてゝゐます、いつしかに私は水涸れ砂長き小川の岸に立て居ました、うるみし目に西も東も蒼々たる夕靄にこめられ空には星の影二つ三つきらめきそめて、うすら寒い風が枯蘆をざわつかして涙の跡乾かぬ頰を

うちて思を亂しました、私は胸を抱いて口の中で「あゝ文さんはどうしてお出だらふ」と再びかてちました。

情の迫つた文字（評）

○孤島の冬　豐後　鈴木さち子

寂しく且つ傷はしいわが姫島の冬は來た。

啾々として松吹く風は嗚咽するやうにも聞こえる、轟轟として岸打つ波は號泣するやうにも感ぜられる。稻積岡の野菊の花は皆色褪せて、毛呂志坂の虫の聲も既に盡きた、明神の鼻に賑ふた磯歌も聞かれずなつて南濱に盛つた大式網も最早や撤せられて仕まつた、一昨日は沖の洲に難破した船が打上つたと云ふ、昨日は北浦に女の死躰が漂着したとも云ふ、何といふ寂しいことであらう。

鐵娫村の杜は痛く瘦せた、比賣古曾祠畔の紅葉も悉く散つて了つた、大海山の松林に慘とした日が照るかと見れば、新開の鹽田が陰として時雨れたり、海岸寺岬から哀れな鐘が響くかと思へば、初手浦の遶りを悲しさうな千鳥が通ふたり、なんと云ふ傷はしい景色であらう。

門に立つて菲行く海の色を望むでは、座ろ鬼介ヶ島の俊寛がことども思出さるゝ、窓に凭つて遠く流れる雲を眺めては、蠻地に泣いた昭君のことなど荐りに偲ばるゝ。

今日は又降つたり霽れたり、明くなつたり晦くなつたりして、種々のことを憶ひながら半日を唯だ寂びしく暮した。雨のはれ間を外へ出て見ると、つい復た心が故郷の方へと走る――。霜に飽いた木通が澤山に生つて居るあの白雉の山、鴨や雁の面白さうに遊んで居るあの中田の沼、四ッ手網のところ〳〵に見える夏川の土手や、稻城の彼處にも此處にも作られてある仙賀田の里道や――。懷かしい、歸つて見たい、些と世界的の心になつて呉れよと仰有つた兄さんが、六疊に今怎麼夢を見て居らるゝやら……。

吁！われを泣かしむる孤島の冬は來た、北より吹く冷たい〳〵風に乘じて來たか、遙かに寄せる白い〳〵浪に送られて來たか、孰れにしても周防灘の一孤島に＝荒涼たる此姫島に＝何時か冬は襲ふて來たのである。

筆は達者過ぎる位ゐて、らくなものだ（評）

○破笠　山形縣　しら浪

人目を忍ぶ破笠の、果敢なきものは我身なる哉。

秋の小川の水やせて、疎らに立てる枯蘆の、淋しげにゆらぐ風の冷たく、野の一つ道、人も通はぬ寂ながらこの笠の緒の永劫にとけ得ぬ、我身の果のそゞろに心細し。

名をも戀をも振り捨てゝ、あぢきなき身のたゞ獨、浮世の外に朽ちばやと思ひ定めて、家を出づる時、やが

てはこの笠の破れんころこそ身の病も重もりて、共に野末に果つる頃ならんとは思ひしが、あゝ今更に三年はたちて、笠の紅緒もあせたり。

花咲く頃は、都大路をさまよひて、不圖行摘りの花の如き姫たちを、淺間しうも振り返りて涙ぐみしも幾そたび、曾ては契りし其人の、今も尙學べるてふ早稻田の畔とりをそゞろあるきて、白堊の校舍に泣きし夜も一夜のみにはあらざりし。

紅葉のころは故郷近く迷ひきて、父母の君の健やかに座すときゝては、今一目、逢ひ逢ふて死にたやと思ふ心の切なりしが、この恐ろしき姿して、何を仇なる願ぞと、涙ながるゝを拭ひもあへず、秋とはいへ朧げなりし月明りに我家のかげみつめて立ちしも幾分時、女々しやとのみ顧みもせずに馳せたりし。

かくてかくして、浮世をば、我から捨てし我ながら、誰一人かへりみる者もなき、冥府の寂寞のそれのやうなる孤獨の身、朝夕に念ずる唱命の數は重なれど、何意味もなき大鼓の音の、トン〳〵と我が命を數ふるやうなるに、言ひしらぬ情なさと腹立たしさとを感じては遂にたちかねし煩惱のよしなき思ひ一思ひ、たゞ一思ひに、つゞれのこの衣ひきちぎり、破れし此笠ふみ碎き怒濤逆巻く下を望んで斷崖の上より飛ばんと、狂ひしこともありしが……。



ラツパ節　　山形市　山口そま子

死にも得ざりしあぢきなき身は、病はやゝに重りきて今幾日の生命ぞも、この簑の何處にか、あなたの橋の袂にか、我醜き骸髏横たへん地ぞ、淋しく殘れるあせし野菊の一本よ、汝ぞ我が、冥土の道しるべする手向かや、その花によれる白き小蝶や、汝が彩羽もこの秋風になぶられて、いたう汚れたるにあらずや、汝とても我が道連れの友ならん。

行かばやな、地の底には樂しき國もありと聞きぬ、いざ小蝶よ花よ、行かばやな。

父母よ同胞よ戀人よ、我は今こゝに二十二の短かかりし世を辭して、先だちて待ちまゐらせん、この世の限り幸多く榮えませ。

無限の情は胸にわけど、疲れはてうゑはてし身の、訴へんよしもなくすべもなし、こゝに、人にしられで逝くべきぞ我運命。

悲しきか、あらず!!　あらず！　嬉しきか、あらず――

唯紅涙の醜き頰をうるほして、限りなく流るゝよ。

讀んで血涙の痕滲々たるを覺ゆるもの（評）

○善光寺の朝　長野市　紅ばら

昨夜から降つた雪が今朝は五六寸も積つた下駄のはが

うづまりさう。

此の中を大本願寺様の御一行が凡そ十人許り本堂へ御つとめにと。

紫の御衣に御つき人の緋の御袈裟が一しほ崇高で御先き拂ひの木綿の黒紋附まて例もより品が上つた様な氣が致します、殊に御老尼様の時は涙がこぼれるやうです、たまに來た參詣人は被り物をとつて敷石に屈んで御數珠を戴きます。

大きな山門を上ると豆賣と甘酒屋が店を開いた許り、二百羽程の鳩が豆賣りの前に集つて餌をひろッて居ります、豆をやると皆寄つて來て可愛いものですよ。

本堂から御つとめがすんで歸る坊さんの頭巾は面白い形をしてをります。御一行が本堂につくとカンカンカンドンドンと鐘と太皷の音が市中にひろがるのです。

左手の忠靈殿には老尼がカン／＼と朝の讀經に忙しく、若い尼さんは落葉のまぢッた雪をかきのけてをります。皆様春や秋の參詣人の多い時より冬御出で遊ばせ三國一の善光寺様の有難味は寂寞の中に一しほで御座います、又境内で賣る名物三國一の甘酒の味も一しほで御座います。

趣味のない句が處々に挿まつてゐて、善光寺の切な簡潔な文章に現はしてゐるが、今少し詳しく書いたらばと思ふ（評）

○海中のヴアヰオリン

備後　中山八千代

燈臺の光が浪にきらめいて居る前を通つて、櫓を押す手の疲れた頃私の舟は幽靈沖へ出ました、廣い海の眞中、岩もなければ風もない晩　浪音一つしませぬ、月の二十日には私の小舟は幽靈沖へ出ます、固より釣をする積でありませぬから竿は持ちませぬ、漁するのでもありませねば網もありませぬ、私は櫓の手を止めて舟の艫に立ちました、手にヴアヰオリンを持つて……奏でんとして胸迫り涙は袖を濕らせます、徒らに時を移したなら夜露は絃を濕らせて音が出ますまい、涙を拂つて弓を上げて奏で初めました「悼友」の一曲……風もないのに櫓も押さぬに舟は漂ひ初めました、友は今日も忘れずに黄泉國から來たのでせう、友は在學中からピアノの名手でした多大の希望を抱いて旅立つた友は、海外の音樂界を驚して歸つて來ました、然じ悼しくも故國の地を踏まずに海底の藻屑と消えました、幽靈沖と名ある北海で……八年間の苦心も功もあはれピアノと共に、永久に葬つて仕舞ひました、人生の半を過る二年の秋、二十日の月淡く照す時……今し奏で終りました「悼友」の曲は、三十日間の苦心になりました曲です、文の未熟もありませう曲の可笑い處もありませう、然し私は友を慰るに足るといふ自信を有して

居ます、友はピアノと共に沈みました必ず合奏して呉れませう、暗にもしるき白き紙はヒラ〳〵と海に落ちました、曲と歌とを友に送つたのです、再び弓を持つた私は涙も乾いて居りました、友が得意のヴインナの進行曲は、私の弓から廣い海に漂ひそめました、二十日の月は海から出て船の動搖は、いつか止みました。

少し氣取つてゐるから、悲みは深くない代り興趣は多い　（評）

○栞　越前　永宮こよね

天地の萬象將に沈靜の期に入らんとする晩秋の一日であつた。妾は何をして見ても面白くない――氣が浮かぬ――何か玩物でも仕やうかと、針箱の引き出を見ると、一男の君に頼まれた栞の編みさしが有つたので、今日は是を仕上げやうと手に取つた。

ガラガラガラと門口の障子が明いた。誰か來たのであらうと勝手の方へ氣を配ると、バタ〳〵と馳けて來た妹「姉さん春野さんがいらつしやつてよ」――「あらそう」と迎ひに出やうとすると、早春野さんは入つて來られた。「何をなさいますの」と例の通り愛想は宜いが、何となく淋みしい、そして其の笑みがわざとらしい、變な一種特殊な表情をして居る。

「どうぞ是れをお敷きなすつて」と座蒲團を進めたが何時になう辭儀をもせずに座はられながら、先刻讀んだまゝ、たゝみもせずに置いた新聞を見つめて居られる。

「寛さんが奧さんを迎かへられるんですつて」と突然から云はれた、「何處から？」と聞くと「妾等と一級下だつた吉江のおみきさん……　知つて居られるでせふ」「あゝ知つて居ます知つて居ます中々ピーでしたね何でも寛さんと從兄妹ださうですね」「さうです」「美はしい家庭が出來ませふ」といふと「一年か二年」と低い憚る樣な聲てから云ふて春野さんは口を結ばれた二人の會話は是て切れた。

春野さんは妾の膝を見つめて居られるが、其眼には妾の膝が映つて居ぬらしい、そして怪しきものを宿して、唇をいま〳〵しさうにかみしめて居られる。

妾は其瞬間ある事を悟つた、そして春野さんが歸へられた後、二度編みさしの栞を手にする氣にはなれなかつた。

○入湯の一日　信濃　花園守

曉の鹽野はしんみりと、秋の寂寞に包まれて、まだひつそりと眠むつて居る、朝寒むの微風は寢亂れの鬢を吹いて頰より襟に、襟より乳に、さと泌み入つた。

ぶどう棚の下に彳づんで、心地よう霧こむる村を見入つた時は、知らず無我の境に入つて、次第々々に恍惚に落ちたのである、突然、起つたとうみあほる音、ハツとして長い〳〵夢から醒めた樣に我にかへつた時は淺間の山も眠りより覺めて、今新らしう白煙を吐いた

處、あれ、風に吹かれてゆら〳〵と東へ流れた。

七町の野路をゆつたりした馬士の鄙唄にほゝ笑みつゝ大谷地についたのはかれこれ八時頃でもあつたろう、今日は珍らしう、上の湯にもお客があるかして、煙筒からは細々と煤煙が立ちのぼつて、末は何處に消えゆくやら、ひら〳〵とさ迷ふも暫し、忽ち風に吸ひ込まれてしまふ、二階の欄干にはいつになく白い手拭がひら〳〵と、折しも淺間颪しの北風が、松の梢を鳴らして、ハタ！と障子に打ちつかつたと思ふと、ガタビシと破れ目をくゞつて吹き入るに、ヒヤリッとして急ぎ湯槽に飛び込んだ。

湯は丁度、蓮葉に宿つた玉水のそれの樣、淸く〳〵すみ渡つて居る、いつもの鹽野のおばさんは、今日も其てつぷりと太た赤ら顔の、つや〳〵しい笑めば赤兒の樣な、まる〳〵した手でまる〳〵した子を抱いて入つて居つたほんとに愛くるしい子、四つばかりの。

「おゝ大變かわいて來ましたね、お利口です事、母ちやんの云ふ事をよくきいておとなにおぶうへ入たからね？そら口もよくあけるでせう、お菓子も喰べられる樣になつてよかつたのねぇ」といへばにこ〳〵して猶もほめられようとてか、口元迄も湯にひたして得意顔なる可愛らしさ「ほんにまあつやちやむは利口になつたいなあ、姉さんにほめられて、そらおばあさんもほめてくむなさるよよくとうじろ利口だなあ」と母さんは上げたり下げたり。

夕ざれば細道いそぐ馬の鈴の音、森や林の繁みからは名も知られぬ鳥の悲鳴が寂しう物哀れに聞えた、冬枯れ落葉ハラ〳〵と雨よりしげきを肩にうけつゝ、五日の月の淡い影を松の木の間に眺めながら、鹽野へ歸つた、あのおばさんは、手かけに脊負ふた艶ちやむ重そうに、一しほ赤い其の顔を、夕風にふかせ乍ら妾等の後から。

○歸り路　　播磨　女郞花

二時間も待つてやう〳〵に汽車は香呂驛に着いた。もう十分と赤切符を買ふて南方ばかり見てゐると間もなく我が待つ驛に停車した。今日はなぜか播但に似合ぬ乘客が多い樣である、驛夫の開けてくれた所へはいり其一隅に腰を下した。定期通ひらしい人、大の風呂敷包をかゝえたばあさんもある。「はア左樣々々」と大阪言葉を使ふて得々と話し合ふ番頭らしい人も居る、ヅッと向ふに洋服いかめしい紳士その傍らにハイカラ的の奥樣らしい人も居るが夜汽車のせいか女の乘客が少ない。

紳士の上の網棚にはみかん籠と手さげかばんがのせてある、其横に新聞紙で包んだかるそうなかさの高い物もある。時雨て外は眞の闇、車中は二つの瓦斯燈で明るいが外は一寸先も見えぬ、唯市川の水瀬がかすかに聞える、あまり卷煙草の煙で陰氣であると思ふて窓を

開けると身にしむ様な夜風、おどろいて身を縮めつゝ戸を閉した、彼れ是れする内自分の下車すべき驛に着いた。驛夫に開けてもらつて下りた。なんだか向ふの奥様風の人が頻りと自分の方を見てゐる。自分も見覺えのある人らしいと思ふて見てゐる、そしたら突然と向ふからあら村田さんでなくつてと言葉をかけられたので、ふりむけばまあ殿村ひてのさんであつた。ひてのさんは自分より五六つ年下で自分が專修科生であつたときお下げの可愛らしい子であつたが聞けば今年春神戸へ縁付かれたとか「まあほんとうに暫くでしたね」「貴女只今何處に」と尋ねられた時はなんだか恥しい氣がした「私矢張り以前の學校です」貴女は御實家へ」と尋返すと「エー俄かに用事が出來てそれで同伴に」と「彼の紳士が御良人であつたらしい」ちとお暇の時お遊びにいらしやいな楠公さんや生田でも御伴いたします「はい有りがたうと答へて「大變むさい所ですがお歸りにお寄り下さい」と云ふた汽笛と共に動きだした。左樣なら〳〵と云ふ聲の中に暗にかくれてしまつた。此次の驛がひてのさんの下車しられる所....驛から五六丁で自分の家がある、闇の道を通る時も友の姿がありありと見えてうらやましい樣な、又自分の今の境遇が如何にもあはれの樣な感じがした。歸つて見れば母と妹とは細い「ランプ」の下で何にか話し乍ら縫物をしてゐる。....母樣只今と云へば「おゝ御歸り今日は遲かつたね寒むかつたゞらう」と柴折つてたきつけて下さる、之れを見ればもうむね一つぱいになつた。



初日の出　澁谷村　田中若菜子

○猿曳　（日課の一ふし）

熊本　富野かず夫

二月五日村の子の噪る聲のうちに猿曳來る、十あまり四つ五つと覺ゆる小娘の面は美しきが、赤き頭巾赤き衣まとへる小さき子猿をおへるなり、優しの猿曳よ、よくも亡き妹に面ざしの似たることよと母はのたまふ、あまりの憐れさに處はいづくといへば信州長野市なりと答ふ、父母やあると問へば父も母も在さずひとり旅なりといふ、あはれ年端もゆかぬ少女子の身をもちて、遠く故郷を去り、見知らぬ他郷にさすらひて便るはたゞ一つの子猿、子猿は小娘を便り、小娘は子猿を便り

にその日その日をかせぎ行くいとしき猿曳よと、そゞろ悲しう思はれて銀貨二枚やりぬ。節おもしろく小娘がうたふ唄につれ、或は跳り、或は舞ひ、子猿の姿のおもしろさ信田の杜の舞とかいひて小さき市松人形に乳をあたふる身ぶりの愛らしさ、よくも教へ、よくもおぼえつるかなと思ひぬ、やがてあつく禮のべて又子猿を脊にして出てゆきぬ、門にはまたも囂る村の子の聲々、さても吹きすさぶ今宵の風よ、思ひ出す可憐の猿曳、いぶせき旅籠屋の燈火のもといかに淋しく眠るらん、更に憶ふ、かのあはれの子猿は小娘の傍にそひふしていかなる夢や結ぶらん。

○無邪氣

伊豆　横山秀子

この二三日めつきりと暖かくなつたので、此間まてまだ蕾であつた紅梅の花が今朝はぽつ〳〵咲き始めた、花の澤山ついた小枝を一本手折り机上の小瓶に挿し、昵と眺めてあゝいゝ松だことよ！と、一寸風流人を氣取て見た、がら〳〵と障子を開けて今日はと這入つて來たのは、隣町のお梅どんて、一寸妾に會釋して奧へ行き母上と何かひそ〳〵噺し合つて居る。

「お月さんは若いなあ……」突然門前に嘯ふ聲が聞へて來て、足音が戸口に止まると歌聲ははたッとやんで「母ちやん居るの」はて誰だらうと障子の破れ目から見ると、お梅どんの子の、今年七つになる龜ちやんと五つになる初ちやんてある。

「母ちやんは來て居るのだらうか……ネ兄いさん」と初ちやんが聞くと、龜ちやんは昵と内の樣子を窺ふて居たが「母ちやんの下駄があるから母ちやんは居るよ」したり顏、さてもう内へ這入るか〳〵と見て居ても、流石に少しは遠慮な處があるか、一向入りもせず其内二人は本堂の石壇の日あたりのよい處へ腰をおろし、頻と何か噺し合つて居る、其の間に「あゝ彼處へ雀が來た雀が」と龜ちやんの聲「とりたいなあ！」「ホーシホーシ」「あゝ逃げて仕舞ふた」「母ちやんはまだ出て來ないなあ」また母さんの事を思ひ出した樣子妾は障子を開けて「龜ちやんも初ちやんも母あさんは内に居るからお這入り」「エヽ」と返事する計りで妾の顏を見て莞爾々々して居る、餘り淋しそう故「これを上げ樣」と此間迄父が服み續けてもう空になつた胃散の罐を一ツ宛やると、二人はほく〳〵喜んでまたもとの本堂の前へ行つた、妾も今暫しと机に凭れて讀殘りの婦人世界へ目を注いだ、しばらくすると「貴方もう一盃上げませふ」「へエもうよろしゆう御座います」などと云ふのがふと耳に入つたので、よく見ると二人は今妾がやつた胃散の罐へ本堂前の手洗鉢の水を掬んで餘念なく遊び戯れて居る樣子、あゝ今妾は晉見をし乍らも、この二人の無邪氣な遊びを見ては、何日の間にやら心は二人の側へ行つて仕舞ふのてある。

一枚の紅梅は机上によい匂を放つて居る。

○人のえにし

鳥取縣　紫野喜久子

けたゝましい汽笛の音が闇を裂つて七時の列車は今し第八號トンネルを出た。外を見ると切れる様に冴えた星が空に輝いて居る。突然喚がしい足音がしてお湯殿の入口にはたと留つたと同時にギーガタンと戸の音がしたがやがてだみた女聲で「奥さんお寒うござんす今夜は宜しい事が出來ましたつて・・・大勢てすみませんがどうぞ一ぱい願ます」頓に薪の燃える音がぱち〱聞え出した。今迄一心に明日の教材を調べて居た私は、隙間漏る寒風に思はず身をすくめて兩の手を火鉢にかざした。彼等の話し聲は遠慮もなく手に取る様に聞える、若々しい聲で「なんと叔母さん新屋のお咲さんは町に嫁くださうてなあ」「さあそんなちう事だが上手う纏きやあえゝがなあ・・」とはさつきのだみ聲、お咲は今年十七だ可なり暮せる家に生ひ立つた一人娘である、村方にはまれにみめ美しいのを身にかけて何でも百性は厭だ、姑小姑のない氣樂な暮しをさせたいと云ふのが母親の口くせてあつたが、此春頃親の身にはあるまじきさる富商の次男を引きつけ様として遂に失敗した。新聞紙にもうたはれた、村からは笑はれた、それかあらぬか大そう婚嫁を急いで居たが遂に「思はしい所がありまして」との事、聞けば先方には理想通り親も無し兄弟もないが、其上家も財産もない様子、實際近所の者の心配するのも無理がない。あゝあのブライトに滿ちた彼の女の心でどうして・・・私てさへ思ひやられる・・・・「奥さん大きに有り難うござんした、お早やうお休みなさんせい・・・・」ふと我れに返つて無用な想ひにあたら時間を費したのを馬鹿々々しく感じた、ゆあみ元氣に鼻唄歌ひながら彼等の歸つた後はひつそり・・・見ればいつの間にか氷る様なお月様が中空にふはりと。



雪の朝　美濃　川上ひろ子

○我家の別莊

大分縣　平田小春子

小じんまりとした我家の別莊、人里はなるゝ事十餘町、よその別莊の如く庭もついてなければ、華美もしてない。南は十四五町にして小高き山、西は小川を一つこして鹽濱、夏の眞晝熱い眞盛り、よひしよ、よひしよと引く鹽濱持の眺一しほ。東は松林續いて居る、左程の眺

は無いが、湖が滿つると松林の北方・西より東へ流れて居る隅吉川と云ふ、小さな川に異樣な風をして來る魚釣のおかしさ。北は一面大海原、隅吉川の西のはて蒸汽が通る帆前船が通る、湖が涸れると「ハデオサヘ」が蟻の樣是が自然の庭となつて居る。

近家に御客でもあると。一寸別莊貸しておくれと、多い時には二軒からも、借られる時がある、丸で料理やか何かの樣。我村には毎年六月隅吉川に人形舟、はやし舟、等十何艘も浮べ、人の集ることと田舍には珍らしい、祭日の夜是等の舟は毎年此別莊の下て「オマクド」を舞ふ、「オマクド」が終ふとみんなこゝに、集て來る。お茶屋を出したらはづむだらう。

○氏神祭

南豊　藤の家瑠璃子

舊十月十一日は八幡樣のお祭りなので、近隣五六ヶ村は老若男女の別なく、美くしい衣服を着飾つて皆參詣するのてす。引込勝ちの私を連れだすのはいつも富子さん衣裳くらべと云ふ所に、富子さんは死斯の綿入にカスリの羽織私は双子の上下、呑氣な裝ひて内を出たのは午後の二時頃てした。一の鳥居まて行て見ますと、菓子うりやら柿うりやら澤山きて居て大へんな人出、二の鳥居の上の石張りの兩側は、小間物屋が綺麗に店を張つて居る。リボンをねだつて居る小娘、眼鏡を買ふて居る靑年者、櫛をみて居るお嫁さん、それは〳〵とり〳〵です。石段を上つて石鉢で手を滌め本殿の方を見れば、澤山の參詣人が何程かの錢を投じて、口口に祈願を唱へて參拜して居ます。私等も恭しく拍子參拜しましてゆる〳〵見回る事にしました。二の鳥居の兩側に名譽齒磨と書いた看板を掲げて、垢染みた衣服を着た妙な男が色々な事を喋つて、齒磨紛を賣つて居る。東側には手品師がきて居て、さあ破入丁度よい所〳〵と木戸番が喉をからして叫んでゐる。內では大皷や笛が矢鱈にドン〳〵ピイ〳〵。富子さんは入るといふ私は見ぬといふ。つひ私が勝つて入りませんてした。例年の通り芝居も有るのてす。馬場の東の田の中に小家が立つて今日はじまつて居るのてす。それから芝居場に行きました。外から一寸と見ましたら、藝題は布引らしい、帶刀先生がでゝ居ました。內から隣村のとも子さんが手招ひて居たけれど、何だか見つともなひので家路につきました。

昔と變つて今日は、こんな田舍者でも質素にしては居ません。靑年者は、私は名もよくは知りませんが、コスメチックとかバイオレットとか申のでしよう、鼻持ちもならぬ樣にプン〳〵匂はせて、新調のインバチスを着て、どんな月給取りだらうかと云ふ樣な裝ひ。女も其通り。私は流行を慕ふのは大嫌ひ、否財政の然らしむる所てすが。年の若い娘さん方皆「廂髮但し巫なり帽子なり」といふぐあひにして、綺麗なリボン美くしひつと止め妙な櫛、澤山つけて頭を飾りたて、東コートに流行のショルで裝ふて居る。都人の夢想する質朴だの悠長だのと。當時の田舍はなか〳〵どふして……

お伽噺

巖谷小波先生選



▲規定　新しきお伽噺を創作すること、投書は總振假名つきにて二十四字詰八十行まで、用紙は前同斷、締切は毎月十五日、一人一章以上を許さず、懸賞は甲種の規定に據る。

二等

○申の新年

岩手　富士根　小枝子

或る家に、太郎さんといふそれは〳〵お怜悧な坊樣がありました。常から大層活潑で、幾ら寒い日でも戸外に出て遊ぶのです。況して今日はお正月の事ですから火燵へなぞうづくまつて居はしません。學校の式から歸ると、直ぐ伯母樣からお年玉に貰つた、猿の繪が書いてある、大きい凧を持つて外に出ました。

太郎さんはいつもの丘に駆けあがつてほつと一息、四邊を見廻したけれども、お友達がまだ誰も來て居ません。「僕が一ばんか」一人言をして糸をたぐり始めました。ところがどうしたものかうまく上りません。緩めて見たり、縮めて見たり、いろ〳〵加減をしたけれどもどうもいけません。そこで今度は凧から四五間もさきの所を持つて、風に向かつていきなり駆け出しました。すると不思議、山も崩るゝ樣な恐しい勢でブーンと呻り出したかと思ふとズン〳〵上がつて來ました。「やあ上がつたぞ〳〵おもしろいなあ」と言ひながら、手早く糸をくりました。凧はズンズン〳〵あがつて、さしもに大きかつた凧も、小鳥の樣に小さく高い大空に見えて居ます。其の中に糸はもう無くなつて、其の端を持つて居る太郎さんまでも引きあげられそうてす。太郎さんも一寸困つたが、根が怜悧な兒ですから「よしかうしてやらう」と側の杉の樹に結ひつけました。

あがれ凧々字凧に繪凧

學校で教はつた唱歌を高々と歌ひながら、手を拍つて見て居ますと、どうしたはづみか糸が切れて、東の方に飛んでいきます。太郎さんは驚くまい事か「あれいけない〳〵、そんな方へなぞ行つてはいけないよ、よう凧」兩手を擧げて騒ぎましたけれども、いつかなきゝません、遂向うの森のあたりで見えなくなりました。太郎さんは茫然して向うの方を見て居ますと、どこからともなく三匹の小猿がきて、頻りに太郎さん〳〵とよびました。太郎さんは夢からちても醒めた樣に「誰だ

い僕をよぶのは」といひますと、少し前に進み出て、丁寧におぢぎをし「私等は貴兒の凧の中に居りました「不見」「不聞」「不言」と申す三人の者で御座います」

太「して僕に何か用があるの」

不見「先刻は誠に失禮致しました」

不言「春風君に誘はれて高昇り致しますと、古郷が手に取る樣に見えますので」

不聞「餘りに家がこひしくなり、遂御許しも得ず」

三匹「何とも御申譯のない事を致しました」

太「お前達の家といふのはあの森？」

不見「否、彼の森の上に橙



色の雲が見えませう、彼れは橙雲郷と申しますが、彼處にあります」

不言「今年は私等の新年でも御座いますれば、ぜひ坊樣もお伴れ申す樣にと、父にかたくいひつかりました」

不聞「でお迎ひに參りました」

三匹「何卒御出て下さいまし」

太「だつて雲の上に……どうして僕が」

不見「その御心配には及びません」といひつゝ、何か口の中に唱へ事をし、手を擧げて三度招ぎました。するど、縮こそないが先刻の凧と寸分違はぬ凧が、ヒラヒラヒラッと、舞ひ下りました。

不聞「これに御乘り下さい」いふかと思ふと、不思議不

思議今までそこに居た三匹の猿はスイーッと凧の中に吸ひこまれ、もとの繪になつてしまひました。
太郎さんは不思議のことに思ひながら、いはれた通り其の凧に乘りますと、すぐふはり〳〵昇り初めました。やがて向うの方に恰度繪にある龍宮みた樣な御殿が見え間もなく五色の雲で飾つた、立派な門の前に參りました。するとまた三匹の猿がスイーッと凧から脫けて何れへか見えなくなりました。
暫時たつと五色の扉がサッと兩方に開き、三人のお小姓が出て參りました、「是れは御またせ申しました、何卒此方へ」と太郎さんの手を引いて「私等は先刻御案内申した猿共です、父も御待ち申して居りました」
太郎さんは夢でも見る樣な心地がして、導かるるまゝ中に入りますと、目も眩むばかりの御殿です、お玄關には、銀の樣なお鬚がふさ〳〵と胸のあたりに垂れ、眉も髮も眞白な老翁が立つて居りまして、ニコ〳〵笑ひながら太郎さんの頭を撫で「坊樣ようこそ御出でになりました、さあ何卒」といふて眩いばかりの奧の間に通されました。そして、菓物でこしらへた色々の御馳走を頂いたり、面白いお話を聞いたりしました。
餘り遲く成つてはお母樣に心配をかけると思ひ、お暇致しますと」それでは紀念として此の袋をあげませう、智の袋と申して、何か解らぬ事のある時に一寸之を覗けば、何程むづかしい事でも立所に解ります」というて、小い錦の袋を貰ひました。歸りにはまた三匹の猿に送られ凧に乘つて歸りましたとさ、めでたし〳〵。

（評）趣向も面白く、書方も馴れたものです。

三等　○羽子板

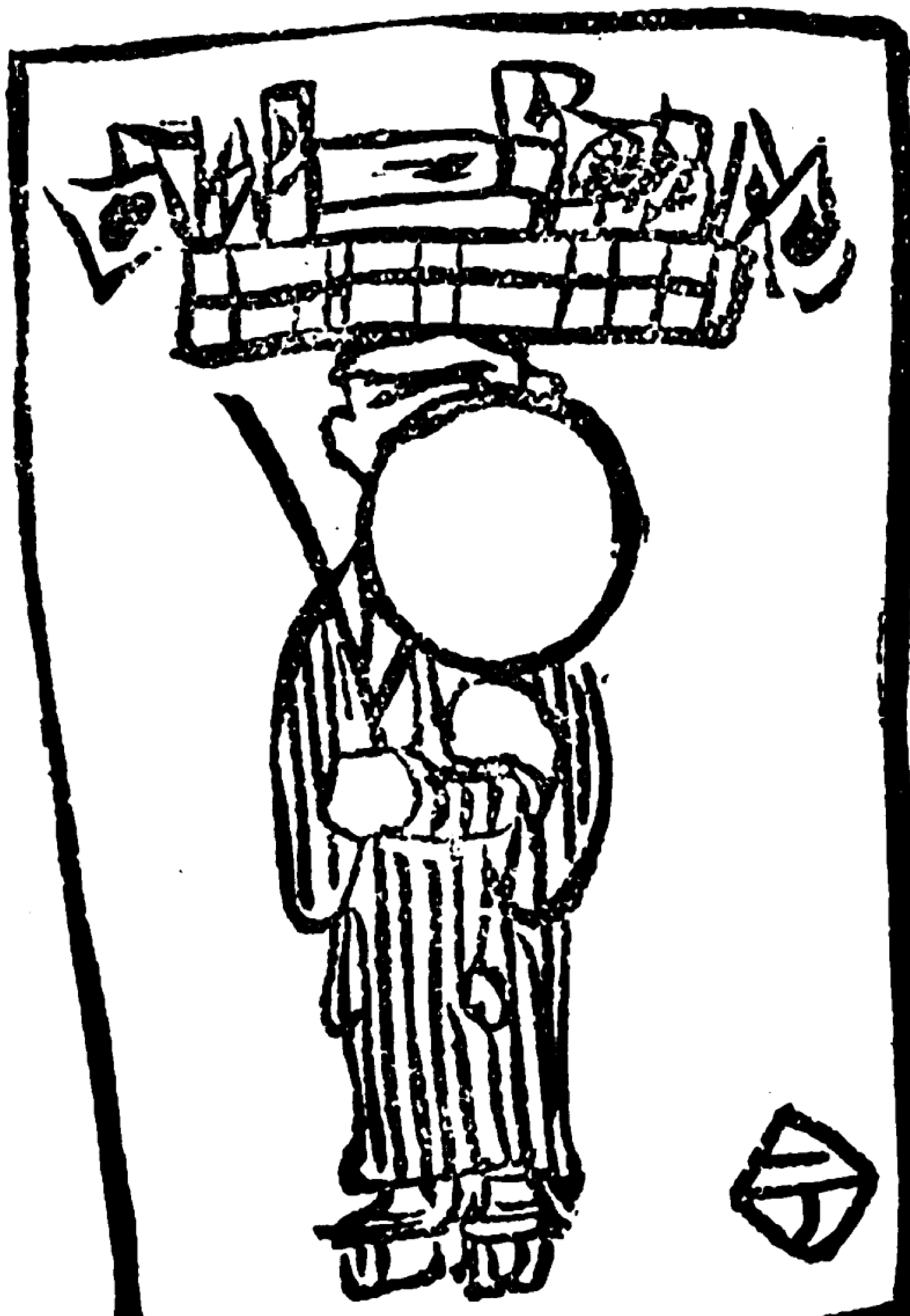
牛込　丹羽濱子

美ちやんは未だ少さいけれど、天禀の悧巧で、その上非常に親切者でしたから、日常もお家へ來る乞食等へ御飯やお菓子を、與るのを何よりの樂しみにして居りました。丁度大晦日の晩でした、待ちに待つたお正月も、最う明日になつたので、美ちやんは嬉しくて嬉しくてたまりません。自分のお屋の眞中へ玩具箱を出しまして、その前に座つて、明日は羽根を遣いて遊ぼうかしら、毬をつこうかしらと、玩具箱の中を見ては、種々考へてみましたが、毬も羽子板も今年のお正月に使つたので、最う古くなつた上に、大分汚れて居りますから、美ちやんは急に新いのが欲くなつてきましたから、急いでお母樣のお座敷へ駈け込んで行きまして、

「お母様、妾明日のお正月毬や羽根を遣いて遊びたいんですが、羽子板と毬を買つて頂戴な?」「美ちやんは今年のお正月に買つた羽子板は、如何しましたの。」「あるのよ、けれど最う汚なくなつてるんですもの……ねえ、お母様買つて頂戴な。」と美ちやんは、一生懸命でお母様に、お強請り爲ますので、お母様も、「ぢや、買つて上げませう。」「お母様眞箇、妾嬉しいわ。」「けれども、大切に爲なくちやいけませんよ。」「えゝ乾度大切に爲ますわ、ぢやお母様一緒に行つて頂戴な。」と美ちやんは、自分の願ひがやつと叶つたので、最う大嬉びでお母様と兩人で玩具店へ行きました。すると玩具店の番頭は、兩人を叮嚀に扱ひながら種々の羽子板や羽根や毬を、美ちやんの前に出しました。美ちやんは、あまり澤山な上に、どれもこれも皆な美麗ですから、眼映がして迷ふて爲まひましたが、やつとの事で大きい護謨毬と美しい羽根と、一番美麗な美人の押畫いた、羽子板を選り出して、そうしてお母様に買つて頂きましたが、美ちやんは最う嬉しいので、玩具を兩手に持つて、お母様と玩具店を出やうとすると、店先に少さな汚穢しい衣服を着た、女兒がしくしく泣いて居りますから、美ちやんのお母様は、その女兒の傍へ行つて、「女兒如何したの、何か紛失したの?」「……」女兒は無言つて頭を横に振りましたから、お母様は亦連けて、「ぢや、お連れに離ぐれたの?」「うゝん……」と亦頭りを横振つた。

「ぢや如何したの?」「あ……妾……妾あの羽子板がほ……欲いの。」と左の手で眼を押えて、右の手の人差指で、美ちやんの持つてる羽子板を指しました。美ちやんは大變驚きましたが、根性が親切性ですから急に可哀相になつて、乾度此の兒は妾の如に羽子板や毬が買えないから、それで妾のを欲しがるのだと思ひましたから、眞ぐにお母様の傍へ行つて、「お母様、妾此の羽子板を此の女兒に與げても、良くつて?」「美ちやん……」と云ひながらお母様は、日常ながら美ちやんの、情深いのに感じましたから、「美ちやんのお好きにお爲なさい。」「ぢや、與げても良くつて?」「あゝ」とお母様の御許しが出たので、美ちやんは喜んで羽子板と羽根を、女兒に與えました。女兒は亦非常に喜んで、お母様や美ちやんに幾度もお禮をして、何處かへ行きました、お母様は美ちやんの心底に感心して、「美ちやん、今のゝ變りに最うつと良い羽子板を、買つて上げませう。」「否え、妾不必要のよ、

今のは妾がお母樣に買つて頂いて、あの女兒に與げたんですもの……それよりお家へ歸つて寢ませう。」と云ひながら、お母樣の手を曳いてお家の方へどんどんと行ますから、お母樣は尙更感心して、「ちや、美ちやんは明日何して遊ぶの？」「妾、妾は毬て、それから今年の古い羽子板もあるから良くつてよ。」此の言葉を聞いた、お母樣は突然り美ちやんを抱き上げて、心からその高尙い情深い心を賞讚ました。美ちやんはお家へ歸るとた直ぐに、寢床へ入りましたが、何んとなく樂しい如な、愉快でたまりません、その中いつか眠つて了ひました。すると枕元で玉を轉す如な聲で、「美ちやん〳〵。」と呼びますから、ふと目を開くと美麗な女兒がにこ〳〵笑ひながら、「美ちやん、先程は有難う御座いました、妾眞箇は神樣のお使姫よ、先程神樣のお使で、美ちやんの親切心を試しに來ましたの。そうして先程のことの有のまゝ神樣へお傳えしましたら神樣も非常にお喜びで、それなら此れを持つて行つて、美ちやんに與げて下さいと仰有いましたから、妾今持つて來ましたの。」と云ひながら兩手に持つて來た物品を枕元に置いたと思ふと女兒の姿はかき消す如にきえて行きました。美ちやんは雀の聲に、驚いて眼を醒して見ると最う明治四十一年の、初めてのお日樣が東の空から、にこにこ笑ひながら、お顏をお出しになつた時で御座いました。美ちやんの枕元には立派な黄金色の羽子板と、五色の羽根がありましたとさ、めでたし〳〵。



鈴屋　常陸　今泉哲子

（評）女らしき構想を佳とす。

四等

○狸のむくひ

岡山縣邑久郡豐村大字五明村島寄久太内　村島きぬ

所は人家を離れた山中に親子二人の者が住んで居ま

した、母の名はお磯と云つて四十近い年、子の名はお民と云つて今年十四歳です、親類も無ければ他に身寄る者もありません唯二人で仲よく暮して居ました。お父さんはお民が六歳の時病に掛つてとうどう亡くなつたのです、それからは急に貧しくなつたのでお磯は毎日朝早くから少さいお民を相手に山奥に枯木や落葉を集めに行つて自分より大きな荷を背負うて遠い町まで賣りに行つて僅かの錢を儲けてやう／＼に日を送つて居ました、ところが此家には一匹の狸が飼つて有りました、名は敏と云ひます、お民は小さい時から此狸を大層愛しますので毎日飯時には自分が三杯食ふのを二杯食べて一杯は狸に與へて居ました、狸はお民によく手附てお民が他に行く時には毎日ついて行きます、毎日の樣にお磯は山奥に枯木を集めに行きました、お民は昨日取て來た枯木を背負うて遠い町に行きます、狸はお民の後からついて行く、步み難い山の細道兩側には大きな木が茂つて居ます、段々と進んで山はづれに來ました、お民は狸に向つて「敏さん待つて御出で」と云ふと狸は懐かし層に尾を振つて嬉しそうな聲で一啼き仕ます、お民は喜ばしい狸の顏を見て自分も大喜び莞爾として田舍の細道を十四五町も急ぎますと賑やかな町に入りました、町では今日から三日間は物品の大割引と云ふのでした、市街は一面滿艦飾で店口は提燈や旗で立派に飾つて有ります、どの店も澤山の買物人ですが殊に具屋呉服店の如きは大變なもので芝居の見物人の樣に大入りです、又此處では手品師が手品をして居るかと思へば先生らしい者が人を集めて何か言ふて居ます、又彼處の小廣い所にはカルワザ、猿藝等の見世物が陣取つてドン／＼チン／＼と愉快な音をさせて居ます、お民は餘りの賑はしさに歸りも忘れて彼れや是やと見て居ます内遲くなつたのですお民は始めて氣がついて急いで山に入ると毎日待つて居る狸が居ません、お民は大變に心配してあたりを索したが狸の姿は見えません、此山には猿が住んで居るから若しや食はれたのでは無いかと悲しんで敏さん出て下さいと大聲に叫んで泣いて居ますと毎日の間にやら向方に一匹の兎が現れてお民を見ては山の上を指さす樣にして小躍して居ます、お民は何だか氣に掛るので兎の方に行くと兎は何所にか隱れて終ひました、お民は早氣が氣でありません一生懸命に山を昇ると右手の方に狸は食ひ殺されて居るではありませんか、お民は之を見ると直に死骸に泣きついた、あゝ殘念敏さんは猿に殺された

か、私が早く歸らなかつたのが惡かつたどうぞ許して呉れとお民は大變に悲しんで泣いて居ますと、民や何うしたのと云ふ聲がしますので、ふと振向いて見るとお母さんです、あらお母さんどうして玆へ來たの私は、と泣き乍らお民は先の樣子を話すとお母さんは驚りなさいましてまあ可愛相に民やさぞ力落しだらう私はおまへの毎日より遲いのを何ぞ仕たのかと思つて見に來たのよ、もう泣くな死んだ後は仕方が無いから死骸を持つて歸つて葬つてやるがよいと云つて慰めました、では持つて歸りませうとお民は狸の死骸を籠に入れて背負うて歸りました、そして家から二十間程離れた大松の下に死骸を埋めて少さい石柱を立て、狸墓として葬りました、友として愛して居た狸を失つたのでお民は數日間は淋しい樣でボンヤリとして居ました、其内にお母さんが病に掛かられました、お民は又も心配で堪りません、何うかお母さんの病氣を早く全快したいものと思つて色々に介抱しましたが何分にお錢がないので醫師の診察や藥を戴く事が出きんので或日山奥に枯木を集めに行つて泣いて居ますと俄にあたりが明くなつたと思ふと白髮の生へたお爺さんが現れてお民さん私は貴君に愛して貰つた狸です貴君はお母さんの病氣の全快らぬのを悲しんで居られますか何も心配せんでも宜しい今によい藥を上げますからと云つてぱつと消へて終ひました、お民は何が何やらさぱり解りませんまるで夢の樣です、はてな狸がお爺さんに化けて出て藥をやるとは一體どんな藥だろうかと思つて居ますと俄にあたりが御光がさしたと思つて見ますと右手の方から一人の美人が手に銀の小箱を持つた現れた、お民さんお待ちどう御座いましたお約束の藥は此中に有ります尚此中には寶石の盃が有ります此盃に水と藥とを入れて呑めば如何な病も直に全快しますと云つてお民の手に渡すとぱつと消へて終ひました、お民は喜こんで歸つてお母さんに呑ませますと一夜の内に全快したので二人は大喜び早速狸墓に参つて御禮を申しました、此事が遠方に迄聞へて澤山の病人が來だしました此藥で皆一夜の内に全快するので大喜びお禮に澤山のお金を置いて行きます、二人は之で無事に暮す樣になりました。めでたし／＼。

（評）さら／＼と書き流して而も興味を逸せず。

秀逸

○春子

下谷　すみれ子

「春子や一寸お出」とお呼び遊ばす母あ樣のお聲、春子は今年八才に成る美くしいお孃樣、色の白い眼のぱつちりとした睫の長い、黑々とした髮をおさげに結て赤いリボンを蝶のやうにかけて亂菊の附た美くしいめりんすのお召に同じお被布、暖いお椽で小間使の花をあひてにお手玉取りをして居り升、「ハイ」とお返事を遊ばしてちよこちよこかけ出して母あ樣のお部屋に參り、「母あ樣なあに」お母あ樣はお年の頃二十八九才おやさしさうな、顏の面長な眼の鈴やかな、春子さんと瓜二ツ、「あのねえ母あ樣は之からお使に行くのですがあなたは花とおとなしく待つていらつしやいよ、春子は頭を振て、「お母あ樣私しもつれていつて頂戴な」母あ樣はすかすやうに、「今日はいけません、あなたが行つても面白い處では有ませんから花とおとなしく待つて居て下さい其かはり清子さんの樣な美くしいリボンと花束求めて來てあげ升よ」處へ花が來て「お孃樣花とお手玉取りませう」と又以前のお椽に參り遊んで居升内お母あ樣は外へお出になりました、春子さんはお手玉も少しの間、此つぎはごむ鞠をついて遊びましたが是もあき、花もほと〳〵困つて居り升と、お孃樣は無理な事ばかりはてはお母あ樣の處へつれて行けと、お

母あ樣は春子の正月の下駄、又は足袋等買て歸りに上野廣小路の小間物屋て、あれかこれかとおよりになつて赤い美くしいリボンと花束を求めて大急でお歸りになりました、春子はまだか〳〵と待どうしがつて居られるとお玄關の鈴の音、戀しいお母あ樣は澤山のお買物を遊ばして、「お母あ樣、おかへりなさいまし」とお頭をさげると、「オヽ春子やよくおとなしく待つてお出だねえお父う樣はまだ」春子のお父う樣は會社員、まだおもどりにならぬ、「エヽ」お母あ樣はうなずいて、風呂敷をとかれて美くしいリボンや花束を出してみせました、「きれいでせう春子や」春子は返事もしない見たら自分が望んで居たとき色のでなく赤故、やがて泣き顏になつて、「お母あ樣とき色ではないのねえ」母は春子の不平さうな顏をみて、「あなたは清子さんより小さいから赤でよいのです」あゝ春子はとう〳〵泣き出して、「いやよ私、とき色でなくては」母あ樣もいたし方なくそのまゝ置くわけにも行かねば、「其では來年、一ツ年を取てから買てあげ升から今年は是てがまんなさいもうあさつてがお正月ですから」事をわけて聞かせても中々言ふ事をきかずに、「いやよ今日てなければ」母あ樣も今はもてあまして「勝手になさい母あ樣

もうかまひませんから」と云ふてお部屋へ参られました、春子は夜の御飯もいたゞかず十二時まで泣いてをりました、其夜中頃から大熱が出て、樂しみに待つて居たお正月も皆樣のやうに遊ぶ事出來ず、晴着も着られず、いやな藥を飲て寢床の中で苦しんてをりました、其後は之にこりて何事も御兩親の仰る通りにして居ましたから顔も美くしい心もすなほなほんとに好お孃樣に成りましたとさ。

（評）これはお伽噺では無い、教訓小話の方です。



竹馬

千葉縣 木内秀子

○貧者の娘

淺草 登美子

或る海に添ふた片田舍にエミ子マリ子と云ふ姉妹がありました。二人は幼い時父樣に別れましたので唯優しい母樣ばかりしかありませんかつた。家は大層貧しくて母樣は毎日人の仕事をしては二人を育てゝ居りましたが、妹のエミ子は大層歌を唄ふのが上手て、其の清い聲で樂しさうに唄ふのを聽きますと、人は世の中の辛さ悲しさ淋しさを忘れ、何も知らぬ太郎（犬）やユキ（是はエミ子の愛して居る鸚鵡で眞白な毛色からかう名けたのてす）までも首を下げてぢつと聽惚れる位でした。又妹の方は花のやうに美しく愛らしくて、マリ子を見た人は誰てもすぐに抱上げて其の林檎のやうな艶々したのに頰摺りせぬのは無い程でした。エミ子が十二てマリ子が九つの春、母樣はふとした事から重い病氣になられましたので、二人は毎日花を賣つたり人の使をしたりして一心にお藥を上げて看病して居りました。或る夕方の事てす。エミ子が花を賣り終へて歸らうとしますと、見知らぬ男が後から呼止めまして「お孃樣。私は都の者てすが、實は主人が毎日貴女の花を賣る美しい聲を聽いてどうか召抱へたいと思ひ、今日お母樣に澤山のお金を上げて貴女を買つたのです、ですから貴女は直に私と都へ行かねばなりません。」と云ひますのてエミ子は驚

きまして『けれども私はも一度母樣やマリ子に逢はねば。』と行きかけますと、男は急に恐い顏をして突然、聲を立てやうとするとエミ子の口を押へた儘何所へか連れて行つて終ひました、家では何時迄たつてもエミ子が歸つて來ませんので、餘り案じた故か母樣の病氣は益々惡くなりますのでさあマリ子は氣が氣ではありません。朝夕神樣に縋つては母樣の病が直るやう、姉樣の居所が分るやうにと、一心に祈つて居りました。すると或る曉方の事です、枕邊に眞白い衣をつけた姉樣が見えられまして『マリ樣私は此間恐ろしい人に連れられて都へ出ましたが、毎日市街を歌を唄ふては歩かせられるので、いくら泣いても私はもう家へは歸られないと思ひます。マリ樣は母樣を大切にして……。』と泣きますので、マリ子は驚いて起き直りますと、それは夢で枕邊にはユキが獨り悲しさうに首を下げて居ります。マリ子は唯淋しくて淋くてなりませんかつた。

そしてマリ子は何所迄も可哀さうな兒でした、それはたつた一人の母樣迄が遂々其年の秋可愛いマリ子を殘して亡くなつて終つたのです、それからマリ子はユキを抱へ太郎を引いて都へと出て立ちました。利口な太郎は道々も大きな背へ小さなマリ子をのせては歩みました。其上太郎とユキは藝を澤山知つて居ましたので、マリ子はそれによつて諸所て少しづゝお金を貰ひ、飢える事もなくて都へと入りました、其れは雪の積つた朝てした。立派な家の窓下にマリ子はユキを懷に太郎を傍に抱へてパンを食べて居りますと、思ひ出したやうにユキが『エミ子さーん。』と高く呼びました。ユキは時々エミ子の名を呼んではマリ子を泣かせます。其時窓の中て『エミ樣や、誰だか妙な聲の人が呼んでお出でだよ』といふ優しい聲がしますのてふり仰いて見ますと窓から首を出した美しいお孃樣、あゝ其れは懷しいエミ子てした、『あらマリ樣、』『まあ姉樣、』マリ子は背のびをして、窓から半身を出したエミ子の首に縋りついて嬉し涙にくれました。エミ子は恐しい商人に勾引され市街を唄ふて歩く中、此家に招かれて、別れし母と云ふ悲しい歌を唄ひましたが、恰ど此家てお孃樣を亡くして悲しんて居た處てしたから大層氣に入られ、恐しい人の手から買ひとられてお孃樣になる事が出來たのてした。夫からマリ子も遂々金持の家の子となる事が出來、そして可愛いユキや利口な太郎と共に姉妹樂しく暮らしたといふ事てすめてたし〳〵。

新派和歌

與謝野晶子先生選



▲規定　新興の短詩と稱せらるゝ新派の和歌を募る、原稿には新派和歌と明記し、半紙に認め一人一首限り、原稿には本名を記入すること、締切は前同斷、懸賞品は乙種に據る。

二等

京都市上京區寺町通今出川上ル鍛さみ方　小笠原あき子

さびしみになほいのちあり力あり苔にさくなるむらさきの花

三等

長崎市舘内十六番地　平田すみれ

きさらぎの川邊の葭の中とびぬ手まりに似たるかはせみの雛

四等

千葉縣長生郡豐岡村御臓芝　深山りゆう子

秋のかぜ草のはなちる夜なりと天なる鈴のおとすとおもふ

秀逸

○

東京　山下[illegible]子

わが胸の清き花野に白き蝶よろこびとぶと君を見るかな

○

伊賀　山村野菊子

春の朝よき黒髪の君による心地して居ぬ藤のあづま屋

○

茨城縣　木村孤村女

月寒しらう梅かをる此の宵を老尼君とものがたりせむ

○

土佐　高橋白ばら

わかうどは春の夕野のゆきずりに花のゑまたを人にたとへぬ

○

四谷　八重子

わが胸に咲くは緋牡丹なつかしき御胸に咲くはひなげしの花

○

周防　内山美子

涙するやさしき人よほゝゑめる美し人よ思ひみだるゝ

○

上總　矢名子

底しらぬ暗き牢獄の錠の音すると思ひぬ落葉地にしく

○

京都　宮原みどり

紫の羽衣つけし天人のおもかげうかぶ春の夜のつき

○

紀伊　杉若文子

紀の海の春の汀の朝ぼらけ裳ひく女師の在さずやと思ふ

○

奈良縣　中富よしみ

ならびたつ菩薩菩薩にかこたばや千々にみだるゝわが憂き想

○

伊賀　伏見葛子

山茶花はおんはゝゑみの眼ざしのごとくわれ見ぬ幽の戸繰れば

○ 美濃 早川しな子

われ君を知ると云へどもうたがひはいなずかなしき思ひするかな

○ 大阪 武田とし子

病む人の眉いたましき夕まぐれ亂れみだれし雲のたゞよふ

○ 信濃 山田くに子

樂よ名よつひにはかくか涙して消えゆく虹の色かぞえ居ぬ

○ 群馬縣 森下花子

君をみる眼の疲れふと我をかへりみしぬれ髮老いにける

○ 京都 山口京子

朝な〱春の女神か少女子か病む枕邊に花挿して行く

○ 大阪 木村春江

諸共に泣きし小川の柳かげ十とせ歸らぬふるさとを見ぬ

○ 岐阜縣 山田はき子

あなまぼろし黑髮ながき君が臉消えずてあれな春の夜のまど

○ 美濃 杉山靜子

君あらず胸の廣野の秋の草亂れて咲くを歌とこそいへ

○ 豐後 加納とよ子

秋暮く日涙しつゝも野により君がみ歌をかなで見しかな

○ 岐阜 篠田とみ子

春の神小琴にきたりもの云ひぬ日ごろ病むなるわが枕上

○ 下野 鈴木靜子

朧月夜笛の音きけば故里の紅梅の花眼にうかびくれ

○ 神戸市 高橋紫峰

路一里みどりの野邊に水見えて春の日さしぬ白き帆の行く

○ 名古屋 原田琴子

うつくしう少女とうまれ花もなき島もうたはぬ道ゆくべきや

○ 岩代 根本松江

胸に身に木枯しすさぶさむき日とおもひもありぬ君見ぬわれは

○ 京都 いちご

龍の宮の春のひゞきの聞ゆるよ新潮よする朝の濱邊に

○ 越前 永宮こよれ

なにものかわがこの胸にひし〱とせまり來る如くるし日にあふ

○ 羽前 壹賀信子

秋の夜の風のまに〱聞ゆなり妻乞ふ鹿の聲もあはれに

○ 東京府 鶴澤喜舞子

見君に送らん花をうしなひぬ白き蝴蝶に後追はせまし

○ 越後 瀧澤みつ子

この日さへ心の强きわが君は冷かにしも笑み給ふかな

○ 下總 平山きさ子

霜枯れし眞菰被ぎて鴨の鳥なくなる池に星うつるかな

○ 大和 我澤素桂

籬に鳴く虫の音も寂びはてゝ寒さ身にしむ晩秋はきぬ

○ 豐後 姫島女

島の秋遠なる陸の鐘きゝぬ波靜かなる渚に立ちて

○ 若狹 早水その

物思ふ夜はいれえぬよ秋の野の虫なく如き耳なりのして

○ 豐後 菅原芳子

夕風は柱によりし妹の黑髮ふきぬ白梅の花

○ 木曾 かせき子

あさましや心はあらぬかたに居ぬおん手とる期と呼ぶといへど

○ 岐阜 村上眞子

凉しさや沖の島より吹く風に櫻のすだれを皆卷き上げぬ

○ 丹後 豐見千代子

夢にして君と別れぬ冬枯のさびしき道をかへり見がちに

○ 上總 園芳枝

うそさむき小雨の宵を窓による病む人の頰に灯影の青き

○ 加賀 小島清子

春の女神あらはれ給ひ天地はのどけくなりぬ紅梅の花

○ 上總 香花女

戀も知らず歌も知らずて二十年を奈良の都の寺に經讀む

○ 山口 柳井露花

山越えて行くは故郷秋の風わが畑をふくもうれしき思ひ

○信濃路は春いとさむし梅さけど眉かく鏡曇りやすくて　信濃　壽美禮女

○山茶花の紅き花散る遠方に水音清き白川の里　長野縣　今牧伊智子

○風たゝず小米花咲く池の汀にひねもす釣すわが人形は　若狹　山田鐵葉

○ゆきづりや只たまゆらに人と我瞳のあひて心ときめく　羽後　柳子

○君戀ふるわれのこゝろは夏の夜の虫あらなくに闇渡り行く　若狹　津田汐汀

○病む姉と手をとりながらうれしくも素足になりぬさくらちる庭　千葉縣　今井しげ子

○木曾の秋にきゝしに似たる梭の音す夕つゆしげきしらはぎの宿　伊澤　曉子

○若かりしわれは君見し一瞬に老いしと云ふをうたがはぬかな　山形縣　白花女

○君と居て春きる衣は紅をうす紫に襟かけかへぬ　德島縣　吉田紫花

○胸さわぎ血潮ひそかにさゝやきぬあゝ君とはに心えいはず　大阪　生田さくら

○歡樂の夢よさめざれ永劫にねむりに入らむ時まで期まで　筑前　深町よし子

○いとうすきみなさけ故にこの日ごろくもりがちなるわが瞳かな　京橋　今泉磯千鳥

○世を去りし母が片身の綾の衣昔の香する袖かづき泣く　駿河　雪枝



お正月　岡山縣　桐本梅子

○ほりするはほまれか榮か吾が胸の花野に狂ふおそろしき魔よ　飛驒　千代子

○朝の月青葉の末を鐘の音わたれば百合の花はゆらめく　新潟縣　尾島隆子

○思ひ草しげれる中にさびしらの君たちましぬ胸の花の野　青森縣　三浦あや子

○我が思ふ君住む島は紫に夜明けけるかな白き帆のうく　常陸　はま子

○君とある二十四時を八百日日のこゝちして居ぬあすはしらずも　千葉縣　夢舟女

○新らしきのぞみを語り家の内うれしき壁にみつる日はきぬ　新潟縣　和田直子

○涙して別るゝ今日もあひそめし日にぞ似るかな胸どよみして　下總　三橋千代子

○戀のみち君と並びていまわれは心狂ひぬ海に入らまし　愛知縣　富美子

○しづかにもみ袖あはしてぬかたれぬ眞白き花の凋落のさま　京都　薔薇子

○おもむろに花ひらけゆく日輪のごとくにまちぬ君を見む日を　土佐　深瀬ますこ

○一山は大どよみして箭のやうに夕立降るを涼しむ御寺　近江　土岐尾のぶ

○旅にして時雨の紅葉ながめては風な吹きそとわが家をおもふ　岡山縣　廣江壽子

○貝がらの白きが中の菫草なつかしと見る朝月夜道　下谷　蕉雨子

短篇小說

小栗風葉先生選



▲規定　純潔清新なる短篇小說を望む、凡て振假名つき二十四字詰八十行以內とす、用紙は半紙又は罫紙を用ゐ一人一篇を限りとす、締切は毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

三等　○緣

土佐國吾川郡藤岡上　深瀬ます子

父親は毛織の褞袍を羽織つて、長火鉢の元に座を占め、すぱすぱと煙草を吸つて居る。歳は五十七八であらう、大分白く成つた頭を短く刈つてる。如何にもよく肥つた布袋樣の樣な風。母親は丈のみ高く痩せ枯れて見る影も無い。髮も櫛卷にして卷袖の半纒を前掛の紐で縛つてる。昨夜の酒宴の名殘。食べ散らしたものを一つに寄せ、汚れた皿や、盃を廣蓋に乘せて臺所の方へ持ち出して來る。娘のお安は甲斐々々しい襷掛けで手先を赤くして、小桶に湯を汲み、母親の運んで來たのを受取てこり〳〵と音たてゝ洗つて居る。やう〳〵二三十枚も洗つて瀝いて大い目籠に伏せて日向に出す夫から流し元を綺麗に洗ひ流して、手を前掛で拭ふとした時、母親はまた三つ四つ大なさはちを持ち出して來た。

「之は可いさはちだからよく氣を付けて洗ふんだよ。」

もうお終かと思つてたのに、また來たので、お安はふり返つて見るきり、返事無しに受取た。夫れて漸々片付いたのか母親も火鉢の側へ寄つて煙草をふかし始める。

「えゝ懊惱つたい、今日も此麽事で暮れるのか、」とお安が呟いた時、ぽん〳〵と煙管を擊いて母親が、

「吉田屋からの話は如何するんです――二三日の中に返事して吳れつて來たのがもう五六日前の事ですよ、遣るなら遣る、遣らなきや遣らないと分明した事云つてやらなくつちや……」

といふ。父親は氣の無い顏で、

「うん」

「煮えてるんだか沸いてるんだか分らない樣な事ぢや先方だつて迷惑しますあね、」

「己は別段思惑は無い。」

「家柄も可し、店もあの通だし、男もあれなら申分は無し、小姑といつたつて今に直出て行く人達だし――

さう何から何迄申分の無いといふ所は無いものだから此邊で一つお前樣も食切を付けなくつちや、」
「其麼ならもうお前遣る意か？」
「私が一人で取り決めちや、また後で何のかのといはれるかも知れないから、お前樣も今度は能く考へてみて下さいよ、そして早く返事しなくつちや、ねえ、」
「うん、其麼ならお安次第さお安は如何いつてるんだ？」
「お安は別に思惑は無いでせう、どうでも可樣にといつてたんだから、」
「小姑が二人と來てるんだから――夫さへ無けりやな――お安は自分さへ可く當りや先方でも可くして呉れるんだと



思つてるだらうが中々……小姑といふ奴が……」
「其麼なら止すんですか？」
と少し詰め寄せていふ。折から、からつと格子戸を開けて、
「今日は、えー鯒に小鯛に烏賊に鮃で、とん、きやうな聲。皆喫驚して其方を見た。平常の魚屋である。母親は「どれ」といつて土間へ下り、魚籠を見初める。父親はつと立つて靜に次の間を拔け、しと〳〵と階子段を踏み、二階へ行く。やがて小音に例の謠が始まつた折角糸口の立ちかけた話も夫で消えて了ふ。流し元では、
「えーえー懊惱たい、懊惱たい、」とお安が錦手の大さはちを兩手に持つた儘、水口の敷石に投げ付け樣かと思つた。
ほんに親は子の心を知らず、

子は親の心を知らぬ。

母親は清楚とした氣性ではあり、略我が子の眞價も知つて居るから、お安が二十歳過ぎる今日迄に、今度こそは、今度こそはと思つた縁談も一度ならず二度ならず在た。けれど姉娘のお澄を遣つた時に、我意を張つた許に、少々後悔して居る事も在るし、それや之やで今日迄に成つて來た。父親は世間の多くの親の樣に、我が子を買ひ被つて居るといふ譯ではないけれど、其所が情で、二十年も疵なしに育て上げたものを、犬の子か猫の子かの樣に、夫といつて夫と、恩も報も無い人に呉れてやる事が出來ぬ、まあ〳〵急く事はない、少しても可い所へ、可い所へと思つて、善い運の來るのを、必ず來る事と信じて、落付拂つて待つて居る。お安は何方かといへば、父親よりは母親の氣質を受けてしやんとして居るし、殊に何を爲ても人に遲れをとる樣の事は無い生れ故、お友達は皆殘らず嫁たのに、自分許取り殘されて居るのが、何か意氣地が無い樣と厭でならない。處を折柄の申込。今度こそはと内々雀躍して進んで居るのだけれど、さう不着落なく面に表して何する事もされず、一通ならず氣を揉んで居る。もう〳〵意中を明さうか明さうかと思ふけれど、どうしたのか機を取り失つてから、どうしても其事が口に出されない。

茶の間と座敷は東受けて、小縁の端に手摺が在つて、其下は川である。お安は開きから鏡立や櫛箱など取り出して鏡に向つた。暫時凝然と鏡を見詰めて居たが、はら〳〵と湯の樣な涙が白い頰を傳つて衿へ膝へ落ちた。直ぐ襦袢の袖で拭つたけれど後から後からと玉の樣に溢れる。もう〳〵どうしても口に出していはれ無いから、大泣きに泣いて泣いて泣いて了はふか、そしたら自分の心が分つて早く事が運ぶかも知れぬ――けれど夫も餘り――いつそ一思ひにいつて了はうか――と思つた所へ母親が入つて來た。柱の手箒を取つてさつさと座敷へ行つて了ふ。暫時してまた入つて來た。

「お母樣、あれどうしたの?」

「……………」

「吉田屋さ。」

「お父樣が餘り食ひ切が無いから困つてるんだよ。ほんとに。」

「止すなら止すと早くいつてやらなくつちや先方でも急いてるわね、一體お父樣はどういふ氣だらう。」

「家のお父樣は仕方がないんだよ。早く決めなくつち

や安心が出來ない、早く決めなくつちや安心が出來無いと平常いつてる癖に、誰か貰ひに來ると、己の家の子を偸みに來たか、騙しに來たかといつた樣の風で機嫌が惡くつて……」

「ほゝゝゝ私見た樣な奴を何と思つてるんだらう。親の心つて可笑しいわ。其麽事いふんなら、之から先何といつたつて一生何所へも行かないつてお父樣にいつて頂戴。ほんとに厭な人だ。もう〳〵其麽事いふんならどんな所からいつて來たつて行きやしないから……

……」

母親は少し驚いて、お安の顏を見て居たが、踵を返して、莞爾として二階へ上つて行つた。父親の謠の聲は止んだ。

思ひ切た事いつて了つてお安は胸が透いた樣な氣がして、顏を赤くしたまゝ、銅壺から煮え立つた湯を小い金盥へ汲んで、多い房やかな髮を解いて、念入りに癖直をはじめた。

（評）今回の應募作は前回に比して全體に劣はぬやうだ、一等、二等に選すべき作無きが如き、選者の遺憾之に過ぎない、其中にて比較的佳なるは此篇にて、父と母と娘との心情も相應に巧みに寫されて居る、文章もきび〳〵として對話も熟したものだ、而し肝心の思想內容が單に人情の一片と云ふぐらゐのものに過ぎぬのが、此篇の價値高からざる所以。

四等

○氣樂者

岩代國須賀川町　服部貞子

「苦いてしよ」思ひ出したやうに律子は云つた。

「え？」と茶簞笥の戸に手を掛けた儘振り向いたわぐりは、何の事やら一寸解せかねたらしい。妊れる人の無意識につく息を、話の間々に苦しからうと思つて居た律子は、つい今口に出たのであつた。

「いゝえ」と視線がふくらんだ我帶のあたりに注いで居るのに初めて氣付いたらしく、目許で笑つて茶道具を取り出し乍ら「其麽でもないんですよ、私もねえ、もとお腹の大きい人を見るとどんなにか苦しいんだらうと思つてましたが、其麽でもないものですよ」

「さう」と幽かに顎を引いて、火鉢の周圍を一撫で、火箸の所で止めて其手をかけて、貴女心細かあなくつて」律子は何處までも、自分の心を他人に當はめる。

「それあ心細いことは心細いけれども、故郷へは歸り……たくないし、お祖母さんでも上京されるんだといゝけれど到底駄目なんだし……」と諦めてると云ふやうな口振り、無言つて茶碗を手に乘せて出して

「此家の伯母さんがね、親切にして呉れるんでいくらか心丈夫なんですよ」全く心丈夫なのらしい。

歸省して昨日上京つた律子は、届け物かた〴〵今日ての飯田町の奥に友を尋ねた。祖母なる人の陰心配に、自分の思わくもてき交ぜて、七月と聞いた友の身の上を、如何する積りか知らと道々考へて來たのであつたが、來て見れば性分とは云へ案外平氣なもの。さすがに懷しがつて聞く故郷の噂も、大方例の快活な笑ひに値するものばかりであつた。

「何て氣樂な人なんだらう！得だわねえ」と律子は思つた。上京る前の日も、わぐりの家の隱居所に尋ねて、繰り返し〳〵賴まれたことや、愚痴ごとを思ひ出した。

「祖母さんも大へん心配して居らつしやいましたつけ」多くは言はないで、たゞ思つた。

早生れなのでわぐりは律子より一つ多かつたが級は同じかつた。小さい時から無口で心の引立たなかつた律子は親しい友達とては一人もなかつたが、誰にでも直ぐ仲よくなつてまた仲惡るくなるわぐりと一度仲よくなつてからは、家の近かつた故もあらうが、不思議に、交りが親しくなつた。二人とも町家並に小學校だけでよして、一年違ひにわぐりは早く二本松の商家に嫁入つた。二年目の正月に里歸りしたまゝ、一年半ばかり隱居所に暮したわぐりの云ふ所によると、嫁入先の姑は夫の繼母で常々折合が惡るい、殊に自分が嫁つてからは猶更激しかつた、それて夫は今家に居ないと云ふ。姑をよく言はないは勿論のこと。

東京に出て某會社の書記の役とかを見付けた夫からの手紙を受取る度、わぐりは獨り住みの寂寥さを感じた。淋しさに堪えられなかつた。生れるとから手しほにかけた祖父祖母は、其樣な邪見な家にはもうやらぬと云ひ、東京へは猶更やらぬ、暮してゆけるか、其麼弱い躰で如何するのだと、いつかな肯かぬ。

わぐりは弟が、時として現る食客待ひに、輪をかけて自分が上京心を募らせた。猶、其頃不幸にも夫に死に分れて家に歸つて居た律子に、輪に輪をかけては居づらがつて、同情心を買つて、そして其同情心で益〳〵己が上京心を確かにした。間もなく弟嫁が決つたを際に、祖父祖母を說きつけてわぐりはつひに上京した。また一年後れて裁縫學校に入學した律子が尋ねた時は、早や可なりの東京通になつて居た。

狹い乍ら一軒の家を持つて居た時も、子供のない綺

麗好きな上役の家の二階に住んで居た時も、この陰氣臭い狭苦しい座敷住居にも、尋ねる度に律子はいつも快活なわぐりの笑ひを浴びる。夫は今某商店に通ひ番頭の身の上だとやら。

「いゝ柄だこと！赤ちやんのに？」起ちながらふと目に止つた隅に押し遣られてたメレンス友禪を目顏でさしていふ。

「いゝえ、襦袢の袖が切れつちやつたんで、それにてもせうかと思つてねえ、福切れの中にあつたんですよ。さうねえ、子供のもそろ〳〵用意しなくちやあならないわねえ」

「何處まで氣樂なんだらう！」律子はまた自分の心にひきくらべた。

送り出して座敷に戻つたわぐりは、竹の皮の八の字になつてる鶯饅頭の黄な色を見て、蓋とつて見た鐵瓶の湯氣の熾なのを見ると、戸口にむけて冴えた聲。

「伯母さん居らつしやいなお茶入れますから」

「へい有難う」

やう〳〵に立膝をおろすと、滅り氣味の湯はちーん〳〵となり出した。



年のくれ　藤村あき子

（評）前回の此人の「年」に比べて内容の單純なるが飽足らぬ、姙娠と云ふ事に對する女性の心の動搖、之は女性ならでは描かれぬ、而も人生の大問題だ、折角恁る問題を捉へながら輕々に叙し去つたのが呉れ〳〵も惜しむべきだ。

五等

○こほろぎ

本所區外手町六十一番地　田中久子

一

お高は東京のお邸から二三日のお暇を貰つて、今日一年ぶりに故郷へ歸つたのである。

去年の秋、村を出る時迄は小さい弟や妹達が汚した儘で在つた古疊も今は思ひ出されぬまで綺麗にかへられて、背戸には小さい菊畠の如なものさへ出來て居る。氣のせゐか阿父樣の頰も太つた如だし阿母樣の眉も美しく剃られて、凡て家中のものは皆、お高にいひしれぬ嬉しさを覺えさせる。是も自分が奉

公に出て給金の總べてを手も觸れずに送つてよこしてゐる故だと思ふとお高は一種の誇りと新らしい愉快とにつひ微笑まずにはゐられなかつた。

阿父樣も阿母樣も今夜は甚麽に喜んで御馳走して呉れるだらう、淸吉も花ちやんも玉坊も必と遊び疲れて歸つて來て私がゐると聞いたなら……と思ふと座つて居る腰迄が浮き立ちさうに嬉しい。

煙管で擲かれてザラ〳〵に成た古い長火鉢の縁を指の先で撫で乍ら、體を寄りそへて臺所に水仕事を仕て居る阿母樣を覗いた。早く用を濟ませて來ればいゝにと待遠しい思ひに、つと立つて椽側から汚い草履を引かけてぶら〳〵と、是一つが唯一の財産に成てゐる背戶へ出たのである。靑黑く繁つた栗の葉に秋の日が薄ら寒く照つて、隙間もない如な間から刺々の毛毬が覗いてゐる。夫を見上げるとお高は又新らしい嬉しさを覺えて、日陰に重さうな臺所の戶の一枚あいてる所から薄暗い中を見詰め乍ら「まあ阿母樣、栗がよく出來ましたねえ」と今にも暗い其陰から顏を出すかと思ひ乍ら云ふと、中では矢張り水の音をさせ乍ら「あゝ栗けえ」と顏も覗かない。晩には茹て御馳走をしやうかねとでも云つて呉れるかとお高は耳を澄し乍ら黑い木の上を見上げてゐたが其儘聲も無いので「旣食べられるんでせうねえ、此麽に大きく成てるのだから……」と少し氣を兼ねる如にいふと「あゝ、明日邊りは町の問屋へ持つて行かうさ思つてるだ」と又ジャブ〳〵大きな水の音をさせる。夫を聞くとお高は何となしに厭な氣がして的が外れた樣に落膽し乍ら默つて木の元を離れて又椽の方へ戾つて來る。鍬でお芋を堀つてゐる阿父樣の方へ目を遣ると、艶もない椽に腰を下して、高く晴れた秋空に白い雲が細く千切れて漂ふて行くのを恍惚見て居たが「阿父さん」と大聲に呼ぶ。「何え」と返辭はしたものゝ鍬の手を休めずに矢張り土を堀り返してゐる「田舍は矢張り靜かで宜ござんすね」と夫を見乍らお高がいふと「何、そてないだ、東京の方が何ぼかえゝ」「さうですかねえ、私は何だか田舍の方がよく成ちまひましたよ」と云たが夫限り阿父樣の返事がないのでお高の方も默つて了つた。

椽をミシ〳〵音させて阿母樣が來て乾して在つたお櫃を取り込むでトン〳〵と擲くと夫なり濟して又暗い臺所へは入つて行つた。後影を默つて見乍らお高は今迄にしらぬ母の冷たさを思つたのである。

二

夕方になると畑から阿父様が上つてくる、三人の弟妹も何か怒鳴り乍ら歸つて來た。夫を見るとお高は無性に嬉しく、今にも姉や姉やと飛びついて來るだらうと微笑み乍ら椽の柱に靠れてゐると、洟だらけの汚い顏が三つ、代り〳〵に臺所の障子の破れ目から覗く許りて入つても來ない、忘れちまつた筈もないと思ひ乍ら傍へ行つて無理に三人を引張つて來てお膳へつくと自分の周りに座らせたけれども、先の樣に爭つてお茶椀を出すでもなく、密々默つて食べて直ぐと又臺所の板の間へ走つて行つて今には似げもなく大きな聲で噪ぎ乍ら遊んでゐる。お高は鈍い頭痛でもする樣な氣で家にゐる時分から食べ馴れてゐる鹽のからい煮〆でお茶漬のボロ〳〵なのを厭な顏して食べて了ふと、阿父樣は月のいゝ椽に煙草をふかし乍ら何かとお邸の容子を聞く。お高はもう先刻の樣な嬉しさもなく現のさまで返事をしてゐると臺所から阿母樣が前掛で手を拭き拭き上つて來て「お高さ、疲れてゐるだつせ早く寐るがえゝだ」と隅つこの二疊へは入つて行つた。「夫がえゝだ」と阿父樣も天の川を眺め乍ら云ふ「否、私あ疲れなんぞしませんから……久しぶりに緩り話ても…………」と云はふとしたけれど、妙に氣遲れがして其儘默つてゐると「さ、床を敷いただよ」と例の二疊から聲がしたので、お高は詮なさゝうに默つて立つた。煤けた障子をあけると、冷い壁の際に床が延べてあつて、枕元に小さな暗い豆ランプが置いてある。

「之だけぢや寒からうか」とぼんやり立つたお高を見上げて聞く。寒からうとは思つたけれど「いゝえ」と云て了ふ「寒かつたら又何か出すだから……」と云つてピタンと障子を閉めて出て行つた。

隣りの六疊で弟や妹の大きな笑ひ聲がすると「靜かにして早く寐るだよ」と阿母樣の鋭い聲がして、直ぐ森と靜かになる。枕から手を延してランプを少し遠ざけ乍ら「本當にお仲さんやお常さんは利口だよ、私も之からは小遣ひを使はふ」と思つてうら寂しい思ひに薄くて冷い蒲團をすつぽりかついだ時、どこかで小さく、こほろぎが啼き出した。

（評）久振に我家を見舞ひし娘に對して、兩親が何故斯く冷淡なのか其理由が見出されぬから、讀者も女主人公の娘と一緒に、何だか飽足らぬやうな詰まらぬ心持がする、但し技巧は優れたもので、就中の人物何れも活躍してゐる。



秀逸

○お葉

遠江　菊笠光子

まだ春淺き如月の、軒照る月の影さへ寒う、枯葉轉がす木枯の一際狂びまはつた後は森々として、物淋しく火鉢の炭も白うなりかてに、燈火さへも今や滅ゆると光りの細る夜更、お葉は夫の歸りを待ち詫びて、何氣なく夫の手文庫開けたが悶えの種、小さい本の間からハラリと落ちた此の紙片!!。讀むとしもなく見てゆく程に胸をつく言の葉。

……此度姉上樣と御結婚遊ばさるゝとの御話、妾は何と申し上げん術も無之候、もと〳〵貴郎樣と妾とは久しい間の深い交情にては候ひしかど、今は最早何事も申し上げまじく、世のなりゆきと觀念いたし、妾は一人昔の貴郎樣を戀ひて心淋しう此の世を送り申すべく候へば貴郎樣には何卒御快く姉上樣と御夫婦になられ幾久しく鴛鴦の睦び重ね給ひ、纖弱き姉上樣の御世話なし下されたく、妾は此儘、否妾の身の上の事は最早申し上げまじく……。

お葉は泣いた。泣いて泣いて淚の泉の涸れん程泣きつくした。

此樣事とは露知らなかつた、勿體ない、仇恐ろしい、妹は甚麼に此の姉を怨んでゐる事であらう、それと知つたなら疾うにお斷りするのであつたものを、あゝ妾は鬼か蛇か……。

妹が十三妾が十七の時、戀しい父母に死別れ、女子二人の孤兒となる時、お母さんは何と云はれたであらう妾等は何と契つたであらう、『人を賴りにしてはならぬ仲よくしなければならぬ、氣を付けて世を渡らねばならぬ』と云はれた時、妾は『お母さん御心配なさいますな、親達がないからと人に指されるやうな事は決していたしませぬ、妹とも仲よく暮します』と云つてはないか、妹も『妾もよね、屹度よ姉さん、お母さん』と優しくも云つた時、母は漸やく安心したとやうに淚のうちに淋しい笑みを洩らされたつたではないか、あゝ、それも之れも未だ新らしい記憶のやうに常に妾の頭に繰り返されてあるのに……。

そして二人仲よく暮すうち去々年妾があんな病氣――肺です、云ふもいまはしい肺病です――に罹つて貧しい暮しが一層困難に陷つたので妹は見るに見兼ね、身を捨てゝ遠い〳〵西の京へ、舞妓となつて身を賣つて妾を助けてくれたのに……。

あゝその時妾の心は眞個に甚麽だつたんでせう、今迄手厚い介抱をしてくれた唯一人の妹を、あんな遠くへ手放して世の荒波にもまするのかと思へば、身も世もあらぬ悲しさ寂しさに寧此のまゝ放すまいとは思つたけれ共、それでは暮しが行き立たず、泣く〳〵も送つたけれども、妹はそれでも氣丈に『姉さん必らず心配なさらないでね、そのうち屹度治るに違ひありません否妾の一心で屹度治してしまひます。世の中では此麼家業を汚れてゐると申しませうが妾は妾の心から決して左樣は思ひません、汚れずに勤め上げた末はまた歸つて姉さんと美くしい生涯を送りませうね、病は氣で持つと申しますから決してお力落したり御心配したりしてはなりませぬ』と殊勝に云つて末を樂しみに出掛けたのを……。

難治だと云ふ此の病氣が妹の堅い一心でスッカリ治つてしまひ、人のすゝめに夫を持つて妹を呼び戻さうと思へば此樣有樣。妹に歸れと云つて遣つた時『妾は今は此の家業が何となく身について樂しい日を送つてますから、今少し此のまゝ置いて下さい』と妹にもない事を云つてよこしたも道理、それとこそ口には出さね妹も嘸心で恨んでゐるであらう、不實の姉よと怨むであらう、あゝ妾は怨まれても怒られても呪はれても仕方がない、妹よ何卒澤山怨んでくれ、呪つてくれ、妹のお蔭で助かつた此の命を、知らぬ事とは云ひながら今その命の親の戀人を横取りするとは、何たる恐ろしい事であらう、淺ましい事であらう。

今更嘆いたとて悔んだとて追付く事ではないけれ共、亮さんも彼の時何故只一言左樣云つてくれなかつただらう、あゝ妾は妹に苦しい思ひをさせてまで亮さんといつしよに居なければならぬのであらうか、何と云つて妹にお詫びをしたらよからうか、嬉しいと思ふ間もなく此樣事になつてしまつて。

（あゝ寧そ!!!）と力ある低い聲に心からつぶやいた。

空には星が燦然と瞬いてゐるであらう、梟の淋しい鳴く音が遠くきこえ、木枯が靜まつた後の夜は沈々として更けて行く。



佐野治郎左衛門

名古屋　渡邊　陵子

（評）妹の戀人てありし自分の夫が、自分と結婚する時に其れと自白せざりしか、姉妹の心情は憐れなれど、夫たる其男の沒暁理なるが爲め、同情が起らぬ。

○破産

伊賀　伏見蔦子

お蝶はふいと家を出た。

いつも美しい愛らしい彼女の眼眥は、什麽したのか、今夜に限つて何とも云ひ知れぬ悲哀を帶びてゐる。

お蝶は何處をどう歩いたとも無く、町外れへ出たが、フト氣が付いて、つい傍の城山へ登つた。

靜かな秋の夜は、だん／＼と更けて、穩やかな雨持つ風が、さら／＼と梢を辷つて、やゝ黄ばんだ梅の葉を一葉か二葉づゝ散らしてゐる。

お蝶は、とある大きな樹の根方に腰を掛けた。

そうして今夜の親族會議の事に就いて、更にまたいろいろと深い思ひに沈むのであつた。

お蝶の家は既に破産せねばならぬ樣に成つている、いくら苦しんでも悶えても、もう手の盡し樣がない、明日にも店を閉めねばならぬ、で今夜も親類の人々が集まつて、種々と相談はして呉れてゐるが、誰しも這麽になつてから、一肌脱がうと云ふ人が無い、ヤレ自分の頭の上の蠅も追ひ兼ねて居るにとか、無い袖の振り樣が無いとか、隨分今迄には無理な賴みも、聞いてやつた事のある叔父迄が、もう手を引いて逃げ腰になつてゐるのだ、薄情な！と恨んだ處で今更追ひ付くものではない。

「あゝお父さんは何故キッパリと破産するだけの決心が、お付きなさらんのだろう？、甚麽に辛らい切ない事情がお有りなさろうと、那麽薄情な人等を賴みにして何になるものか……けれども／＼お父さんももう五十にお成んなさつたのだ、それに妾に切ない思ひもさせまいと、思つて居らつしやるからこそ、あゝして獨りで心配して居らつしやるのだ、アヽ這麽時にせめてお亡くなりなさつた、兄樣でも居らつしやつたら！」お蝶は知らず／＼うなだれるのである。

サラ／＼と梅の葉が散る音に、フト眼を擧げて四邊を眺めると、夜はもう大分更けてゐる、時々寂しい按摩の笛と、遠くでがら／＼と響く空車の音ばかり、鬱蒼とした城山の樹立を漏れて、チラ／＼と見える街燈の灯影は、さながら淡い夢の樣。

「あ、あの三ッ目のは家のだが、あの火の點いてゐるのはもう幾日程だろう……」

誰れに云ふでもなく呟やいた、そうして云ひ知らぬ淋

しい感じが犇々と胸に迫る。

と見ると、向ふの立町通りを、ガラ〳〵と幾輛かの俥が、明るう提灯を點けて走るのが見える。

「あゝお嫁入だろう」

と云つた刹那、お蝶はスックと立ち上つた、そうして恨めし氣に見送つたが、其儘また崩れる樣に、元の根方に倒れかゝつた。

「あゝ家を閉めて了つたら、きつと一雄さんとの緣談も……」

と、云つて深い溜息を、つくと共に、ハラ〳〵と熱い涙は、お蝶の頰を流れた。

(評) 破產と云ふ實生活の問題を捉へて來たのは可いが、其れに對する女主人公の感想が未だ充分で無い、文章は何所までも無難だ。



うしろすがた　三河　寒菊子

○褪模樣

名古屋　志水道子

今日は心ならねど、辭みもならぬ授業上の相談會ありて、五時許漸く暇を得て、留守には病める友の、如何に心細く待つらむと、足を空に歸り着しは、新榮町の旅館の軒に早燈す頃なりき。

例は幼兒の母待ちつけたらむ如く、妾が戸を披く音を聽けば、重き枕を擡げて、凹める頰にも幽なる笑を見するに、今日は然るとなきが心許なくて、

『今歸りましたよ。嘸淋しかつたでせう。氣が氣ではなかつたけれど、藤岡樣が亦詰らない論なんか初めたもんだから……。』と、促せど答へなし。

胸轟きて、漫に夜具の襟除くれば、今朝出づる時覗しよりも、今幾倍の青き顏に、唇〆めたる齒の白きをぞ、他人は物凄しとも見つ。

妾は此儘になりにけるかと、思ふより他意なくて、首に手を掛け搖動して、『佳彌子さん、佳彌子さん、佳彌子さん。』と高聲に呼續けつ。急がしく土瓶の溫湯を含みて、口に容れむとする時、渠の双眼は幽かに開かれたり。

嬉しきに、今ぞ涙溢れて『丈夫して下さいよ、ねえ佳爾子さん。何樣でした、藥を上げませうか。』細き眼は、やゝ太くなりて頷くやうなるに顫ふ手に藥瓶取上げて、醫師に言はれし分量の誤たぬやう、躍る胸に幾度か問返して、湯呑に分けつゝいざとて進むれば、斯る中にも假初の目禮はして、苦き藥を飲みつつ、珍らしげに妾が顏を見上る眼は、美しき露を宿せるが、一雫溢れそむるより、頓て雨の如く蒲團の上に濺ぎかけたり。

妾も何とも言はれぬ心地して、胸まで衝來る涙を飲込みつ。寐衣の上よりも骨立ちて見ゆる肩に、夜着をかけやりて、

『苦しう御座いますか。妾は先刻歸つた時、眞個に如何しやうかと思ひましたよ。でも氣が着いて下すつたので、何樣に安心しましたらう。お醫師さんを喚んで來ませうか。』

『いゝえ最う其には……。』と苦し氣に唾を飲込みつ『先刻お歸りなさつた時は、折角忘れかけて……詰らない夢を見て居ましたので、餘計な御心配を懸けました。眞個に、何の御緣もない貴女に、此樣御心配まて懸けると云ふのは、何と云ふ因果な身でせう。』

『何貴孃、其樣に遠慮して他人がましく氣をお遣ひなさると、尙惡う御座いますよ。夫よりも早く快くなつて、一緒に學校へ被入い。今日も廣木樣が問きましたよ、先生岩田先生は未だ癒らないのつて。眞個に可愛い兒ですねえ。女兒なぞは、何時でも私の顏さへ見ると聞きますよ。子供の面白い咄を聽いたり、罪の無い顏を見ると、貴女は、必然ずん／＼癒るに違ひないけれど。』

聲に力を入れて言へば、欷歔作ら『御厄介にばかりなつて居ず、何日か左樣なつて、御恩報をしたいと思ひますけれど……。』と、後は夜着の中に聲消えて分らず。

燈して夕餐したゝめ彼には牛乳を暖めやりつ。明日のしかけを忽卒に濟せて、見れば渠は亦もや夢を逐ひたり。

机の許に今日の日誌を書終りて臥たる方を見遣れば思ひなしにや、例日より夜着の中小さく、夜會は髻結はねば壞れ易くて蒼蠅からむと此頃は引詰の銀杏返に結びやるが、今日は五日目ばかりにもや。油氣も無けれと、黑く艶ありて、髮結に梳かせたらば如何に美しからむと思ふ。

初めて學校の遊歩場の垣の外に心細げに立ちて熟々と子供の遊ぶを見たりし渠が折柄「妾が當番にて出てたりしと顏合せて、挨拶せん」か、其も、と言ふらむ面地の如何に美しかりけむよ。頰の肉は今のやうにはあらで、ふくやかに白きに深き靨顯はれ。濃き眉、淸しき眼、孰れか愛の泉ならぬはなきに、人は往きたしと望む花の都を振捨てゝ此奧山に漂寓は如何なる事故のありてならむ。

是を想ひ、彼を憶ふに、それかと思ふ節のなきにあらねど、渠が思想の淸く高き、然る汚れたる行狀に、操を破れる人とは、如何にしても思はれず。非ず。必ずや、他に深き仔細ぞあらむ。

名古屋には、親族もなしと云へり、妾も他鄉に漂寓ひて、此の如く病みたらば如何なる心地やすらむ。宿世の契深ければこそ、見も知らざりし人を、初め逢ひし時より床しく、懷しく、一言賴まれしばかりに、折節、女敎員の缺けたれば、校長に說きて入れき。年こそは妹のやうに思ひたれ、學の道は、遙に妾よりは姉にて、これが爲めに覺えし字は幾許りぞ。讀み乍ら知らざりし故事などをさへ、幾何敎はりけむ。昔の人は一字千金と云へりしを、黃金もて購はゞ眞に、妾が一生の俸給にても足らざらむ。



鬼ごと　岡山縣　村島きぬ

然ばかりの恩人とはしる〳〵勤ある身の心に任せねば、一日側に看護るともならず。然とて薄き月俸は友の藥料と、妾が食料とに皆無となりて、人を雇ふべき餘裕もなし。と思ひやりては、堪へかぬる涙に日誌の面を影濡しつ。

外面には、山風の木を弄る音、精進川の流の石を嚙む響など、馴れたる身にも最凄じくなりて、机押やる時、新榮町の「火之用心」の幽かに聞ゆるは、今宵も十時にやならむ。

（評）作者の同情の全篇に溢れし所から見ても、或ひは事實談にや、之だけにては未だ小說とは言ひ難し、文章馴雅にして得易からざる才華を認む、されど複雜なる思想感情を描出する小說には、普通の言文一致體を用ゆる方利益多し。

日記文

中村文學士選



△規定　文體は問はざれど日記に限ること、實際の日記其儘にても可なり、二十四字詰三十行以內、用紙前同斷一人一章限り、投書締切毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

二等

○秘め日記

名古屋市西莨町三大岩樣方　宮脇とし子

△十二月二十一日。早咲の白梅一枝の淸き香に、冬枯の書齋――閉籠る姿が胸にも、何となくあたゝかき春の通ふ心地。武井樣への返書一通、墨すり流して紙に向へば、さらさらと、おもひの儘に筆走る、心ゆくよき日なりき。

△十二月廿四日。赤き根掛の丸髷姿品高に、さても思ひがけなき幾月振なる訪はせたまひし見田の君子さま、いつにかはらぬ快濶の御風姿、そゞろ妬たうもあるよ。御物語によれば近く來ん春を待ちて、かの塚本の美奈子樣には某の君と華燭の典を擧げますとやら。奇しくも胸はおのゝく。

小窓押しあけて華やぐ夕榮の雲を仰ぐ――雲や無心、風に亂れて流れ行く末、あはれ、はかなきは雲ばかりかは。

何の思にか暮るゝを知らず。風寒く、珍らしうも今日は一と日笹鳴を聞かず。

△十二月廿五日。なになれば冬の一夜のかくも長き。さあれ、夢ならで鷄鳴聞きし昨夜の長くもつらかりしかな。

今朝は夙くより餅を搗くとて、出入の者共三五、勝手の方にてのさゞめき、耳にするもわびし。書を見むも憂く、まぼろしのごと、とりとめもなき思ひごとに、さてわれながらいかにやしけむと衿元寒き心地ぞする。餅搗いて、春待つ人の心ごゝろ、われには待たんいつの春ぞと、小鏡持つ手わなゝきぬ。

（評）煩悶の情、精しく叙せずして而も綿々の恨を察せしむ、老手と云ふべし。

三等

○平凡なる一日

天鹽國留萠村　相原壽美子

十二月五日。五時半起床ドンヨリした雪模樣で、大層寒い。綿入重ねをして八時半出勤。途中より雪が降り出した。生徒の遲刻は大分あつた。どうしても雪のひどく降る日や風の烈しい日は、朝の一時間目の授業が出來ぬので困る。四時歸宅。夕食の仕度は朝しておくので、すぐ膳を出して食べる。私の一番忙しいのは夕食後。先づ今食べた後始末をして、それから明日の朝

の用意をする。米は半町先きの井戸まてときにゆく。月明りでとぐ時は、まだよいけれど、今晩の樣に暗い時は誠に嫌だ等と考へつゝ提灯をつけて行く。ちやんと炊く許りにしておいて、さて割烹費を持つて買物に出かくる。魚屋に七分八百屋に五分、品物を揃へて歸つてくるとすぐ煮る。是は明日一日分の用意。今日集煮物が濟むと、その邊を片づけて、机を出す。めた清書をなほし、後は雜誌を出して見る。

十二月六日。昨夜大分降つたと見えて、あつちでもこつちでも、足駄の雪を拂ふ音がコツ〳〵と聞える。何となく靜かな朝だ。例の通り八時半出勤。一時間目に小川泰山が吹雪を犯して通學した事を話して聞せる。幼き幾多の小國民は胸をおどらせ、目を輝かして熱心に聞いてる。實に愉快。皆の心の中には乾度、泰山にまけぬ勉强家にならうと誓つて居るのであらう。四時歸宅すると、宿のおば樣からお團子を頂いた、空腹の折とて早速頂戴する。夜はストーブの傍で手袋を編み乍ら、お話上手のおば樣から、若い時の御話を聞く。床に入つたのは十時すぎ、今日自分のした事について、靜かに反省し、別に悔ゆる程の事もしなかつたので、嗚呼幸なる一日よ明日も亦かくあれかしなど祈りつゝ、いつの間にか目は堅く閉ざされ、心は故里に彷徨ふ身となつた。

（評）　斯の如き少國民を敎ふるに適せる導き境遇、長へに幸あれと祈らるゝかな。

四等

○日記の一節

伊勢　佐々木　らく子

十日日曜日（雨）。昨夜末の妹のこしらへ呉れしテルテル坊の効もなく、今朝は雨なり。あはれ約しつる紅葉狩も流れとなりぬ。とつぶやけば、妹は昨夜坊さんに酒を呑まさなかつたから雨が降つたのだわ。といふ。兄樣は、この雨にて今一層の色增さん。とすまし給ふ。昨夜宿題も爲し置きたれば、今日はいと呑氣なり、朝のうちに學科の復習を終り、午後は花の稽古に行く。夕飯に鰕のフライを爲る。いつになく味よかりしと、父上に賞めらる。いと嬉し。夜父上の肩をもむ。兄上は今日のほめられた御禮かといはる。弟のクス〳〵笑ふのもにくらし。

十一日月曜日、（晴）。今日掃除番なれば例よりは早く登校す。宿題五つとも正解なりしかば、元氣よく歸る。歸れば犬の子二つ生れゐたり。白とブチとにて可愛らし。弟は大喜び。夜は父上御留守にて淋し。文法の清書をなし、兄樣と歷史の問答を爲る。

十二日火曜日（晴）。霜白し。父上御土產のショールを掛けて行く。何となく人の眺める樣にて恥かし。俊子樣風邪にて缺席せらる。いと淋しかりき。朝日艦寄港中にて武島少佐の講話あり。話題は海國の女子にて、其快濶なる口調、滑稽も交りて大笑ひせしも度々なりき。

歸途俊子樣を見舞ふ。さしたる事もなくて安心なり。今日の講話のあらましを語る。夜は英語の復習をして、十時床につく。

十三日、水曜日、(曇)。東都の姉君への手紙登校の道にて投函す。今日は久々にてテニスす。津田先生にゼログーの失敗を取りぬ。夜蔦子樣より葉書來る。彼の紅葉狩のあやにくなりしをかこち、此日曜には降りても、とあり。直ちに お呼びなすつて 返し出しつ。

(評)　これといふ點もなけれど、日記文の好模範といふべし。

五等

○落葉日記

周防呼坂局區內　熊野縫子

一日。背戸の梨の葉がだいぶ落ち出した。柿は今が眞盛り、銀杏が始めて二つ三つこぼれる。

五日。百日紅の葉が庭一面へ落ち朽ちて居る上へ、扇の形の黄色い葉が、やさしうもちりかゝる樣は、誠に愛らしい。楮の葉がほろ〳〵落ち出したが、昨日の初霜のせいてあらう。

十日。宅の銀杏は、未だ苗木を植ゑ付けて四年ぶりので、至つて小さい、從つて早く落葉する。隣家には二丈ぐらいの丈のがあるが、まだ落ち出した許り、名高い庄家の銀杏は下枝の方は眞靑て、中々持ちが良い。



十五日。今日は少し風日和なので、柿も林檎も栗もみんなちつた。獨り裏手で梨の葉が慄へてゐる。隣家の銀杏は今が全盛て、ひらりひらりと落ち葉すると近所の稚子が三四人、各々小さな花籠さげて、得たり賢しとその金色の扇をひろつて居る、可愛い〻一幅の畵てある。

奥渡　早川いく子

(評)　瀟洒たる纖致又味ふべし。

秀逸

○ひと日

あしの葉

十月廿九日。火曜日。晴。

もう賣出しも明日と明後日限てあるから、今朝は早く支度をして三越へ行つた。母樣と赤坂の姉樣と三人。今日は大層すいて居て良い。よせ切にはどうも思ふ樣なのがないと、姉樣は唐縮緬の大柄なきれいなのを、いろ〳〵切らせなさる。多分花ちやんのきものになるのだろう。それとも私にも一つ位いお歲暮に下さるかも知れない、あれはどうしても帶の――私位の――柄だもの、そう〳〵こつちのは風呂敷にいゝ柄だなどゝおもつて見て居るけれど、下さらなければつまらない。此前はあんないやな羽織を買つたから今

ヨこそはと思つて、よりによつて漸く大好きなのを探し出した。あとで店を出てから、母樣が今日はお前の理想的つていふのだらうと肩をたゝきなさる、母樣も折々面白い擧を仰しやる方だと思つた。

隨分いろ／＼選つて居たものて、歸つたら十二時過ぎだつた。御飯後今日の買物をひろげて、品定めがはじまる。姉樣の御見立自慢を伺つて居ては、限りが無いからよい加減にしてお琴のけい古にゆく。二月越の新青柳がやつとすんだ。嬉しいからお祝ひにお八つのうて栗とカステラを、自分のわけ前から更に半分佐喜ちやんに分けてやつた。

平塚の大田原樣からおさつの太いおいしそうなのを澤山送つて下さつた。兄樣がいきなり亦俊さんのお得意の金團(きんとん)にして食はされるのかねと仰しやる。其くせ御自分大のお好で澤山召し上るくせに、いゝもうこんどからこしらへてもさしあげぬから。夜姉樣は歸つておしまひになつた。泊つていらつしやれるといゝのだけれど、花ちやんが待つてゐるのだろうから其樣にいかない。珍らしく四谷の澤田の御隱居がいらしつた。相變らずお嫁さんの不足だら／＼。

それがなか／＼果しもないからよい加減に私は引き下つて、部屋を片附けて寢支度にかゝつた。序に簾を一本たてゝ。

（[illegible]）[illegible] [illegible]。

○なでしこ

[illegible] 淺井ゆき子

八月廿三日。小鉢の撫子が五つ咲き風にゆられて、紅の露がこぼれそう、お皿でも置いたならよい口紅が出來やうとあかず眺めて、楊子つかふのも忘れ、急いで井戸端へ行つて見ると、昔の後とみえて、金盥に水が八分目位、旭がきら／＼反射して實にうつくしい。

同廿五日。水盤のお芋の葉が不揃ひに伸びて、其影に小蜘蛛が眞白な絲を引いて鷹揚に涼んでゐる。一匹の蟻が危く水を越えて、知らずに蜘蛛に近よると、絲で卷かうとする其の面のにくさよ。夕暮親友の秀さん來られ、打ちあけ話の興味のあつたこと。

同廿七日。『夕空はれて秋風吹き……』なつかしい樂の音が聞える、商業學校の寄宿生であらう、由井ヶ濱の友から繪端書て『潮の遠鳴りや磯の波の音を聞きに來よ』と云ひおこさる。今宵月のあかい中に秀さんの來るのを待つ。

同卅日。碧梧桐の葉がばさり落ちて、天狗の羽團扇かと驚く、槙の葉ごしに日が照つて殘り蟬の聲が極めて暑くるしい。お隣りから秋茄子をいたゞき、『秋茄子嫁に喰はせるな』と兄樣笑ひながら……お口の惡いこと――。

九月一日。朝やけが眞紅に、おしろいの花はまだ眠つてゐる。薄暗い廚の戸を開けて庭で深呼吸をやる、古

仲さんの女中が共用栓をひねつて行く。細いうすい月が殘つて、雜草の葉に露が可愛らしく光つて居る。

同三日。垣の烏瓜が飽々と下がつて、向ひの屋根に烏がうるさく鳴く。

八幡の森のこんもりした梢からすゞしい風が傳はつて來て、外濠電車が轟々といやに物凄く耳をかすめる。何んだか陰氣な日である。

（評）着眼おもしろし。

〇秋枯日記　信濃　山田　くにゑ子

十一月七日。はれ。朝は殊に霧深かゝりき。板戸のかげなる寒菊に手入す、花は薄紅なれども、寂しき影に心引入れられぬ。泥の手洗ひて家に入れば、末の妹芳子「姉様御手紙が……」と渡す、誰れならんと見れば、あゝこはなつかしき菊子姉よりの御玉章なり。胸の血はおどりぬ。なつかしの姉よ、こは去る神無月、深き愛に沈みし妾を悶の中より救ひとりて、再び胸の冷し血汐、あたゝめ給はりし義の姉君なり。いそがはしう切る封も、もどかしき心地す。

よみ行きていよ／＼切なる人の愛情、我は涙を止むるあたはず、……菊子は我一人の友、永き命の姉君なり。ひるすぎて物縫ふ。今日は稲荷の祭禮なれども。夕方小井川に火事ありき。一軒にて消し止めたるは不幸中の幸、蜻蛉の數昨日より少し、あゝ蜻蛉の一つ／＼に、やがて暮れゆく秋ならん。

九日。雨。淋しき名なる哉村時雨とは。今日は朝より此雨しきりなり。遠く東に病む人の上を思ひて胸は重し。姿見えぬ彼の人よ、やさしき御名に憧憬れて、草に埋るゝ影を追ふ少女、そは君の悶となるとも……ゆるしませ、淋しき眉、そげし頬、色なき唇に涙そゝぎて、君が御運命を心のまゝ泣かんと思ふに。ふと細き音に物の落つるとふり返り見て、落葉にそゝぐ村雨に、淋ゆく秋の色を見たり。

ひるすぐる頃、かねてやかましかりし左隣太物屋の嫁樣今日いよ／＼離縁とさだまりし由。無邪氣なる立居の世帶じまぬがもとなるとか。やさしげなる君なりしにと、人事ともおぼえず胸はふさがりぬ。はかなき哉女のゆく末。

夕方机上の淋しさまゝ、雨の中より花屋を呼び入れ、コスモスの白きを一尺に切りて買ひとる時、ふと入りし、郵便脚夫の手より再び、東の人よりのたよりをえぬ。鐘の音いと物悲し。

（評）末たのもしき筆つきあり。

〇日記の一節　京都　草　覆盆子

八日。御隣りの時計がチーンとなりかけたので、何時かしらと、耳をすまして居ると、騒がしい靴の音が靜かな朝の大地を響かせて來る、恰どワン、ツー、スリー

が合圖と見えて、皆一齊に、
「抑熊谷ハーゲアタマ、頼朝公のハーゲアタマ、關東一のハーゲアタマ、智勇兼備のハーゲアタマ：：：：：ハーゲアタマ：：：：ハーゲアタマ。
妾しは思はず床の中で噴き出しました。
ホヽヽヽ面白い軍人樣。
今日は針の供養ですから、胡麻の入つた蒟蒻を煮き、それに一年中の折れた針や歪んだ針をさして、晩に加茂川へ流しに行きます。斯樣にゆかしい風習は、いつまでも保存したいものです。
九日。學藝會の爲、歸りがおそくなつたので、少しでも賑やかな道をと思つて、御幸橋を渡る、黒づんだ東山の半腹がキラキラと明るいのは、大方都ホテルでせう、こんもり茂つた糺の森の下には、あるか無いかの晩橋が夢の樣にかゝつて、柳の並木の間からは隙間もる灯影がちらちらと、橋の孤燈は水に映つて白銀の珠を飛ばしてゐます。夜の加茂川は實に絶景と見惚れて居ると、第二女學校からオルガンの音が靜かな空氣を縫つて聞えます、急に比叡山おろしがザーッと羽織を見舞ふと「オー寒い」と辻車の車夫がふるひ上る。
歸つて宿題に手をつけて居ると、庭の八ッ手にバラバラと雨のかゝる音、一寸戸を明けると、昆布屋の金坊が何やら歌ひながら歸つて來ます。「雨のしよぼ〳〵降る晩に豆狸が徳利持つて酒買ひに――」。

（評）可笑しき唱歌に、珍らしき供養。よしや。針供養はげに保存したき
はげあたまの歌は絶ゆとも、
ものなり。

○十月十二日　岡山縣　廣江壽子

岡山行きの遠足運動が、雨天に付き見合せとなつたので、弟は獨り腹立しげに狗を抱いて學校へ行つた、後は家の内はしんとして飼猫の玉が、私の室に來て、弟の置いて行た毬に戯むれて居る許り、至つて徒然な日だ。新聞を見たり雜誌の拾ひ讀をして居る中、雨もやうやうあがつて、雞が眠そうな聲で鳴いたのは、午後二時頃であつた、障子を繰りあけて大きな欠伸を一ッ、雲足の急な空を見上げ乍ら庭に下り枝折戸をあけて外へ出ると、雨の名殘の草葉の露は、太陽の光を受けてきら〳〵と輝やいて居た。見渡すと遠くの山の裾に白い霧に包まれて、杉林や田家が茫乎として恰も一幅の油繪のやう、萬頃の稻田は今し吹き出した雨あがりの風に、黄色い波を立てゝ、折ふし群雀がパッ〳〵と飛び立つと思ふ間に、今迄明瞭しなかつた向山の松林や荒神社の堂宇や薄紅葉した山々が、次第に薄らぐ霧の中から現れて來るのを、暫らく恍惚として見て居たが、やがてぶら〳〵と踵をかへして室に入ると、弟は既に歸つて居て「姉さん明日は愈々遠足運動よ」と今朝出る時に引換へて喜色滿面、嬉しそうに毬を天井へ投げて居た。それを制して、私は弟とたわいもない事を語り乍ら、昨日生けた花瓶の菊を見て居ると、一羽痩

蝶が力なく飛んで來て、そが花にとまつた「やッ蝶が」と弟は矢庭に捕へやうとするので、私は慌てゝ其の手を抑へ乍ら「可哀そうにお止し」と言ひ様蝶を助けて飛ばしてやると、弟は口惜しそうに私を見乍ら澁々室を出て行つた、と思ふと勇ましい聲で唱歌を唄ふのが聞えた。此の夜飼猫の玉が始めて鼠を捕つた。八時半頃床に就く。

（評）行文流水に似たり。

〇十二月六日

讃岐　笑月

こけこつこー一聲は夢心地に、二聲目にはつと眼がさめてあたりを見廻すと、父様は早や例の御運動にいらしたのか、御枕元には淡暗い豆洋燈斗り、母様が井戸でぎー〱と水汲む音がする。姉さんと二人でお掃除を濟して手早く髮を結うて湯に入つて、歸つたら八時半、食事もそこそこ宅を出た。東の四つ辻で中島さんとあつて一所に行く。出勤簿に捺印して自分の席に付いた、課長始め皆揃つて居る。妾は二人の友と共に熱心に事務を執つて居たら、小使が茶を運んで來たので驚いて時計を見ると十二時には、もう十分。お辨當を濟ますと又筆を執つた。隣室ではほとんど絶間なく、チンチンもし〱あなたは……の聲がする。不意に給仕が窓から首出して岡見さん、一寸庶務まで……ハテ何だらふと思ひながら行つて見ると、思ひ掛けない昇給令て、席へ返つて同室の人々に挨拶すると、皆さんがお目出度うつて被仰る。早く宅へ歸つて此辭令を見せ度い、けれど未だ四時には三十分もある。朝から曇つて居たのが次第に暗くなつて、とう〱降り出した。然も大粒の霰で窓硝子を打つ音がけたゝましい、十五分程でやんだと同時に、西風が強くなつて、見る見る空は名殘りなく晴れ渡つた。外を眺めて居た伊賀さんが、マー夢みたいだつて。やがて時間が來たので三人連れ立つて歸る。直ぐと昇給の事云つたら、案の條母さんは喜ばれた。そして父様も姉さんも。明日は赤い御飯をたきましやうなど云ひながら夕餉の膳に向ふ。食後炬燵に集つて樂しく談笑して居る折柄、郵便と投げ込んだ一通は丸龜の兄様から、大急ぎで封を切つたら、いつもながら活潑な文、然も優しさは紙面にあふれて、殊に新年には歸宅とある、幾度も繰り返して居たら、十時の鐘が促すやうにひゞいた故お返しは明朝書く事にして床に就く、樂しい今日も暮れた、ああ待ち遠しいお正月!! せめては今宵の夢になりと見たいもの!!!

（評）老手。

〇十二月十日

肥後　富丸敏子

曇。今日は金毘羅祭なり。午前九時頃富野様がこられたので松下様をさそひ金毘羅様へ參詣に出かけぬ、

村はづれ迄行くと道端に十二歳程の娘、破れ着物に素足、悄然として歩むでもなく立ち居れり。妾は哀れなる彼の娘を見過して行く事が出來なかつた。あゝ彼れこそ空の浮雲、親もあらう、親族もあらうに、兄弟もあらうに、ちぎれ〳〵と何處と迦る處もなく行先を我家とし……。哀れなる娘は人人の樂しく通り行く者をうらめしげに眺めて居る、松下様と共に小使錢の內より少しづゝ彼れにあたへぬ。わたしらが金毘羅様の門に入る時ふりかへつて見たら彼の娘手を合せ吾等が一行をおがんで居つた。

（評）活ける敍寫

○日記の一節

大分縣　三浦夏子

十一月三日。晴。よべよりの雨なごりなう晴れて殘んの星影夢の如く淡し。今日は天長節なれば式に列る、人老いたる若き羽織袴の、折目正しく着飾りて美はし。妹どもに衣服着替へさせ送り出せば、イソ〳〵と出て行きぬ。

十一月四日。曇。庭の隅に植ゑ付けし菊の手入などして眺めけるが、フトなき父の命日なるに氣付き、一枝手折りて佛壇に供へぬ、『吾が丹精を凝らしたるものぞうけ玉へ』と念じつゝ。

夜都の兄より文屆く、返しす。

十一月五日。晴。天も日嗣の御子のいでましをほぎまつるにやあらむ。空いと美しう晴れたり。皇太子殿下、奉迎の爲、蓬萊丘の近くに待つ。高等官判任官軍人、それぞれ禮服姿美しう、往來忙はしく拜観の人々夥し、聖代の御世とは云ひながら、われ〳〵はしたなき者まで、雲上の人拜し得る幸福、身に餘りて恐れ多くも畏こき限りなり。

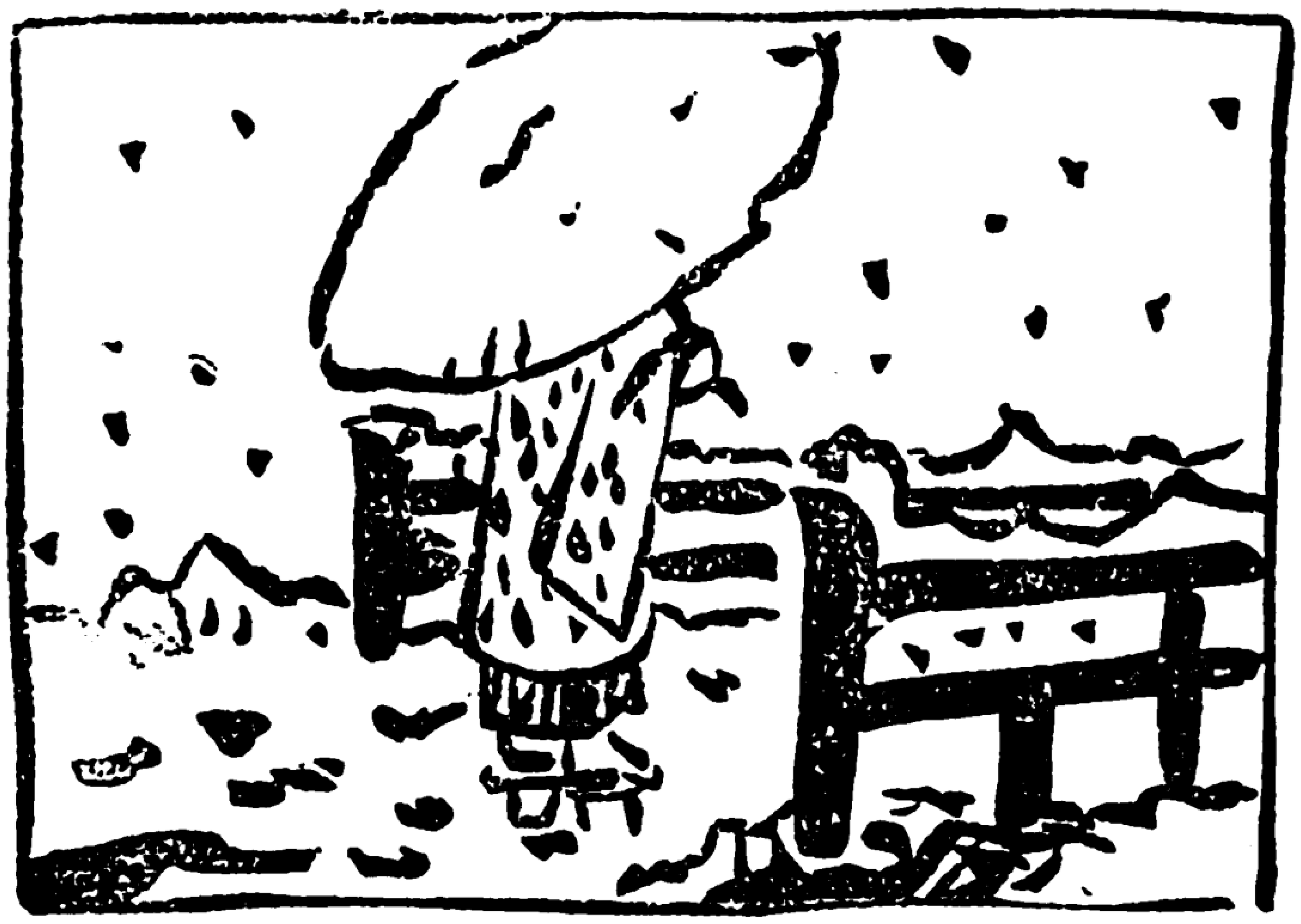
夜提灯行列の催ありて賑はし。

十一月六日。曇。かねてちぎりおきたる事とて、友誘ひ春日浦なる水兵等の催すボートレースを観にとつれ立ちぬ。

正午皇太子殿下我校におんいで遊ばされ、光榮限なし。

十一月七日。曇。降りもせずさりとて晴れもやらず、いとおぼつかなき空にて、折々雨さへこぼれぬ。

畫　熊本縣　杉みすゑ



新體詩

橫瀨夜雨先生選



▲規定　詩形詩語何れも自由なり、成るべく振假名を多くし、句數は二十句以內とす、用紙も締切日も前同斷、一人一篇を限り明瞭に認むべし懸賞は甲種の規定に據る。

二等

○氷の湖

阿波　長曾我部菊子

矛杉の枝碎き、
蓼科の山の上を、
降る雪のやや止んで、
明鏡は曇りけん、
堂內に入り亂り、
またも世に恐ろしき、
みすゞかる信濃路の、
氷柱垂る寺の門に、
白頭法性の、
狐火は冬草に、
山門を埋めんと
はせめぐり來てし雪。
鐘をつく觀音寺
影昏き諏訪の湖
扉にすがる裾まいて
降りとなる夕かな。
日の雪に膽きえて
吾が笠の重りゆく。
甲被て點しけん
現はれててらさねど
かゝる日は紅色の、
雪積る氷の湖の、
たとへば白臘の
灰色の浪の穗は
ああ故郷は夢の國、
湖の岸にして、
裾を蹴て八重垣姬
氷をば渡らじか。
氷るごととくるごと
さらさらと動くを
たゞ雪の降れるのみ
風に散るわが淚

（評）五五の調子は成功すればめざましきものになる、「氷の海」なども典雅優麗しかもよわ〳〵しからず、會心の作と言ふべし。ともすれば吹雪の風にあふらるる衣袂を抑へて伽藍古りし觀音寺の山門に行き覗める人の樣が明らかに浮んで見えるようだ。

三等

○夢のゆらぎ

越後　河島和歌波

靈香薰ゆる天の階、
幽かなる——何の韻、
得も入らず微に迷ふ、
あわたゞし眞弓たばさみ、
まばゆしや金流の光、
うめきかそも翼を馳せて、
遠きより近きより、
夢いづこ彩扉に走せて、
白虹は今東にかゝる。
童子は立つ裾の下より、
闇路は杳か西に落ちて、
魔障の眼は光に盲ひぬ。

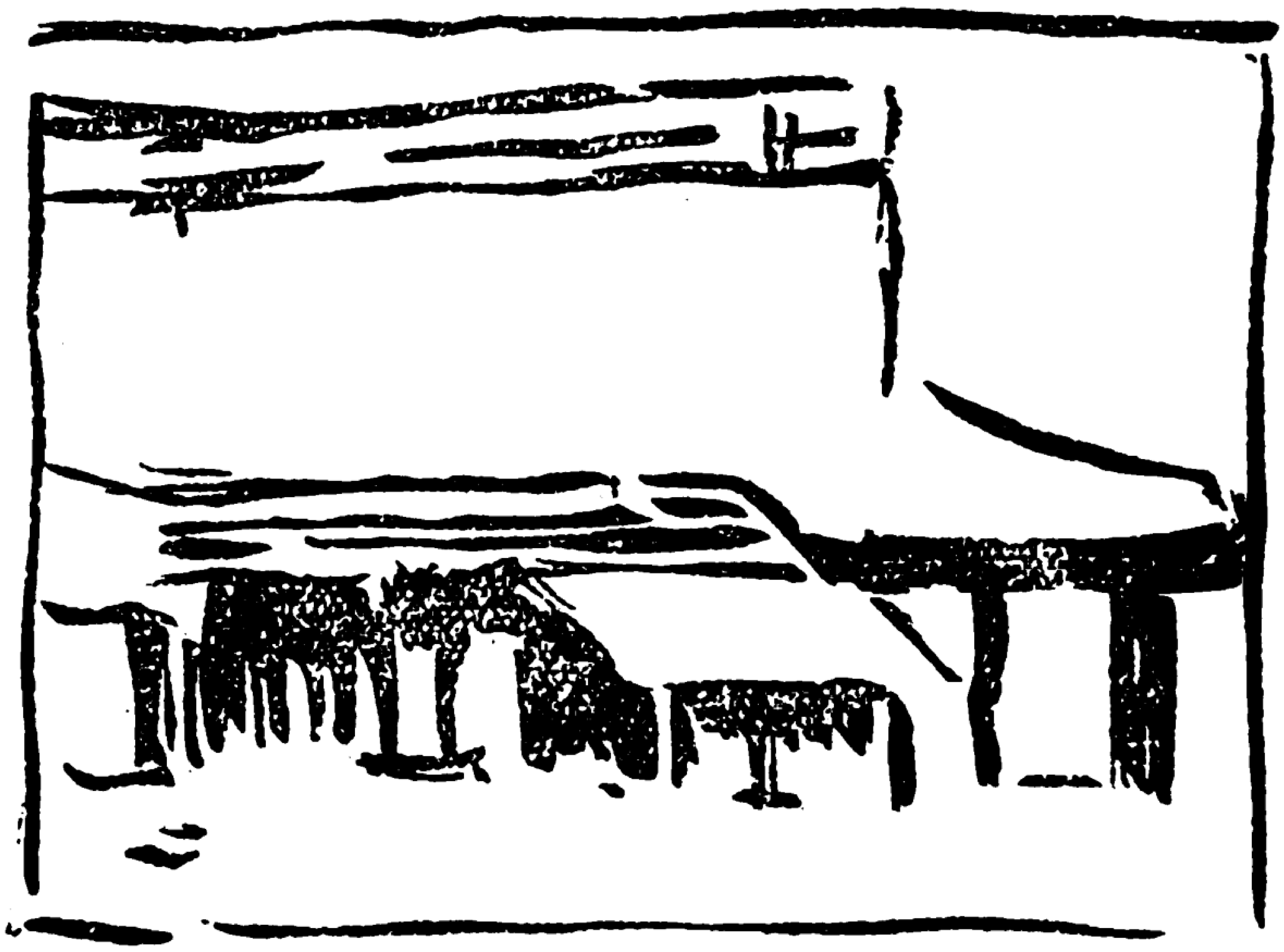
ゆるされて瑠璃座を回り、
御殿に立ちたる王者、
紫綬の章九曜を宿し、
白冠は輝き映えて、
享楽の金盞献ぐ、
荘厳の曙の天。

指すに紅典亂れ、
聖堂に鐘鳴る頻り、
今か滿つ野の濃紫、
くたちたり白羽の使、
見よ東天爛色破れ、
神女は舞ふ無縫の天衣。

高塔に我魂のせて、
紛れ行く「夢のゆらぎ」や、
美酒に酔ふ事知らず、
導かれ導かれてぞ、
吾れいつか彩の扉くゞり、
馳けり行く詩の大宮

（評）「蝦蟵在東」と云へば淫奔な意味するが、これは朝ひがしの空に虹の出たのを歌うた不思議の詩だ（朝の虹は西に無けりやならぬ）が「夢」とあるから甘んじてこゝに上したのである。虹の歌は度々手がけて皆が皆似たり寄つたりの作だから困る。なほ新しき詩境を開拓してかれ人に目を眩らして下さい。第三聯ことに目ざましいが、もと「白冠は輝き映ばゆ……荘厳の曙なりや」とあつた。

農家　茨城縣　小畑みす子



五等

○晝夜

福井　青橋雲女

塵少しうごき初めて
人の聲馬のいななき
攻め寄する晝の國人
こゝかしこ霧の幕も
有明の風に破れて
夜の都荒され初めぬ
照る月は歩みを早め
星の子は光りつ消えつ
清きもの皆たじろぎぬ
富士ひとり翼なき憂ひ
遠ざかる友の姿を
曇る眼に追ひ縋りつつ
あゝ月よあゝ星の子よ　思はずに諸手をあげて
富士は呼びぬ「夜は亡びん」と

山の端に童の王出でて
まばゆしや黄金の冠
白妙の雪ぞ崩るる

先づ賜ふ黄金の光
いさをある山とし思し
彊られて富士は飾りぬ

あゝひとり塵に殘れる
月消えぬ星も隱れぬ
いかめしき山のすがたよ

（評）この人の筆蹤の効きに驚き、さらに詩の大人びたるにおどろく不思議なる現象として君の前途に注目したいと思ふ。

秀逸

○寂興　千葉はつ子

神無月、音こそ冷ゆれ、
森にして、黄色落葉のから〳〵と、
風にぞ卷かる。寂默は幽にひゞきぬ、夜の森。
わなゝく木末、木兎なきぬ
紅のこぼれし萩の葉は、すゝり泣くごと、
少男の（恨みの聲とこそ聞け）
うなだれ、葉ずる風毎に、――

かゝる夜は、ふと思ふ。
戀心地！誰れとしもなく身は覺ゆ、
（人の戀路は限りあり）
森の少男を胸に抱き、死なむと思ふ、（淋みの興）
あゝ淋しみぞ嬉しき。枝よりたるゝ蜘蛛は、
氷りて死しぬ、森の夜に、（戀の緋文字）を胸にして、
死なむと思ふ、（淋しみの興）

（評）「小男」とは秋の實をさしたのですか、しかし泣菀なまれ損うてはいや味に墮ちますよ、これだけの才があれば立派な御自分の詩も作れるでせう、作ってごらんなさい。

○しぶ柿　安居金子文子

百舌啼く柿の樹、上枝たかく、なゝめに浴ぶる夕陽の影
一つ殘れる澁もつ柿實の、紅きに榮ゆるそれもしばし
情ある秋姫、色彩をそへて、など味をしも忘れたりし、
鳥も啄まぬ汝が幸か、秋風、三月を熟みて落つる。
歳毎斯くしておちて朽ちて、自然の技は地にかへれ
儚なき生命と人は謂ど、こはこれ「運命」ぞ、子等が上の。

行く秋、さらても、追懐多き、夕べの雲をうちあふぎつゝ
わなゝく左手を額によせて、ひとり寂しく窓に倚るよ。
（評）「夢笛集」の昔にかへるのですか、わざとらしき口吻てす。

○夕の街にて

四谷　河野楔子

み空の星と數を競ひて、　露に仄浮く燈火の花
ゆれつ又またゝきつ。
「酔心地、魂はうかれて　人聲のゆらぐまに〳〵
華死斯のかげにや入らむ」
露ゆ現れ我前よぎり、　露に消えゆく電車や馬車や
地もふるふ轟きや。
「夢心地、魂は走りて、　遠方の魔が世を呪ふ
ところとのみ幽かにきゝぬ」
ひろごる闇の翼を延ひて、　砂をしまきて、花自動車は
七彩の虹をふく。
「燦爛と奇し輝きに、　めくるめき暗にのがれぬ。
我魂は肉身にかへりきぬ。」

（評）華美。

○恥かしさ

東京　椿　友子

堅くむすびし緋綸子の　帯は少さう見ゆれども
恥かし姫はほゝゑみて、　ふしめがちなるわが手とる
始めて結ひし高まげの　根結の元にかざし入れ
「笑ひますな」と横目する　我頬はあつし頭痛む
姉は初子を産みてより　髪よ少なうなりぬれど
つやある色はたもちけれ　母の波をよろこびて
口赤うせし幼時　猫に紅さすいたづらの
人に云はれぬ恥かしさ

（評）はじめて島田を結うた心もちはこれだけてせうか。こんな詩材はあなた方の獨壇てす、なま中可の詩題をあやつりて男だか女だか知れぬような六つかしい詩を作ろふよりか。どんなによからう。私はあなたが好きだ。

○深夜

石見　なてし子

目守れるなゝに燈の色　いつしか見えずなり來る時
我身の在りや無しや知らず。さめたる心すなはちわれ。
目にこそ見ざれものゝこと〳〵。耳こそ聞ね聲こと〳〵。
見聞を何の遮るあらず。
大きく小さし廣がる「空間」。長く短し積ける「時間」
萬は一つ一つよろず。

（評）言ひ足らぬ作。

○清驕

京都　薔薇子

むらさきつどる瓔珞の、　一つ一つに香をこめて

かざすに長き藤のふさ、　染めて艶なるそて模様
まだ戀しらぬをさな氣に、　人恥ぢらひのおも伏せや
小袖にかくす琴の爪、　落ちては躍るわかきむね
しらぬ惱みに悶えては、　むねの血しほのさゝゆれて
人なき部屋の小屏風の、　なかにぞ結ぶ戀の夢

（評）小屏風式。

○おちげ　　大阪　生田さくら

黑き落髮の一すじをくらき戸ぎはに拾ひけり。
つやはなけれどそのかみに男の胸にとゞめしか。
あゝこぼれたる一すじの落髮に胸のとらはるゝ。

（評）暗き戸口に一毛を拾ふといふつかまへ所はよけれど、これだけでは何にもならない。

○應接室　　德島　ますこ

花、色なづむ故郷のあさ、　黃金いちごをなつかしみ、
雨にぬれたるうるをひに、　うみつはりたる一つぶを、
少女いみじき手にとれり。
心、われかの夕しぐれ、　庭面の木立泣きぬれし、
窓のうきぼり甕ゆり合ふ、　圓穹に花瓦斯の、
きらびやかなる應接室。

（評）あなたは人の詩を生かじりによんでるからいけない、いろいろの名前を使ふのもよろしくありません。きつと言つときますよ。

○かしわ賣店　　名古屋　稻　盈　子

あゝ世は、　世の生存のあらそひば、
あえかなる人もまじりて、　うす暗く店をとりまき、
いやめして眼殷なづら、　おどましや。
まださめぬ、　肉のぬるみ白眼とづ
頸をばむげなく葬ろゝ、　首つかみひらめく刄物
迸る鮮血淋漓、　咽喉破れて。
あゝ無殘。　鬼どもが努力の姿
腹斷ちて引だす臟腑　若者の手にまつわりぬ。
あゝと詐り優しき人は　居ひそむ。
冷き匂ひ、　ことくと出刄の音絕え
肉は皆運びさられて、　倦怠しぬ鳥屋の主人
欲みちし智し居睡眠　冥府をこそ夢みれ。
寒風に、　（炙り出し戀……）の細りて
喫竿が成町に折れしあと　鈍たゝき鈴におはして
流しくる尼跡のむれ　手まねきぬ、女主人。

○紅牡丹　　矢作　永田ふみ子

待つとしもあらでたゝずむ　姐のきは、ひとり夢みぬ——
碇眉のひそみのこる　「歡樂」の花の紅。
聞え泣く姫なつかしや　みだれ伏し、やぶれし窓の

悲しびにくづをるるかも、
雨もよひ闇は濕りて、
草はたや、牡丹の繁み

○呼びえぬ姉

畑を越えてむかひなる
柚色したる窓の家
桃われ姿うつくしき
おもぶくらなる人をこそ
庭の隅よりほの見つれ

姉によう似しおもかげの
たゞなつかしう、山茶花の
繁みたる幹のかげにより
六尺の窓をうかゞへば
近より來たるけはひして
胸の血しほのわく心地——

紅ふかき頰をよせて
斷念りては「姉君」と
呼びても見たれ、うしろより
母は我が名をよびませど
立ち去りあへぬ涙かな。

○凧

若草もゆる春の野や、
平和の夢の譜を秘めて、
旭ゑがきし大凧の、
紺碧濃かる大空に、
見ずや彼處の森の中

うら若き紅の牡丹よ。
薄鈍む空を行く鴉、
音もなし、風の麌へ。

麹町　淺井ゆき子

紅葉がくれのあたらしき



編物　下總　藤崎美奈子

高知　門田きくゑ

小川の流れゆるやかに
長閑けき夢にふけるとき
奇しきうなりに糸ひきて
揚々として上りけり。

女神の肌に凝ぬめて

常春謡ふ大宮居、
聖人貴き香たきて、

○戀の火かげ

神の威嚇も
恐怖の念も
消えてあとなき

白菊かをる秋の日を、
病に寂し吾心、
淺みどりなるなきがらを、
優しき眼は閉き得て。
小春日和の暖かく、
朱房飾れる丸髷に、

見よや彼處の山の影、
五濁に浮まぬ大伽藍

丹後　白萩

効かばこそ、
柄の間に、
夢の子の
胸に殘るは
戀のみぞ。
夜は冥暗に
なるにつけ、
燃ゆるは胸の
戀の火ぞ、
夢路をたどる
人の子は、
戀の火かげに
焦るゝなり。

○繦眼兒を失ひて

山梨　渡井藤枝

熱柿をとりて指先に、
つけて出せば媚しげに
ついばむ程に人なれし、
我が愛ぐしき繦眼兒は
あゝはかなくも斃にけり。
美しき音に慰めし
はだへにつけてあたゝむるも
窓の紅葉にてりはゆるも
玉をころばす聲もなき。

◯燈下の虫

虫一つあかりの中に、
あはれそは神失ひて、
「疑」と「信」の間の道を、
舞ひぶりの弱々しさよ、
何時にか消えてゆきけり、

丹後　戀見千代子

浮かび來ぬふはり〳〵と、
生も死も倦んじつる子の、
無意識に彷徨へる如。
ふと輕く吹けば飄、
夢のごと幻のごと。

◯白き羽

秋の日森の下小路、
寂音ふりなく河雀の、
胸の弓弦の高鳴りを、
ふと我が立てる岩が根に、
あゝ大理石の如輝ける、
此の世を辭する歌かきて、

茨城　小泉はま子

もつるゝ雲の影追へば、
尾を吹く風の寒きかな。
さゝき優手に抑へかれ、
流れよりたる白き羽。
冷たき羽の一片に、
藝術の神に緣へ得ば。

◯朝露

朝露かをる園に立ちて
答へはあらずたゞずむに
みだれてながき草笛の

成東町　靜月女

木芽摘む子の名をよべど
塔にぬれよる黒髪や
風に顫くひとふしよ

◯羊に

君を迎へて早や一年。
夏は木陰に休らひつゝ、
嘗きに笑ひし事は百千餘、
戀しうなりぬ。あはれわれは、
いざゝらば君よ十二支宮に健全に。

京橋　今泉磯千鳥

春は草おふる野邊に遊び、
惡しきに煩みし事もあれど、
われは幸の子、君を迎へて。
君と別れに。されどせんなし

◯玉むし

―おん歌卷を讀みて師の君に捧ぐ―

大津　今村野百合

秀枝すゞしき大楓
彩る胸のかゞやかに
誇らの歌はあられども
みどり若葉に枕して
金花蟲こそはうまいすれ。
ある日ふとせしおん假み
木陰に佇む姫君の
そと秘められぬ化粧箱。
姫が日毎のおん化粧
香の丁子に醉ひ痴れて
うましみ夢におちいりぬ。
歌を思ひてさまよひの
袂のみ袖にまぎれしが
嵯田小櫛や京紅や
命忘れて玉むしは

◯寂しう生れて

蕭條として黄昏を、
彌逐ひたる攻はまた、
われは寂しく立てるかな、
くさぎる御手の冷さに、
我を念じて居給はん
竹の花咲く故郷は、
俗論もうすれぬ夕霧に、
寂しふ生れて廿年を、
寂しき人を秘むればや、

周防　内山美子

草より起る秋風に、
露つみたる小野のべに、
白菜畑は霜おきて、
忍しつ母は幸あれと、
吹くな秋風母の面。
熟柿の冷に秋たけて、
與三は聟よき男子なれど。
涙に埋めし胸の中に、
寂しき故郷のせちに戀しき。

詩の原稿より

撰者

一月から醉茗さんに代つて新體詩を撰ぶことゝなつたが、一月號は二百九十一人、二月號は百六十人といふ大勢の人の原稿を頂戴して、それ〳〵處分したが、ちと申したいことがあるので雜誌のすみの方を借りることにしました。

選者の說によると每々かう書いては惡いかの、あゝ書いたから誤書になつたのかのとお問ひになる方が多いさうですが、第一投書規則を御覽なさりながら葉書へかいたり、草書でかいたり崩れるのには弱る、なぜてせう。行數にも制限があるのに長い長い詩を下さる方もある、よいからとてそれを採ると外の人の領分が狭くなるから、樂みを人に分つといふ積りて、短くてよいのを寄稿して下さい。

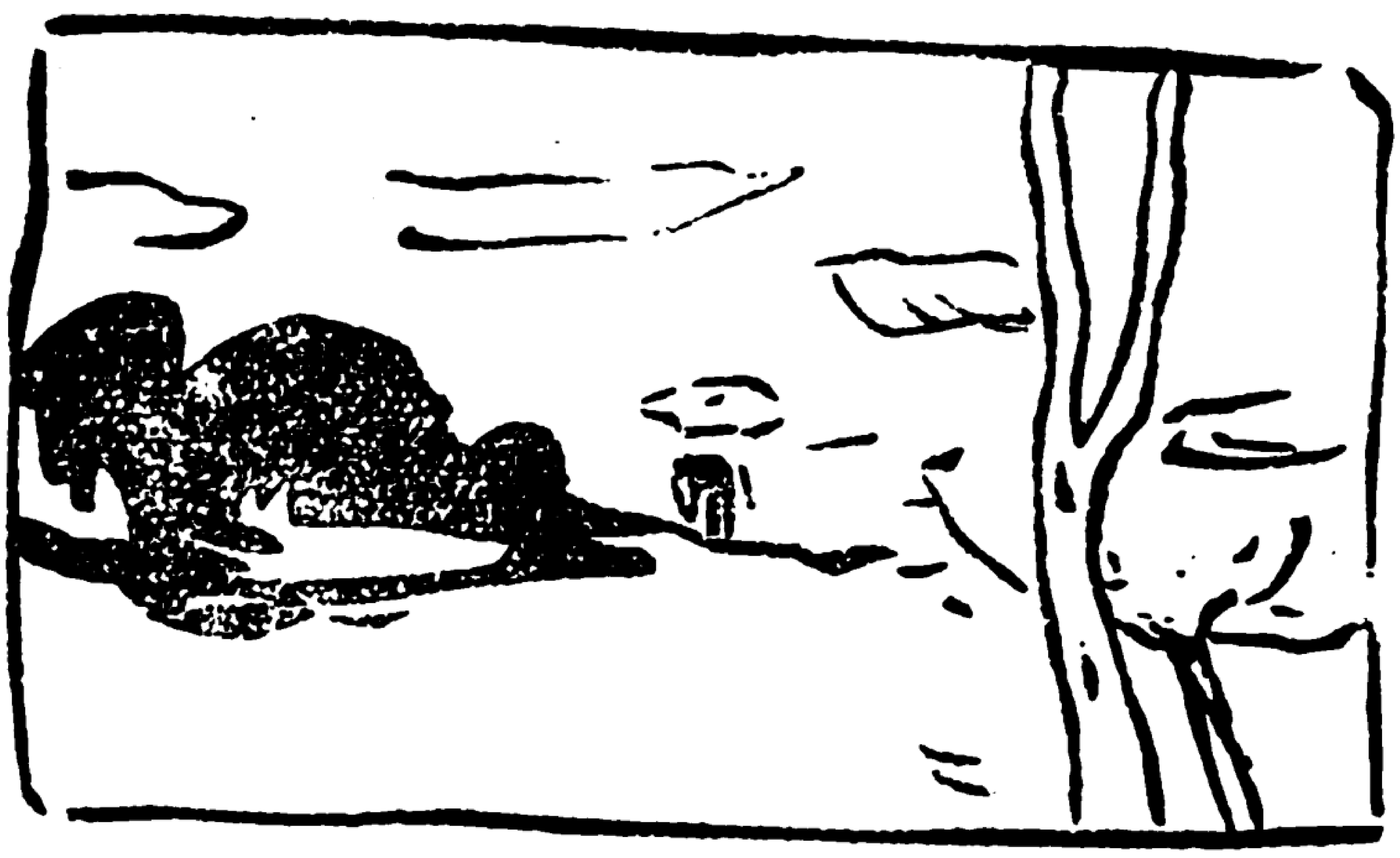
人の作つた詩を無斷で拜借して飾い顏をなさらぬ方もある、これは恥知らずと申されねばなりません『白羊宮』の作を拔きがきにした人、『背海波』から引張つて來た方、甚しきは夜雨の十年前の舊作を知らぬ顏しておくつた人など、實に呆れかへる。よし一時は撰者をごまかして虛僞の名譽を得るとも、心に省みたら無限の恥辱なるとを知らぬ筈はあるまい、自分はそれを惡むよりもさもしき心の程をあはれみます。

住所姓名は必ず題の下へかく事にしたし、雅號よりは正しき姓名て公にした方がよい。美文のある方は脇の方へ小さく誌してもよし。

さて今回集つた原稿から、誤字やら假名遣やらを拔いて（）の中へ正しい字正しいかなを書き入れて見た。一度なほされたら二度朱を引かれぬとの覺悟を持して下さい。

現れ（やはりあらはれとするを正しとす、あれは生れてす、あれますともみあれとも）あののき（をののき、戰慄）少女（をとめ、人の子）

郊外　駿河　田邊倉子



乙女（おとめ、天女）萎へ（なへ）捨て（棄て）ゑにし（えにし、緣）先ず（まづ）いずこ（いづこ）爲し（なし）絶へ（絶え）らうそく（らふそく）まばゆけり（映ゆかり）故（ゆゑ）あわれ（あはれ）繪（ゑ）潛める（ひそめる）柔ら（やはら）見へず（見えず）啄まぬ（ついばまぬ）征矢（征矢軍陣に用ゐる矢）下界（下とよむを正しとすべし）渡る（わたる）はは初にある時わと發音するとなし）激す孤（激する孤）銜え（くはへ）夜半（よはなるべし、別にやはんとは言へど）鈍探る（鈍を單ににと發音するやいかに。谷なた山をやとするとも許さるるにや）引き（引き）光（ひかり）仰ぎ（あふぎ）聲（こゑ、こえは肥なり）蝶（てふ）おどる（をどる、躍、踊）音（おと）夕（ゆふべ、ゆうべは、俗語昨夜）、起（おき）もみじ（もみぢ）さはおし（さわおし）ひへ（冷え）圃のほとほり（ほとりか、勝手に延べたりと見ゆ、）火桶（ひをけ）花辨（花瓣）小櫛（をぐし、おぐしは御髪）休らひ（やすらひてせう）捌さまし（揃ばまし）奇しく（くしく）はらぼい（はらばひ、匍匐）平和（やはらぎ）靜（しづ）濃き、濃き（濃き）彩羽（あやは）畫き（ゑがき）今日（けふ）遠近（をちこち）提灯（てうちん）淵（ふち）夕潮（ゆふじほ）蘆岡（あしま）しいたけ（しへたけ）

（以下次號）

新論文

編輯局選

△規定　論文と云へどむつかしき事に限らずやさしき議論を歡迎す、同じく二十四字詰三十行以内半紙又は原紙に認め一人一章限り、投書締切は毎月十五日、懸賞は甲種に據る。

三等

○平凡

京都市上京區室町通今出川上る籔きみ内　小笠原　あき子

字が下手なのを恥敷く思つて、楷書の御手本を稽古して居りましたら平凡だわと笑はれて、なぜ優美なのをお習いで無いの？と問はれました、何でも普通な在り來りの事だと、人樣は、平凡だとか、陳腐だとか云つて、奇拔な、六ケしい事を、お喜びに成る樣です、此樣な考が向上心だとか、進取だとか申すならば、進取向上程時に據ると、危險な、怖敷い物は無いと思います。進取、向上とは決して、其樣な物では御座いますまい。私は藝術の練習には、平凡と云ふ物は無いと考へます、弓の練習が未熟て、何して巧にバイオリンが奏せられましやうか？運筆、骨法を等閑にして立派な藝術を作らうと思ふのは無理じや御座いますまいか、歷史を見無いて今の世を論はふとするのは大膽てす、世に謠はれる傑作の裏には何位に練磨、研究、苦心が積まれたてせう！只、時流に從ひ、流行を眞似た、悧巧ぶる猿の戯のやうなものに、何の信仰がありますか、確信が有りますか、ア、、たゞ無意義！風が吹けば消えて了ふ樣な物てす、何と儚いぢや御座いますまいか。

砂の上に、立派な樓閣を築く事は出來ません、ローマの城は一日て建てられたのては御座いません、平凡な地均の仕事の中にこそ、雲に聳える大厦高樓の偉觀の芽が植えられるのでは御座いませんか、梯子の下階を飛び越えて、上に取り付く輕業師の樣な事は天才で無い限り出來るものぢや御座いません、古歌に『休みなく行けば千里のはても見ん牛の歩みのよし遲くとも』と御座います樣に、私は人樣の目には間慨敷いと見えましても、平凡だと笑はれましても、其平凡の中に深く秘せられた、寳を搜し乍ら、强固な永遠の地盤の上に確信と、信仰と、光明と、生命を作つて行きたいと思ひます。

平凡と言つた人は如何にも心得ちがひてす、何にても修養はあるのてす、天才だつて修養してえらくなる、但し修養と保守とは大いに違ふ、又修養と踏襲とは大いに違ふ、一方ては修養し、一方ては時代に後れないやうにして、自分の天分を見出すことに努めればならぬ。（評）

四等

○自清者

山形　幸女

獨り清うするのは、清の尤も小なるものである、自分だけ清ければ、人は如何でもよい、といふのは、吾人の與しないところである、自分が清いなら、他人をも其清い仲間に入れてやらうといふ心がなくってはいけない。

人類は互に相賴り相恃んで行くものである、寂然として孤栖することは、まづ六ヶ敷いものである、故に、自己といふ事を考ふると共に、必ず他人と云ふ事を考へる、美味なものを喰ふたり、絕佳な景色を見たりする時に、必ず他人と之を共にしたいと思ふ、自分が美味てある絕景てあると考へたなら、他人をも其仲間に入れて、同じく美味てある絕景てある、と云はしたくなる。

美味や絕景ばかりてない、主義主張の上からいふても同じてある、自己が『是』と信じたなら、他人をも之を信じさせよう、自己が『非』と思ふたら、他人にも同じく思はせようとするのは萬人皆然りてある、てあるからして、自己が清いと信じたなら、其通りに他人をも清くしたくなるべき筈てある、然るに、自分だけの清を守りさへすればよい、自分の清を他から汚さるるのは厭てある、などと一種の厭世的思想を起して、引込み思案をするのは、頗るケチな了見である、つまり自分だけしか守って行けない清さて、他人に及ばない、極めて小なるものである。

浮世を墓無んて、濁世なり煩腦界なりといひ、我を托する處てない、などと云つて、自殺するものがある之は、極小の清を抱いて居るものてある、跡を山林に托するとか、生を雲水に任すとかいつて、人生から隔離するものてある、彼等の清は、彼等一人の清てあつて、他人をも同化さするに足りるものてないのてある。

孔子や、釋迦や、基督は、さすがに大人物てある、彼等は、自己の胸中に大なる清をもつて居つて、之を萬人の胸底に及ぼさうとした、自分一人清いことばかりに滿足しないて、億萬の生靈をも、自己の清いと同じ樣にしやうとの大本願を起した、獨り自己が存在する時代ばかりでなく、未來永刼の衆生をして、一人も殘らず自己の如く清からしめんとした、實に大なるものてはないか。

吾人は、かの小規模の自清者が、大いに奮起せんことを望むのてある、屈原が自ら清うせん爲めに汨羅に沈んだのは、小てある、楠公が自ら清を明にせん爲めに、湊川に討死したのも、或は小てはあるまいか、何故に力戰苦鬪以て彼の濁者をして、自己の清と同じか

らしむる事を努めなかつたであらうか。
特に、徒に自分の清い事を標榜して、其極終に萬象を悲觀して、所謂厭世的の偏狹に陷るものは、よくこの間に猛省するところがなくてはならぬ。

所謂向上主義の福音、現代の思想に觸れたものであるが、只自ら清うすると云ふ事だけ言つたのでは物足らぬ。(評)

五等

○女性論

栃木縣下都賀郡水代村字西水代　山川哉子

世に女性ほど不思議なるものはあらじ、その愛憐の情に富み、同情の念深き處より之を觀れば、誠にこれ慈悲の權化、救世の大主たり、然も、その嫉妬に心を燃やし、虛榮に意を失ふの點より之を察すれば、實にこれ、惡魔の化身、罪惡の肉塊なり。この相矛盾せる二種の特性は、互に表裏をなし陰陽となりて、一個女性を形成す。されば『女は三界に家なし』と唄へるもあり『女は社會の花なり春なり』と歌へるもあり、或は『外面如菩薩、内心如夜叉』と說き『女子と小人とは養ひ難し』と嘆ず『女なくては夜明けぬ國』もあれば『牝鷄の時を告ぐるは國家滅亡の兆』と云へるもあり。

初對面の場合に於ける二人の女子は、同じ場合なる二人の男子よりも相互により多く胸中にて擾乱と猜疑とを以て相戰ふは事實なり。さりとて、又、弱者に同情を表し、薄命者に愛憐を垂れ、情愛の濃厚にして、蜜よりも甘く、人生に於ける一大復活劑を藏することも疑ふ可らざるなり。思ふて、茲に至れば、女性は到底不可解のものたるを免れざるなり。
『女性に心ゆるすな』と遺戒したる豐太公も賢なれば『この世に女子なかりせば、人生は如何に荒凉を極めむ』と歎ひたりし西人も亦明なからずやは。

慈悲と怨恨、愛憐と嫉妬、矛盾の間に調和して、一種弱き者を形成せるもの、吾人は之を呼んで『女性』と云ふ。

論文らしい書き方であるが、少し氣取らうとするからいけない(評)

秀逸

○農業之趣味

鳥取縣　盤指菊子

私は澤山の職業のうち有望にして且貴重なるは農業であらうと考へます、けれど現今の人々は農民を賤視する傾があります試みに學校兒童の目的を問へば徒らに官吏商人等を切望する者多くして農業を志す者殆んど皆無の割合てす、之れ其の敎鞭を取る人が農業の趣味を解せずして、農事に對する觀念が淺いからでせう若し農業がなかつたならば何の力によりて生活が出來ようか、如何程高位高官の人でも、農民の汗を絞つて得た賜物に依つて生存して居るてはありませんか、妾は

元より賤が伏屋に農を渡世とする少女でありますが、幾分か農業の趣味を味ひました、諸孃は宜しく之れを賤視する事なく閑暇を利用して農業の趣味を解せられん事を切望します。

見よ春のうらゝかなる日、櫻花の霞とまごうの時天と共に耕作に從事すれば雲雀は雲井に舞ひて吾等を慰むるではありませんか、其自然の景色の内に從事する吾等の幸福は到底高貴の家庭に暮さるゝ諸孃の味はれない深い自然なものです、心の底から純潔になる嗚呼妾は農業を措いてほかに樂しいものはあるまいと思ひます‥‥或は我田引水と笑はれるか知りませんが‥‥。

氣、激して思ふ事が充分に言へないだけれど、それが却つて此論旨にもかなひ我等も亦心の底から純潔な人の言葉を聞くやうて嬉しく讀んだ(評)



かまど　上總　なみ江

○裸體の美

香川縣　須田澄子

人は美を渇仰するもの也、美によつて生きんとする者也、是を婦人に見るも美人と言ひ男子に見るも美男と云ふ、社會改革の急先鋒は遂に美的生活論となり美的社會とならしめんとす、何ぞ吾人の思想の美的に進化する事や、變化する事や蓋し人の本性は「美」也、美をのぞいてもとむべからず。眞も善も是れ皆一種の美也、吾人の體中よりはた社會より美をのぞかんか？これ荒野のみ、荒蕪のみ、茫莫として趣味なく、快樂なく、生命なし、こゝに於てか吾人はこの美を發展せざるべからず、發揮せざるべからず、而して研めざるべからず、美を研むるは是れ美を知る所以也。然れども吾人がこの美をきはむる上に於て何等過てる無きか、吾人多くの塲合自個を僞る者也、飾る者也、吾人の胸中のサムシングは吾人をして僞らしめ飾らしめんとす、汚きはおほひ、悪きはかくし、足らざるは補ひ、以て完全なるものたらしめむとす、然れどもこれ果して完全なるものなりや、自個の本性を蹂躙し、奴隷視し、虚僞を以て、おほひ盡すものこれ果して完全なるものなりや、吾人は思ふ「非」と、然りあらざるなり、何となればこの美たるや虚僞なればなり、飾なればなり、虚僞を以てなるもの如何で美ならんや、レッシン

グ曰く『人もし眞に美ならば、その白粉をつけざる時に於て最美なり』と、然り、大に然り、白粉をつくるものは是飾る也、僞るなり、本性を傷くる也、野の花を見よ、何ぞ天眞爛漫なる、彼等は天が與へし美を發展しつゝあり、眞美なる也、自ら飾らざる也、されば人の美もこの裸體たるの時に於て最美也、自個を僞らざる時に於て最美也、ウォールスウォーズは自個の詩中に於て屢自然をうたひて嬰兒の如くなれと敎へたり、吾人はこの語に服す、吾人は嬰兒の如く天眞爛漫たらずんばあらず、彼等は笑ふべき時に笑ひ泣くべき時に泣く。何ぞ裸體にたるべきものあらずや夫れ裸體は遂に美の極也、詩人は歌ふべく學者はきはむべく而して妾等女藝術家はこれを發展するにつとめ以て繪筆を揮はざるべからず、吾人は言ふ『美は人の生命也然して裸躰の美はその極點也』と。

裸躰美を識る者は美を識るもの也(評)

◎情の人

群馬　森下うばら

◎季に春秋あり、日に晝夜あり、人にも亦自ら別なかるべからず、即ち二別あり、曰く意の人、情の人。

◎偉しと思ひ敬ふ人の、程經るにつれ平凡なる、面憎げなりしが、交りて意外に親切なる、倶に共に情の人也。終始一貫、渝るなきは意の人ならざれば能はず。

◎愛するは情の人、愛せらるゝも亦情の人なり。憎むは情の人、憎まるゝ亦然り。意の人は然らず、必ず常に他に恐れらる。

◎堅くて脆し、情の人之を例せば鋼鐵か。之を刀劍の類にすべくして、之を什器たらしむるに適せず。

◎華かにして哀也、情の人例へば黃葉樹の如し。目を眩するばかりなる滿山の紅葉、霜降り風到るや寸時も堪へず、惜まれて猶松柏の壽なし。

◎沿々三千歳の青史、之を飾るは即ち情の人。無言の山川に跡を殘して、天然の及ばざるを補ふは意の人。情の人に涙と血とあり、意の人は唯力のみ。

◎意の人はよく我を樂めども、情の人は他を樂み、苟も自ら安ぜず、必ず人と喜び、また人と悲む也。事なければ即ち、我と愁ひ、我と怒り我と戰ふ、故に情の人にして終を全ふせるはあらず。

◎情の人は時に筆をとりて詩文を草す、然れども每日の出納帳を有するなし。情の人は他をよく捨つ、然れども永久に捨て得ず。

好斷片(評)

和　歌

佐々木信綱先生選



▲規定　殊更に舊派と言はず、從來の如く清新の調を望む、原稿は半紙を用ゐ一人一首を限りとす、本名を記入すること、締切は毎月十五日、懸賞品は乙種の規定に據る。

二等

磐城國双葉郡久之濱町東町　遠藤貴佐子

雨あがり砂にこぼれし櫻貝
花とや咲かん磯日和かな

三等

攝津國三島郡高槻町　和久薫子

山の宿爐による旅の幾人が
運命語らふ吹雪の夜かな

四等

上總國山武郡千代田村大里　木内秀子

白藤に雨やはらかき朝の窓
手飼ひの鳩のまたよりて來る

秀逸

八女郡　秋津子

◯高き家に君と昇れば春の國河遠白し朝の鐘なる

磐城　鈴木勝子

◯律院の眞晝靜かに山茶花の花に來てなく名も知らぬ鳥

大分縣　後藤はま子

◯牛ひきて翁歸りぬ酒買ひて嫗歸りぬ桃咲ける宿

京都　薔薇子

◯牛引きて出づる童の宿ならん桃咲くあたり朝煙たつ

上總　鈴木梅子

◯春の夜の殘れる夢もにほふまであけぼの白き花のいろかな

三重縣　長井漣月子

◯海鳥は海のかなたに今沈む夕日の上をむれてとぶかな

橫濱　本郷磯子

◯力なき冬の日足はかたむきて夕野に寒き木枯ぞ吹く

上總　久我ちか子

◯何となく人なつかしき今宵かな花散るまどに月白くして

上總　大藤りやう

◯佐渡が島荒屋の內に稗のかゆめさせ給ひし昔かなしも

尾張　渡邊霞石子

◯別れたる旅の六部の影さびし鵙が音寒き山ぞひの道

本郷　朝井千とせ

◯さら〳〵とつま戶よる、呉竹の音しめやかに雪の夜更けぬ

秋田縣　三浦紅袖子

◯

風ぬるき柳の路に高麗人と驢馬とかすみぬ春の夕鐘

○　信濃　すみれ女

土ねりの人形干せる庭芝にちりこぼれたる白梅の花

○　美濃　西口孝子

もかりぶねふしおもしろき唄のせて葦間を出でぬをぼろけの月

○　千葉縣　木内秀子

櫻散る朱の欄人絶えて鐘の音低う春の日くれぬ

○　備中　若鮎女

暗黒の夜の森いでゝ明星を仰ぐ思ひす君見る時は

○　石川縣　木原蓮舟

松に吹く嵐もたえてかるの池雪ふるあさを鴨寒う鳴く

○　秋田縣　佐々木貞子

若き尼一人經よむ窓のもとに淋しく咲ける山茶花の花

○　伊豆　横山秀子

語り合ひて月にかへるもおも白し梅見にくれし春の山道

○　兵庫縣　那須菅子

名ばかりを苔にとどめて厚氷結ぶばかりにさゆるつきかな

○　石川縣　かしく

なく虫の聲もあはれにすみゆきてちゞの思ひに夜をぞふかしぬ

○　すみれ女

さえかへり鹽風さむし志賀の浦の三上の山の雪の夕暮れ

○　伊勢　守岡みどり子

はつ日の出見ろ子集ひてみやしろの松にしめ曳くたきはらの里

○　工藤さかえ

夜半たま〳〵夢のねざめもあたゝかき五年ぶりのちゝはゝの家

○　徳島縣　若畑淑子

都路に旅立ちまししゝ我友は今宵いづこに夢結ぶらん

○　大阪府　安部君子

神山の松にかすみの幕はりてよろづの神や遊びますらん

○　土佐　高橋白ばら

此方見てかげらふもゆる野の外にのがるるさまに去にし人かな

○　北多摩　小黒しゆん

富士の山あかねさしそうかげ見ればまず改まる我こゝろかな

○　京都　田中文月

枯枝に降りつもりたる雪落ちて空飛ぶ雀二ッ三ッ四ッ

○　讃岐　笑月

いと美しき夢にゑひけむ神の如けだかきおもはかたほ笑む稚兒

○　鳥取　山田萬壽子

ちゝの實の父のいましゝそのかみに忍ぶたもとに露おもるなり

○　土浦町　かすみ子

梅の花霧のかきれにさくみれば早となりまで春は來にけり

○　常陸　青木柳子

年久し故郷訪へば我叔父は待ちてありきよ病の床に

○　小石川　吉岡豊子

おく露にうつろひぬれど白菊のつきせぬ香こそいよゝたかけれ

○　伊勢　山路くに子

精くべて杣人が酒酌む雪の夜を破れ戸ほと〳〵叩く子狐

○　豊島郡　香保留

寂しき師の君思ふ夜もすがら心ありげに鳴く雁の聲

○　大阪　辰井はな子

檜扇に散る花拂ふはふり子がみ衣こゞしき祭かな

○　伊勢　佐々木らく子

うらぶれて歸りし我をほゝゑみて君はむかへぬ只ほゝゑみて

○　芝　入重子

汽車つきて羅布のおうなは菊持ちて孫の手ひきて霜の道來る　○　高松市　須田澄子

雛の日傘ほつれ毛細き京の妓がわかゆき形よ夜櫻の雨　○　南多摩　守澤みづほ

いたいけにくゝり小袖の紅見せて臘月日和に手毬つく子よ　○　山城泉　里

人とはゞ花は櫻木ますらをの散りてかぐわししきしまの道　○　四谷入　重子

更けて行くこよひも涙みに暮れはてゝ里方戀ひし小雨そぼふる　○　秋田縣　佐々木千代子

遊びに余も學びの業をなしとげぬ心やすかれふるさとの母　○　千葉縣　高城しげ子

冬の夜はしづかにくれて雪ふりぬ旋の風に落ち葉の廻はる　○　淺草　とみ子

散る梅をふりつむ雪と思ふまで暈きる月の面白きかな　○　長野縣　津金壽枝子

春雨のしづくきらめく梅が枝にしづかに宿る月かげ清し　○　茨城縣　藤田きく子

我が家にも春きにけらし亡き人の手植えの梅に鶯の鳴く　○　大和　栗山英子

淋しさに破琴抱きてよゝとなけばみ空の星の我招くらし　○　周防　熊野縫子

落葉の林にかなるよすがにと紅葉はさみぬ其古き詩に　○　明石　田中ますゑ

夕月　美濃　山田はぎ子



君まさぬさびしき宿をおとづれてかどの小草の囁きをきく　○　岡津女

けふも又入相きゝぬ冬の日をながしとかこついたつきの身に　○　麻布　西谷良智子

すてらるゝ身は何事も云はざれどなく音かなしのはま千鳥かな　○　秋田　紅涙女

河添の十戸の村は夕暮れて芦の茂みに白鷺おりぬ　○　佐賀　あやめ

夜中よりすさぶ野分のあとたへてしづ／＼積る今朝のしら雪　○　羽前　菅坂信子

さら／＼と水は流るゝ野の川に浮きて來りぬ紅葉一二葉　○　上總　木内きん子

春を誇る白梅匂ふ園の上に朝日を浴びて蝶のまひ來る　○　守口町　倉和子

神います東の森をながむれば老いたる松に月はかかりぬ　○　岡山縣　田鶴子

冬の日の寒さはいづこ我庭の雪のふる枝に鳥のなくなり　○　亀井戸　鵜澤良子

鶯のなく音をまねて樂の譜を作て見たり永き日なれば　○　大分縣　松木たみ子

あら玉の年をむかふるみやしろにいく千代かけしいにしへの松　○　栃木縣　宇賀婷香子

鷺の住む野茶屋を廻る里川の芒がくれに釣竿の見ゆ　○　越後　みつ子

風寒く鳥さへ啼かずちら／＼と雪ふり出ぬ睦月の朝

大分縣　菊月女

○千早振る神のやしろの老松に小鳥集ひて千代うたふなり
下総　加藤星月子

○久方の空にかゞやく星さへも名を知らるゝは少なかりけり
信濃　世良田優子

○繪筆置き夕雲を見てまたとりて晩れゆく秋を寫しとゞめぬ
遠江　増田せん子

○新玉の年立つ今朝のみたらしに鶴舞ふ松の影ぞ映れる
下総　平山きさ子

○漁火の消えてあとなき栗川の邊りに淋し野狐の鳴く
岡山縣　さくの

○天地の蒔繪いだきつのぼりくる朝日の面に春うつる哉
日本橋　ゆかり子

○梅はたゞ一輪笑みぬうぐひすは一聲歌ひぬ春たつけふを
名古屋　原田琴子

○くれ秋や小さううつきたる鐘の音もあえかの人に物思はせん
佐賀縣　伊藤さだ子

○何時のまに年は立ちけん今日ははや花はなけれど春心地すれ
舞鶴　愛菫子

○數ならぬ身を大君に捧げんと故郷を出づる今日の嬉しさ
山形縣　やまぶき子

○草もみなしもがれわたる庭の面にひとり匂へる白ぎくの花
備後　井上年子

○うすく濃く黄金とかせし夕空を飛び行く鳥は美しきかな
岡山　菅森しすい

○君に行く宵提灯の灯の影に虫したひとぶ野の小徑かな
新潟縣　森白鷗

○たそがれてひとりさ迷ふ路の邊のはにふの宿に紅葉ちり來る
千葉町　玉置直代

○ひさしうつ霰の音のをさまりて今宵冷たき水仙のはな
美濃　林こう

○行くさきはまだ程遠し燈火の消えてさびしき夜の獨り路
熊本市　靜岡富美

○風の日や白き兎と猫の子と庭に親しむ梅の花影
千葉縣　[illegible]子

○刈取りし小田に殘れる案山子にも時雨をさくる笠はありけり
名古屋　なでしこ

○梅が香をとめつうつしつ鶯の羽風靜けき庭の面かな
上総　木内秀子

○つかれてはしばしやすらふ岩角になぐさめ顔の白百合の花
豐後　加納豐子

○枯芦にうす雪のして江のほとり千鳥なく夜を歌がたりする
芝　拾小舟

○めさむれば芭蕉にそゝぐ雨細しをきて傘せん蝶のみ墓に
熊本縣　富野かず夫

○新玉の年たちかへるのどけさは神世も今日もかはらざらまし
日向　中島琴音

○もゆるごと山の紅葉の我が胸は吹く秋風に散りてさびしき
越前　永富こよれ

○白雲を分け入る如き心地せり櫻花咲く春の山路は
奈良縣　中富よしみ

○寒空を行く黒雲にこのおもひやらば何處に雪となるらむ
神戸市　高橋紫峰

○小鳥らの花野を歌ふ春にして我れに歡樂の琴歌ぞなき
京都府　入田文子

○琴の音や川の水さへ匂ひいて梅さく宿に休みゆく人
紀伊　野枝女

○この秋もまた旅にしてかざしけりかりれの宿の白菊のはな
伊勢　服部さゑ子

○月すごく風の寒さを詩人が今年をしみて泣く夜は明けぬ
千葉縣　錦織靜子

○やめる身の苦しきゆめゆ眼さむれば排君いまだ夜なべしませる

○

野に立てば亡き母に似し浮雲が尾花の末に下りけるかな　筑前　田中登代

○

凋み散る木の葉は肩にみだれくる星かげくらき森の道ゆき　周防　谷天籟女

○

點火の薄くまど照る山里のわら家の門に梅匂ふかな　韓國　伊勢川蓋女

○

古里の影だも見へぬ里に來て思へばこひし母君のもと　山口縣　泉月女

○

秋深きふる里小道たそがれてたゞずむ袖に散る紅葉かな　伊賀　伏見蔦子

○

野も山も紅の色ます昨日今日わけて戀しき故郷の空　大分縣　操子

○

梅が枝に雪降り積みて八重一重我家の軒に匂ひぬるかな　岡山縣　宇佐美文子

○

夕暮を八幡船の旗の下に座せる武夫煙管たかき　下野　野中とみ子

○

幼兒の去年の羽子板とり出して楓の指に春をまつかな　土佐　弘光芳樹

○

薄月夜人待つ門の糸柳を結びてはとき結びてはとく　伊賀　山村龍子

○

おぼろ月花散る夕の戸によりてちひさき妹と灯ともしてゐぬ　下野　鈴木雪子

○

初東風に今朝ほころびし白梅を示し顔にて鶯のなく　滋賀縣　島田かず子

○

逢ひ見てはつれなき君と恨みしをわかれてはたゞなつかしき君　大阪　木村春江

○

十六夜の月をあふげば胸せまり亡き母しのぶ夜半を鳥鳴く　近江　董月女

○

少女子がつく遺羽子の羽根それて蜜柑實る節になへもて行く　青森市　村林やす子

○

越後　早津女

小草ふく風も身に泌み何となく思ひみだるる日を秋と云ふ　京都市　山口京子

○

月青き湖上に舟を泛べては逝きて三年の友讃ふかな　奈良縣　中富よしみ

○

時雨るべきあやしの雲をせはしげに白帆はせ交ふ行く秋の海　佐渡　谷川桂月子

○

北の空夕霧ふかきかりがれの聞ゆる方は君が里ならん　美濃　落合かき

○

海と山千里の道をへだつれどへだてぬ仲の友ぞ戀しき　大分　平田小春子

○

思ふどち袂つられて春の野に行けば小蝶等うれしげに迎ふ　大隅　富來美婦子

○

もみぢばの赤き色こそ我民の君にさゝげし心とぞしる　陸奥　嫩子

○

二親のありし昔を忍ばれて今年も一人月に泣きけり　本所　秋山欣子

○

夕月は和げに照りぬ圓き丘の草の芽を食む小牛が背に　保田町　愛蓮女

○

面白き文の一節よみ終へし軒端に近く鶯の聲　本所　久子

○

白雲や帆の形して空をゆく夕は波のとほ音もきゝぬ　森下花子

○

近江路や女連れなる遍路が菅笠ならぶ春の風かな　島根　野の白百合

○

わきかへる胸の血汐を押へつゝ都の友の便りよむ身よ　美濃　傍島みゆき子

○

たまひたる指輪ゆるくもなりにけり憂き戀にこそ我身やせしか　播磨　田村孝蕊子

○

夕日さす紅葉がうつろ沼の面に涙もなくに亂れ舞ふ蝶　日本橋　坂里輪子

○

恐しき涙のあらびく心せよ雄こすわれの夫やいかにと

○ 熊本 秋月澄子

梅が香に漂ふ笛の妙の音を美しき人忍び聞くかな

○ 越後 河島和歌波

翅のべて春日峰とる寮の庭孔雀おもむろ花ふくみ來る

○ 下總 岩井白子

うち招く力もなげに枯尾花一むら殘る野べぞさびしき

○ 大阪 武田とし

暖たかき母のかひなに眠る兒よ乳房ふくみて何夢むらん

○ 伊豆 杉山すぎ子

新玉の年の初日のさしそえばときはの松も色なほまさる

○ 茨城縣 篠崎美代子

すむ月の光も添ひて面白し梅の盛りを誰に見せまし

○ 熊本縣 宮崎花女

樵夫すむ深山の奥のあばら屋も今朝初霜にまとう白衣

○ 岐阜 村上亘子

旅人の肩にみだれて散る花は眞白にかざる小さき戀かな

○ 丹波 小山龍子

里川に米とぐ賤の少女子が赤き手に似て散る紅葉かな

○ 丹後 鹽見千代子

故郷に友つれ歸へり火に倚りて母もろともに物語しぬ

○ 豊前 角銅雪枝

落ちし葉に風すさむ聲きゝて寂しうなりし時雨する夜よ

○ 北見 田初つゆ子

吾が窓にうつりし青葉鳥の影此頃見えずたゞ枯野して

○ 上總 關 芳枝

血を吐きて苦しむ妹が面見かれまどを開けば不如歸なく

○ 鳥取縣 盤指菊子

花もまた花あるなかにまた花の花またゆかし庭の白菊

○ 加賀 小島遊女

降り積る雪さへ匂ふ梅の宿鶯の聲聞くぞ嬉しき

○ 長崎市 平田すみれ

新年や村の少女は晴着して鎭守の宮に羽子つきあそぶ

○ 千葉縣 古山かれ子

若水を硯にうけて友とふたり歌かき居れば初日昇りぬ

○ 上毛 桃子

芙蓉花はしぼみて實はなりぬ逝く春たけき小羊のうた

○ 天雲

菜の花の黄ばみそめにし畑中に猫うまひして蝶は遊べり

○ 紀伊 塞谷忠子

秋の日の今沈むとて御社の杉の木長う影地におちぬ

○ 千葉縣 宇佐見歌子

母逝きし今かの樣に思ひてて夕くづれし芙蓉に泣きぬ

○ 石見 松浦信子

長き夜や亡き兄そゞろしのばれて御母と共に袖しぼりぬる

○ 茨城縣 かげつ女

道もなく石の地藏のありげにも光りにこむる寒の夜の雪

○ 上總 森ふみ子

えもゆはず靜に立てる君が面しばしてらしぬ秋の夜の月

○ 八王子 芳村秋水子

なつかしき君にわかれて野の小川わたりぬさむき二月にして

○ 京都市 大井俊子

天守閣仰ぎ見すれば黒雲のなかより浮ぶ金龍の如

○ 埼玉 ちか子

病みませる母を殘してみ軍に從ふ人の心如何にぞ

○ 備中 ふみ子

新玉の年を迎へて初春を祝ふ今日こそうれしかりけり

○ 伊豆 上原清子

はる〳〵と想の海の波路漕ぐ乘せゆく夢はいつがいつ迄

○ 伊豫 菊川とく子

水彩の繪にあるやうな賤が屋にまばらに積る今朝の初雪

○ 信濃 川上野江

花紅葉あだにすごしてゆめのさめ今となりてぞ我が身うらむる

○千代かけて濱の眞砂と諸共に社頭に匯る橋立の松　丹後　今西靜枝

○心なき靄行し影見えて庭の紅梅二つ三つちる　阿波　西野花夢

○さびれたる冬のまがきに咲きいでゝ霜をいたゞく白菊のはな　京橋　野田波津美

○新玉の年立ちかへる今日の日を君が八千代を祝ふ聲々　越後　金子たま

○五つたりの舞姬のせし小車に春雨けぶる京の朝かな　豐後　菅原よし子

○木の葉散る庭の芝生の霜の上にひかりさへ行く有明の月　常陸　鶴野井紅玉

○立田川清き流れの月影を千々に碎きし我のりし舟　山形縣　樋口かれ子

○おどごとにつゞみうちつゝあら玉のとし祝ひゆくまんざいのこゑ　神戸　輝山

○紅葉して奥のみ寺の鐘ならす身にしみ〲と秋風の吹く　大阪　日高豐子

○網を引く漁師が聲ぞ男ましく荒海の濱邊春風ぞ吹く　愛知縣　富美子

○草影に衣させてふ虫の音も今はたへつゝ木枯の吹く　赤坂　高木とめ子

○紅葉すは秋の女神が口紅のしろに召せよと待つ樣ぞする　濱田　小松原德子

○雨寒き山の古驛の安宿に旅の六部と語り明しぬ　木曾　かせき子

讀書　高松市　須田澄子



○明けの鐘愛の天國おとづれて我が初夢を覺しけるかな　廣島縣　靜丸折典

○霙降る枯葦原のなか道をわかれてかへる夕間暮かな　下總　川奈部ゑい子

○思はずもふりし小雨に宿りして親しくなりぬ園の白梅　香川縣　みれ子

○月の宮桂の枝に風ふきて花ふり降る春の雪かも　京都　あき子

○春神は東よりきて暖かく曉の風また靜かなり　周防　松代子

○朝ぼらけ霞たなびく山坂を白梅層にかへる少女子　羽後　菊池敏子

○つく〲と身のおこたりをくゆる夜のねざめの窓に飛ぶ螢哉　備前　いち子

○燈明の光しらみて佛壇の夕冷たき水仙の花　秋　波日出子

○大和路は太古に似たる霧たれてあした靜かに山鳩のなく　上總　渡邊汀子

○我宿の軒端にうたふ聲すなり綻び初めし梅の鶯　常陸　坂本みさを子

○いとやぎのまだめもはろの淺みどりゆかしくうつす里川の面　駒柴村　春野咲子

○紅葉散る夕淋しき山々を家路を辿る馬子のひな唄　水戸　實子

○咲く花の心なく散る朝のそのうた詠むひめの髮みだれたる　奈良縣　森本あさ子

○地震ひてみ空降りし星屑つ草に宿りて水仙と咲く　遠江　菊笠みつ子

○　羽後　菊池柳子
賤が女の泣く子守りて朧夜を土橋渡れば月面白き
○　若狹　山田紅葉
亡き友の何道の衢に迷ふらむ萬物蘇生る春日の頃を
○　豐後　福島静子
須磨の浦の松は夕日に輝きて淡路の島に時雨ふるらし
○　石見　旅子
古寺の高かきいらかはさびたれど松のみどりぞあらたなりける
○　羽後　さゆり
湯の宿やとなりし人の何となう戀しき夕をこ雨そぼふる
○　結城　齋藤もと子
埋火の下に母と娘とさしよりて昔語りに冬の夜更けぬ
○　岩代　耶麻萩子
常なくて常あるものは大空にてりつ曇りつみちかくる月
○　濱松　岸文子
衣つゞる手もたゆたひの坐ろ説我まつ君のありと思へば
○　下野　梅澤哲子
母君の玉章來ぬと旅の夢さめて冷き雁の音をきく
○　西多摩　森田きよ子
日は暮れて戸外に出る人もなき雪の夜あはれじゆんれいの聲
○　對馬　倉成弱生
小夜衣うちあかすなる心とも知らでや君は音づれもなし
○　若狹　津田汐汀
柿の實は夕映紅う五つ六つ小鳥なくなり丘の君が家
○　土佐　うめ子
雪降りて梅咲きそめぬ庭の竹色そふ松に時雨かゝりぬ
○　茨城縣　君子
うなゐらの麥笛吹きつ踊りくる小川の堤いと靑うなりぬ
○　和歌山縣　福本花月
畫筆もたゞ染めて見まほし五つ六つ靑田を走る紀の川白帆
○　加賀　林美惠子
あなうれし天のみ神のくちづけしあひの白菊今朝ぞ花咲く
○　佐賀縣　岡本そめ
遠目にはすぼめ傘して山の上に立つと思ひぬ一本杉を
○　伊豫　曉子
秋のかぜあしの末葉をそよがせてすみゆく川に水虫のまゝ
○　釧路　北川悦子
新玉の年立かへる今日の空いとも平和の春風ぞ吹く
○　大坂　登木子
時を得て照日にあふこそ嬉しけれ闇に匂へる心の花の
○　埼玉縣　關谷房子
山里の今宵や如何に寒からん殘れる雪に月影消き
○　本・所　三森ゆき
駒止めて手折りし梅のよき香にてわが歌なりぬ春の小窓に
○　山形縣　白花女史
遠江大河流るゝ音遠く富士赤らかに夜明けぬるかな
○　佐賀縣　西千代子
信濃路の尾花大原吹き分けて秋風谷のこだまに響く
○　廣島縣　小島武子
賤が家のかはり果てたる今朝の雪芙蓉の峯は如何あるらむ
○　柏崎町　町田竹野
まち居れど歸りきまさぬ姉君のかるたとるこゑする心地して
○　南多摩　寺澤みづほ
霜ばしらきらめく庭は數方の珠玉あつむと七彩のして
○　千葉縣　佐藤興志子
身にしみし月の光もあとゝめて鷄なく聲に夜は明けぬかな
○　三河　天野濟子
こくうすくあやになしたる紅葉を取りてかざさむ友の御髪に
○　京都市　島田千代
深みどり茂れる松の音澄みて梢づたひに響く御神樂
○　紀伊　杉若文子
落武者がよろひかけしといふ松の注連繩くちて幹枯れにけり

○　宮城縣　川口敏女
仇人の屍に得たるうつし繪のこのひとこよひ何夢むらん
○　京都　八重女
うじ神につまのやまひのおこたりを祈るも寒き松が枝の月
○　羽後　佐藤なつ子
窓よせて秋の調べの琴の音をもらすも淋し白萩の宿
○　仙臺　佐藤清子
栗負ひて市にいて行く我が背子が後ろ手寒し霜の朝道
○　新潟縣　和田直子
新玉の年立かへる山里も小松ならべて祝ふ聲哉
○　安藤みどり
立田山吹きおろしたる木枯しは我胸吹くよたへがたき泣
○　新潟縣　尾島隆子
ゆゑしらぬ涙おぼえぬさすらひのうきこの朝を鶯の音に
○　肥後　富丸敏子
もみぢ葉は風にあとなく散り果てゝ梢寒げに殘るはじの實
○　埼玉縣　中村靜子
白はとの今日もかへらでいたづらに籠の耕房の風にゆらめく
○　あざみ
朝まだき露けき野邊にぬかづきて天つ御神にこひかたりけり
○　越後　日下きよの子
蓮葉の枯れたるまゝに池の面は薄氷とぢて朝日さすなり
○　相摸　柏原美奈子
小枕の耕房ゆらぎて姫君の目覺め美し籠の鶯
○　徳島縣　藤野花子
燈火は消えなんとして風かこふうつくし人の眉頑げなる
○　肥後　撫子
螢もなほ暗きばかりの古社梅笑ひてぞ夜は明けかくる
○　相模　鍋田靜子
春立ちぬ梅の小枝に鶯の身なさかさまに初音もらしぬ
○　下谷　わかば

霜まよひきりたちこめしあかつきにかりの一つら鳴きわたりゆく
○　陸奥　三浦愛子
幾千代と數も知られず住吉の松のみどりの神さびにける
○　德島縣　吉田紫花
とにかくに世の春は君問ひますな露はへだてじ秋の醜草
○　京橋　三好まさる
しめやかに降る雨の夜に歌かたる人美しき河ぞひの家
○　岩代　根本喜代子
小夜更けて月冴え渡る我窓に寒さいやます谷川の音
○　下總　三橋千代子
海に空おなじ様にてつらなりて櫻井にまがう帥つゆく舟
○　越後　あかつき
侘居する旅なりさなり三百里捨てられ人の山家の小屋に
○　千葉縣　川島波津子
夕日あびて角吹く人も群畜もやせたり狹野は冬枯のして
○　和歌山　齋子
いさり火のかげは島わに消はてゝ波間ににほふ朝日かげかな
○　北海道　雪女
松風の音しづまりていや淋し初霜の夜に雁の聲きく
○　廣島縣　松田輝子
露姬の身にしむ秋の朝風になじかなくなり春日野の原
○　南品川　萬千田野里子
松山の山のかひより海見えて白帆きえゆく秋の夕ぐれ
○　千葉縣　吉原靜江
さを鹿の聲もはるかに聞え來て月影さびし山中の海
○　本郷　朝井松子
萬物のねむるが如き曉の靜寂を破る山寺の鐘
○　富山縣　仇野花子
あゝ戀しあゝなつかしの故里や父や呼ぶらん母やまつらん
○　伊豆　尾崎そひや
神さびし社の奥の老松のかはらぬ御代の日の本の春

短　文

編輯局選



▲規程　文章の種類は凡て自由なるべし、簡潔なる文字を採錄す、二十四字詰五行以内にして總て振假名附、半紙又は罫紙に認め一人一文を限りとする事、締切前同斷、懸賞乙種。

一等　○幸福

京橋區新佃島　澄子

何時も私がお母様に、一體此世で誰が一番幸福な人でせうと尋ねますと、いつもそれは御飯をお旨しくたべられる人が一番幸福だろうと仰いますけど、それが如何してもわからなかつたのですが、此頃漸く思當りました、然し其時私は決して幸福な者で御座いませんでした。

御飯もおいしくない　又曰く、意味深長

二等　○鶴の啼聲

岩代須賀川　松の根本

鶴の啼く聲は、鼓に鈴を交へた様だと、話にのみ聞いて斗り、國が岩代の悲しさ、未だ一度もきいた事がない、何日その床しい聲を聞く事が出來るだろう、と知らぬ聲を慕て居る。

千年に一聲

三等　○早起

濱松　岸　文子

私には姉妹三人ございますの、毎朝一等早く起た者には二錢のご褒美が出る事にしました、先達て勘定して見ましたら、姉様のが五十八錢で、私のが十二錢、妹のが二十六錢で、末の妹のが四錢ございました、最も末のはまだ四歳ですからオシッコに起きたのをおまけしましたのよ。

おしつこの四錢は大愛嬌

四等　○湖上

近江國滋賀郡眞野村　太田靜花

私は土曜日から日曜日にかけて郷里に歸るので、堅田から琵琶湖上を往復する汽船にのつて、鏡のような水の上をすべつて行くのです、いつも比良山を後に、比叡山を前に、左は三上山を目標にいたします、此三上山が斜後になつた時分には故郷の地が近くなつてゐます。

やよ波守、急ぎ候へ

五等

○我が家の祝暦

盛岡市志家三一　米澤白桃子

一月はお祖母樣が古稀のお祝、三月は私の女學校卒業四月は姉樣の御結婚、五月は武坊が袴着のお祝、七月は義姉樣から赤チャンが生れる月、十月は東京在學の兄樣が卒業して目出度御歸鄕の月、是は皆當四十一年に於ける我が家の祝暦なのでございます。

まだ一つ拔けては居ないでせうか

秀逸

○落葉かき

土佐　高橋白ばら

桑の肥料にとてひるさがりから雜木林でかき集めた柏やならの落葉…ふとこのかげに葉守の神樣がひそんで居られるのではと美しい神々しき感想が浮びました

神慮にかなふ

○お袴

鳥取縣　紫野菊子

母さんが能く仰しやつてゞありますお前は平身だから腰が太くつてお袴は大變能く似合ふが帶をしめたらだめだつて。だから私し大ていな外行にはお袴をはいて出ますのよ然し是から學校を終つてお袴と別れねばならぬ樣になつたらどうしようかしらと思ひますの。

お嫁になつてからも穿かれると好いですが……

○遊山講

下總　藤崎美奈子

妾の村では、月に一回、十六七の小娘から、三十近い女達が集まつて、晝食と夕食をするのです。其費用は白米五合に、金が四五錢位、これを遊山講と云ふのです。日々の勞苦をこれで慰められますので、これを樂しみにせつせと働きます、雜談が面白いので。

田舍の家族會、東京にも斯んな會をやりたいものです

○乳母が宿

本所　久子

軒に釣るした柿がフラリ〳〵と風に搖れて影のうつる戶袋に蜂がとまつた、暖い日を浴び乍ら竹椽に腰かけて居ると乾した繭から陽炎がたつ如に思はれて長閑にトンハタリ、トンハタリと梭の音が聞えてくる、そうして私は又一日八王子の乳母が宿に暮して了つた。

未だ乳臭し

○冬の朝

豐後　甲斐ふい子

碧空は瑠璃の樣。家根瓦にも物干竿にも、銀光の霜が澤山。今し綿帽子を冠つた祖嶽の嶺に、櫛形にのぞいた旭光が、枇杷の花咲く丸窓に機を織つてる姉樣の、橫顏に映つて美しい。花簪が梭の音する度に優しうゆらぐ。井戶側に水仙の花眞白う、鶺鴒が啼いて居る。

よき朝

○九十九里濱　下總　越川つね子

妾の家からは九十九里濱迄一里です、裏の山に登ると能く海が見えます、東の方に煉瓦造りの家の樣に見えるは飯岡の赤ボッケと云ふのです、遥か其の向ふの海の中に薄黒く、水平線上よりチョボリと見えるは銚子の犬吠岬の燈臺です、夜などは却々美麗です、今日此頃の長閑なる梅日和には白帆が澤山海に見えます。

叙景の筆暢達す

○勉強　府下　琴子女

私も月日を重ねて勵げますなら、何つかに、掲載さるゝこともあろうかしら、毎日お母さんの傍に寄つて、嬢さん方の文章を、繰り返し、繰り返し讀んで、聞かしてあげますと、お前も皆さんの樣におなりと、そのお言葉がなにより嬉れしくあります。

眞の愛讀者

○收穫　三河　寒菊子

兄樣と次の兄樣が歌ひ乍らの唐臼挽姉樣と妾とが挽たお米を唐箕であほる。あほつたお米は母樣がとほして撰分られる。夫を一方から父樣が量て俵になさるのです。かうして私達は毎日埃になるのも疲るのも忘て働てゐますのよ。やがて家の庭に俵の山が築かれるのを樂しみに

一幅農家の圖

○雨後の朝　千葉縣　峰島百合

霧は絶ず動いてゐる、細かい冷たい水氣が室へ吹き込て時計の硝子が曇つた。朝日は松林を離れて室へ輝込み、雫がぼたりと落ると障子へゆら〱と映る。降勝の雨で庭の千草が皆五分位づゝのびて居る、鷄が其れを啄むたびに水晶の樣な玉がこぼれる。

清爽

○雪　大分縣　平田小春子

私は十五ですが覺えて、風の吹きよせをのけて、外、平地に雪の五寸も積つたのを見た事がありません。だから雪が軒端に、つく等と越後あたりの話を聞くと、うその樣であります。

九州に梅咲く頃、北越の雪、汽車を埋む

○夜學　相模　鍋田靜子

毎晩村の小學生徒が十名計り私の家へ寄り集つて、算術や讀本や書方などの勉强をします。御影で去年は十名の内、八名學校で賞與を受けました。今年は幾人賞與を受けるでしよう。此十名は皆今競爭です。

此村の教育振ふ

○裾模樣 安藝 手島まさ子

紫色の菫はさめやすい、薔薇の花はハイカラていゝが愛嬌がない、矢張日本は櫻が好と昔堅氣の母樣が十六の歳、買つて下さつた散櫻に胡蝶模樣の振袖、五年立つた今日はいやと思つた此の裾模樣が當世流行の好物となつた。

胡蝶の時代　淨るり 京都 宮原みどり

○誕生日 羽前 信子

私の誕生日は明治廿年十一月八日です夫て毎年十一月八日にはお友達をお招ぎして心許り祝ふのですが今年は親いお友達の外誌友の姉さんが惠んで下さつたお寫眞や繪端書を立派に床に飾り姉さん方のお長命を祈り共に私の式も例年より一層賑やかてあつた。

成程好いおもひつき

○波の音 遠江 新井せき子

私の地方ては波の音が遠州の七不思議の一つとしてありました、波の音を西て聞く時は天氣て、東て聞く時は雨天だと云つて居ります、是れは全く事實です。

四の方に聞える時は…晴、東の方に聞える時は…雨、と云ふのではありませんか、それなら此文章の書き方が足りません



○村の名物 福岡縣 村雨

井戸一つといへば私しの村の名物、村の出來た以來一度も不足した事なく今なほ五十家の者が朝夕吸んでも少しもへりません、水は美しく味もよいてすが不思議な事には、神無月の頃だけ水が紅葉色となり不足するのです。

井戸の神も出雲に歸るか

○聖山峠 信濃 犀波子

追剝が居て旅人を泣せた名高い聖山峠漸く此頃拂下に成て、昔からの大木が伐り盡されました、それて其大木を伐る仕懸と云ふのは、實に田舍には珍らしい蒸汽機械て、何百人と云ふ職工が、山にとまつてゐるので、毎日遠くから學校の生徒や村の人達が見に行ます。

お木魚も機械

○船津間　飛驒　あやめ子

東から北へかけて廿五山、西は大洞山と神成山、南は観音山、とかう山て圍んだ千戸足らずの小さき町、恰も度播鉢の底のようてす、最も近い處で、汽車が十四里、海が十六里行かなければ、見られません。

日本アルプス高原

○正月　大阪　生田さくら

一昨年の新年は父と妹と私と三人目出度迎へました。昨年は妹が死んでから丁度十五日目。父と悲しくお正月を過しました。そして今年はしらぬ他國て、郷の父を思ひ乍ら淋しく松の內をすごしたのてした。

来年はめでたく

○霰景色　麻布　細谷茂子

灰色に氷て居るお庭は一面の霰で虫の巣食葉や青苔の蒸た岩等には丁度眞珠ても轉ばした樣に閃々と輝て居ます、泉流れて露清き曠野に日毎咲出たるマナの朝景色は如何に高雅て御座ましたてせう、私は何時も霰の光に大昔が忍ばれて西の空懐しく御業を讃美致して居ます

詮の眞髄を發見したるは大功なるべし

○諸學者の風采　備後　中山八千代

同じ學者の中にも理學者は世事に踈くボーッとした處があり、倫理學者は君子然として、天文學者は仙人風て、音樂家は氣取つて、外國語學者はハイカラて、そして我が文學者は、泰然として紳士風て高尚て品格が高い。

ありがたう

○冬の窓　愛知　紫雲女

東の戸を開くれば軟い朝日がキラ〳〵と流れ込む、通り行く馬の鼻から白いイキが一尺程てる、南の障子を開ければポルが日當のよい莚の上に暖かさうに居眠して居る、北の窓開けば耳を切り鼻をもぎとる樣な風が飛込て來る遙か向ふの御嶽白山が眞白になつて居る。

三尺の窓も眼を放てば六合に彌る

○落葉　丹後　鹽見千代子

今朝程、私が掃き寄せて置きました、山程の落葉て、お風呂を沸かさうと思つて、晝飯後中庭に出て見ますと、一葉も殘つてゐなかつた、後に聞けば弟が寒いからと云つて、皆燃やしてしまつたのださうてす。

一片の烟

○思ひ違ひ　府下　森田志満子

私の家は素より植木屋渡世て御座いますが、何故か私

は是を嫉つて居りましたが、或る日りつぱなお嬢樣がお出に成り女中の袖を引いて「竹や此樣な宅に住んで見たいねえ」と仰やつた、是を聞いて私は此渡世をはげむ心になりました故、兩親の笑顏を多く見る樣になりました。

住めばお嬢樣だつて嫉ひになるてせう

○肩あげ　羽後　さゆり子

毎年春着を新調する度毎に肩上が少くなる、昨年迄はそれでも五分もあつたのが、今年は只もうみえばつかりに三分程一寸つまんで甃ぎました、來年はいよいよ取らなきやならない、そして肩幅が廣くなるのかと思ふと何だか急に大人になつた樣で心細くつて仕方がありません。

何が心細いのてす

○毎朝　東京　河野槇

私は毎朝、四谷から新見付内の學校まで外濠に沿ふて歩いて行きますが、いつも市谷監獄からくる盜賊馬車にあひます、ひげの生えた人や、やせた人や、靑白い顏が窓の簾を透いて見える、其の度に私の希望にみちた胸に、何とも云へない苦しさを覺えます。

見ない方がようこさんす

○島畠　羽後　姫島さち子

小春日和の麗らかな日を、久々振りに舘岡へ登つて、稻積の方を瞻めますと、マア見るから淸々しい、段々に積上げられた島畑に初々しい多望の色して、麥の芽生があつさりと薄緣りを刷ひて居るのです、其美しいこと、恰度若苔の一面に生えた石階を望むやうな心地がして‥‥。

うまく形容してある

○女夫鐘　本所　秋山欣子

男鐘は盜まれて霞浦の三ツ股沖に沈み、女鐘は私の故郷なる國分寺に獨りわびしく泣いて居るのです、雨そぼふる宵、舟で沖を通る旅人は、女鐘と別れて蛇に成つたといふ男鐘が、毒藻がひしと生ひて黒ずんだ水底でかすかに鳴るのを聞くてせう

ロマンチツク

○針仕事　栃木縣　鈴木まさ

家は仕立屋なのです、世の諺に毎月一日に、くけ臺の針刺を取り替へると、仕事が澤山あると云ふので、母は白、姉はあさぎ、私は赤と云ふ樣に取り替へます、そして其日には赤飯をたいて祝ふのです、幸に仕事が

澤山あつて毎日親子揃つて縫つて居ります。

今にシンガーミシンを買入れるやうになる

○ハンカチーフ　信濃　山田くに子

賞品に頂た菫色の美しい薄絹、晴衣を着た時用はふと、大切にしまつて置きましたが、はからず祖母樣の御葬式、悲しい涙をふく事と成りました。

事實ださうです

○寫生畫　鳥取市　上山千重子

村長とこの次郎樣がお出しなさつた、寫生畫とやらが大評判と、梅さまのお話につい誘されて、村の展覽會に參りました、數知らぬ美しい絵や書の前を過ぎて、人のイみし金縁の大額を仰ぐと、山田のをしね刈る娘姿、オヤ私とお對の衣つけて。

物言ふ絵、物言はぬ絵と相向ふ

○祖母と盗人　高知　みえ

或る時に祖母が留守居をしてゐましたら夜遲くなつてからタマが俄になきだしましたとネ、しかし別に怪しみもせず寢んでゐますと程なく戸をゴト〳〵動かしだしましたとネ、そこで祖母は斷りなしに入られては困りますといひますと、盗人はそのまゝ歸りましたとさ。

すなほな盗人さんです

○人と花　本所　三森ゆき

父樣は櫻の花、母樣はあやめ、兄さんは梅の花、姉さんは薔薇の花、妾はすみれ、下女は姫百合、それで父樣は軍人、母さまは籬子であつたの、兄さんは文科大學生、姉さんは女子大學生、妾は女學校の三年生、下女は下女よ。

○早起　上總　小笠女

けさはいつにない早起、衣服をきる時六時がなつた、外へ出て見ると、當暦、二十九日の月は、細くそらむきになつて松の下枝にかゝり、晨星はまばらにちら〳〵してゐました、冷い水て顔をあらひ、すぐさま鳴和池畔を散歩して、歸つてきたら、一番汽車の汽笛が聞へました。

○紀念の葡萄　徳島縣　かへで

去年の春私が女學校に入學の當日、御父さんが紀念の爲に植ゑて下さつた庭の葡萄は、もう數尺の高さに成長しました。私は大層此葡萄を可愛がつて、暇な時には色々世話をして早く大きくなるのを樂んて居るのです。幾年の後にはおいしい實を結ぶ樣になるてせう。

○冬ごもり　上總　關芳枝

霜がま白に降り掛つて居た、板を何心なく除つたら、四匹の小蛙が居て、人間なら「おゝ寒いなぜとるのだ」と云うだらうに、身うごきもせないて、眼ばかりパチ〳〵させてたから、又もとのやうにして置いた。誰ても行つて、ふまなければいゝが……。

○鶯　沼津　八代美代子

太陽を一面受けた南のお座敷て母樣に裁縫の算物して賦て居ると祖母樣も入つてお出てる、すると庭て鶯が頻に鳴く、マアいゝ木と母樣と私は耳を立てゝ聞いて居るのに祖母樣ばかりは澄まして椭等賞めて居り升、嘘如何してお聞せ致さう庭へ出れば必と鶯は飛ぶだろう。

○鷄　上總　森婦美子

夕方お米をとぎに行きますと、おとなりの鷄が大急ぎてかけてきますそしてこぼれたお米をひろつて喰べます、私が水をくむ間に其中て一番小

きいめん鳥は桶の中へ口ばしを入れて一生懸命で喰べて居ります私がこゑをかけますとおどろいてにげて行きます。

○二つの詩星

遠江　増田仙女

黄金や水晶のみ玉を飛沫くなる銀河原の詩の宮居から、一夜何の途端か二つの星が流れた、斯くて聲たる吾が文壇を甦るべく天使、晶子と栁踏子は生れたと云ふ、姉君は花園の艶麗なる白芙蓉、妹君は溪泉の優奘なる紅百合、されば何れも聖けきみ國の花なれ。

○さまりわるかつた事

石川縣　可祝

在學中の受持先生今は某男爵家の家庭敎師となつて居らつしやいますが私の當家に引越す數日前途中にて先生にあひましたのするを大きな聲であんた御嫁に行くのださうてすれおめてたうておつしやるの。

○私

伊勢　佐々木らく子

私は田舍の百姓の娘で、理想とやらホームとやらが何の事か一寸も知りませんよ。只私は、毎日夫と共に働き、一人の子を育てゝ、そして亡き御兩親の御墓を大切に守つてゐますのてす。

○樂しみ

若狹　山田鐵葉

私の里は山奥で村は僅か五戸。家では父母がほんの宅で食べるだけのお米を作つて居られる。私の仕事に鷄を七羽飼うて居ますの、それが卵を產む頃まで養うのが將來の樂しみ。亦毎月の三日には必ず妾の無二の友の女子文壇が着きますので、それが目前の快樂。

○親切な人

下總　加藤星月子

私が先日東京へ參りまして電車に乘りました。所が四十許の男が乘つて腰を掛けて居まして最早七十の坂を越へたかと思ふ老人の乘るのを見て男は立つて老人に腰を掛けさせました私は之れを見て親切な人だと思ひました。

つみ草　大坂市　今西こゆき



○秋蝶

備後　井上年子

むらくと淡い陽炎さへ立つて、秋晴れの暖い日でした。私が梔子で染めた黃糸の干してある邊を、何所から來たのか、瘦た蝶々が五六羽懷しさうに、舞ふては止り止つては飛んで居りました。あゝ此黃糸に花時代の梔子のやうな、甘い露があるでせうか。

○街の朝

大阪　武田とし

瀨戸內海で、冷え切つた風が、御堂の巨きな銀杏に當つて、怪しう吽る、夜泣きうどん屋が、障子の破れた火の氣のない、屋臺車を曳いて鈴も鳴さず行く、炭屋の橫町から鉠け德利片手に走り出た法被男が、猥狽て酒屋に入ると、オゝ寒、と云ふ聲がする、潮風は心わるい酒の香りを送つた。

○當地方

愛知　撫子

西か東か知らないけど、東京と云ふ處は大な奇麗な處ださうて高等官とかの方がはく程有るつて聞きましたが當地方而も私の田舍てはどちら向てもお百姓樣と職人官ばつかりて其の奥樣は皆井戸端會の名譽議員一番流行する職業が燒芋屋。

○冬の田家

豐後　加納豐子

晩稻も刈り上げ麥も蒔いた、甘藷の收穫も昨日でお終ひ。これからは毎夜毎夜更くるまで家內睦じく團欒して椎をかみながら爺婆の昔噺しに、籾すりの音ゴーロゴロ。かくて平和な冬のうちに、長閑な春を待つのてある。

○慰藉者

岐阜　愁の人

自分の室にそなへてある此の小さなオルガン！之れが自分の唯一の慰藉

者なのである愁も悲みも苦みも皆其の音と共に消えてそうして限りなき喜びが何處からともなく來るのであるさて其れは何處より來て何處へ消えて行くのであらう。

◎郵便　　大阪府　寺部君子

花子様へ手紙を出してから最早十日何の御返事も無い女子文壇今日は二日であるのに未だ來ない少し勝れぬので臥つて居る妾は淋氣て仕様が無い折柄郵便が參りましたとて女子文壇妹から女學世界花子様からお寫眞に御手紙文枝様から美くしい繪端書。

◎三叉沖　　常陸　永井誠

霞ヶ浦は日本第二の湖水です霞ヶ浦には三叉沖と云ふのがあつて其處は土浦と高濱とより流れ込む所で始終渦を卷いて居るそうですこゝには昔盗人が或る寺より盗んで來た鐘が沈んで居つて時々宇宙懸しゴーンと云つて舟を覆すそうですこわいのネ。

◎地震　　千葉縣　智恵子

ギチン、ガタン、アラ地震々々大地震だ、棚の皿が落ちてわれた、家が潰れる危い驅出せとは母の御聲、どうせ死ぬなら疊の上てと平氣な祖父を無理に引出すは父上、障子動かないと騷ぎ廻つた私、此處よと呼ぶ祖母に從ひて出れば遠近騷然、漸く靜まり皆無事之て先づ安心と胸なて下した時は午後四時頃

◎北の空　　たつ子

私は北海道に十三年居た、恰ど今頃、君ちやんと堅雪を踏んで、裏の谷間へ猫柳を採りに行つた、眞白な花の咲いた樹間を縫ふて歸りかけると、大陽はずつと高く上つてはや雪が解けかゝつてゐたので、ずぶりと足が雪中に落ち込て、猫柳も何も投つて仕舞つて跣組て家へ歸つたことがあつた。

◎冬の朝　　岡山縣　菅森しすい

閉めきつた室の障子に日が一ぱいにあたつて、軒に釣るしてある柿の影お、黑く上からさがつてゐる。やがて虻が來た。とまつた。障子越しに鋏の尖で一寸つくと、虻さん驚いたらしい、ぶーんと影が消える。庭には、山茶花の花がほろほろと零れてゐる。

◎裁縫ためし　　佐賀　あやめ

私の簞笥に二三の少さな桐箱に眞綿にて包み裁縫指環がはいつてゐます此は今より三年前十五才の時志た事て一年中使た物を大事にしまひ置き毎年くぼみの多少を見て仕事の勤惰をためすのです終に一年て貫く事が出來たなら皆出して御祝ひをする積りです。

◎秋晴の樂　　茨城縣　木村啓子

妾の家は村端末の小さい藁屋ですれば、皆様がご覽になつたら、嘸お笑ひ嘲をなさるでせう、だがねえ南と西は雜木林、日傾きて山里が金色に包まれたとき妾は小手を翳して枯野に眼を轉じて遠く不二山を眺るのが是上もない樂として居ます。

◎信州の冬　　信濃　川上靜江

信濃の冬は實に寒い昔から詩や歌にある種々なる形容詞は信州の冬一手て占領して居る眺見る滿山白雪を頂き淺間おろしは身を切らるゝやう遠寺の鐘はしみ渡るやうな音色されどかゝる冬に育ちし健兒はやがて社會の風雨ものかは大いに活動するのである。

◎私の友だち　　下谷　わかば

美和子さんは大佐夫人にやさしい保子さんは大學の家政科ひさ子さんは御菓子屋に交際家の道子さんは英佛和女學校とも子さんは御足の悪い方て刺繡と裁縫ゆき子さんは郵便局にとく子さんは日本銀行そして私は最高の美術をおさめやうとて忍ぶが岡の學校に參ります。

◎ひなの劇場　　富山縣　有磯の千鳥

小屋同然な劇場大工もやとはて劇場主たる人一人にてからくも拵て柱をさゝへ、入口の戸も破れて見苦しく、それに周圍の板も逃ひ〳〵ですから、旅人がいつも笑ひなさるのです、殘月淡き時役わりの紙風に動き、老人は又も素人大工な初め其夜拍子木の音して芝居が初まるのよ。

俳句

内藤鳴雪先生選



▲規定　先人を模倣せざる獨創の佳句を望む用紙は半紙を用ゐ、一人一句以上の投吟を許さず、締切は毎月十五日とす、懸賞は乙種の規定に據る

二等

春を病む人つれ〴〵のうたひ哉　大阪東區松屋町石町西南角今西竹田堂内　今西こゆき

三等

姉妹籠りて笑ふ冬の窓　越前國南條郡河野村今泉中谷九右衛門方　文子

四等

よき人のよき衣摺れや風光る　橫須賀楠ケ浦二百十四番地　齋藤松代子

秀逸

棟たかき寺もありけり秋の町　千葉縣　松ケ枝浪江

金屏に目のちらつくや屠蘇の醉　遠江　增田せん子

洋燈さげて隣へ通ふ落葉かな　備中　菅森しすい

丸窓に女の影や梅日和　相摸　柏原美奈子

草高き士人の家や靑嵐　越後　早津貢子

朝寒むや窓一ぱいに富士の山　小蝶子

さゝやかな女机やふく蕗草　東京　とき千

檣下に乞食火をたく吹雪かな　京都　かすみ

初霜に肥料荷ひ行く農夫かな　熊本　石寺とりゑ

鏡見る心も春の少女かな　兵庫縣　那須菅子

人集ふ焚き火怪しき枯野かな　大和　我澤素枝

春水や御所を繞りて黄昏るゝ　茨城縣　ふみ子

遣羽子の羽を落ちし蜜柑哉　伊勢　守岡みどり子

寒梅の宿のまたきや薺打つ　水戸市　勝子

迷ひ入る谷間に梅の香かな　大分縣　野田なるみ

時雨する野中の道や旅の僧　池田　寺部君子

森越して水田に照るや冬の月　岡山縣　才野きく代

月まちて思ひ〳〵のたき火かな　土佐　高橋白ばら

山中や雪に落ち行く武者一騎　石川縣　木原蓮舟

笹鳴や垣穗に寄せし戸張絹　伊豫　良子

秋風がふいていぶれるかまどかな　伊豫　服部とめ子

星一つ燈火一つ枯野哉　常陸　中内泉子

硝子戸の外に梅見るさぶさかな　京都　田中文月

枯枝や夕日に光る蜘蛛の糸　きよ子

綾巻の音の細さよ冬の月　千葉縣　一拍子

枯野原霜軍刀に滿る哉　播磨　田村孝壽子

星のとぶあとやとぎれて雁一群　日本橋　里輪子

苔深き先祖の墓に詣りけり　下總　萩原はな

朧夜や近くて遠き京の町　越後　河島和歌波

蛇は穴に入りけり草の夕嵐　下總　岩井白子

流星は消えてあとなし天の川　近江　蓮月女

蕭風や花も咲いたる草の原　新潟縣　青木菴女

菊に曳く蝶の杖や老將軍　京都　山口愛華

柴の戸に木枯うなる山の宿　奈良縣　中富よしみ

星消えて雪の車轍の光りけり　靑森　村林やす子

正月の庭に飛び入るボールかな　大分縣　平田小春子

木兎のとぼけ顏なり夕霞　熊本市　靜間富美

白菊の花に重たし今朝の霜　山崎よし
老杉の梢を洩れぬ冬の月　常陸　平澤やよひ子
山茶花にてゝら干したる山家哉　下總　花岡雪子
小春日にとなりの人の唱歌かな　芝　捨子
煙り見えて紅葉の中や鉄の音　大和　久保榮子
暁急に梅に人なし月かなろ　京都府　八田文子
人もなく織田城頭の秋の風　岐阜市　鎌田とみ子
辻君やなれて千鳥と物がたり　紀伊　前田みさを
雪の原鹿の足跡何處までも　滋賀縣　島田かず
さゝ啼や老人も行く畑仕事　紀伊　野枝女
ちるものは皆ちりはてゝ梢かな　三重縣　服部小枝子
子狐の御堂のぞくや百日紅　筑前　田中とよ
鐘をつゝ人となりけり暮の秋　周防　谷天酷女
寒月や地に雪を負ふ竹の影　山口縣　泉月女
摺んでゝ左右の杉や冬の月　伊賀　伏見蔦子
暮をしむ空のあなたや歸る雁　下野　野中とみ子
栗落ちて谷はたえけり瀧の音　土佐　弘光芳樹
髪結ふて砧ふき合す餘寒かな　伊賀　山村すみれ
すげ笠に匂ふて散るや桃の花　長岡市　土田りた子
千字文習ふ日課の夜長哉　備中　大西好子
佛彫る堅の手止めつ鹿の聲　備後　井上年子
山見れば書く事多き日記かな　千葉縣　竹澤ちか
森くろく風まばらなり霜の朝　新潟縣　森白鷗
梅の木にめじろさへづる日和哉　青森縣　松尾俊子
百疊の間にさし込むや夏の月　北上畔　小蝶子
月影を浴びて柿もぐ男かな　秋田縣　紅光涙
さむそらに鴨の水くむ月夜から　峯子
明月や我が盃に一つ浮く　羽前　信子
畑から抱てもどる西瓜哉　岡山縣　桐木梅子
齒ぎをへて楽湯寒しや白牡丹　龜井戸　瀧澤森鄰子
おぼろ月蝶の飛びかふ小舟哉　上總　木内きん子

春の人年賀に雪の渡し哉　越後　みつ子
病む人の端居して居る月夜かな　大分縣　菊月女
ばつさりと無花果落ちぬ今朝の霜　信濃　世良田傚子
朝寒や小走りに行く人の影　下總　平山きさ子
鶏旦や船頭が家の古給卷　常陸　木村宿雨子
虫啼かず限なき月の夜寒し　廣島　田村ふみ
入千草のしぼむや霜のうらめしく　大分縣　飯田鄰瀬子
寒月や梢に光る鳥の糞　三重縣　畔月女
箱庭の池溢れけり春の雨　鳥取　上山千重子
夕鐘や音なく落つる梅の花　千葉町　玉置直代
雪笠をさして出にけり今朝の雨　北越　白浜
萬歳やひとりは若き女にて　山梨縣　渡井藤枝
孫抱て瞬歩きや松の内　茨城縣　青木柳子
寒月に奈良の佛の肌寒し　伊勢　佐々木らく子
夕月や梅咲く門の女文字　香川縣　須田澄子
あらなみに見へつかくれつとぶ千鳥　山口縣　貴船艶子
大空に雁のなく音や嵯峨のみち　京都市　波多野かつら
初雪に隣の犬も走り來る　羽前　清水孝子
朝寒のもやより出たる白帆かな　四谷　八重子
土手の木や女摘み居る烏瓜　秋田縣　佐々木園子
掛筒の椿落ちけり猫の上　大和　栗山英子
淋しさや秋の木の葉に夕しぐれ　周防　愛讃女
野の人や夕榮かなる秋の水　周防　熊野麟子
花を出てゝ松の林や雨の音　土佐　藤本しげい子
南朝の落武者に會ふ精火哉　高岡市　北本歌子
葱刈れば鎌に音する霜夜かな　奈良縣　森本あさ子
菅絃は大臣が館や花八ツ手　信濃　深水女
月が瀬の梅見戻りや二日月　羽後　菊池柳子
初霜や枯れたる菊の鉢三つ　高岡市　葉山靜枝
門の木に繋げる馬あり春の草　千葉縣　越川つれ子
こがらしに畑の菊を抜き捨つる　千葉縣　今井しげ子

おかつきに霜降ろらしき寒さかな
望月や柚の香高き小庭かな
薬局の瓶に灯うつる夜長かな
おとゞひとうばとものすや菊節句
鳥さしの頭に散るや梅の花
垣の根の小菊もかれぬ今朝の冬
備前 いち子

訪はざりし故郷の墓やからす瓜
入王寺 井澤菊江子

明星を拜みて庭の寒稽古
佐賀縣 岡本 そめ

化物の住むてふ森の螢かな
本所 三森 ふぢ

かへり花小さき蝶のとまりけり
山形縣 白花女

おぼろ月化物出づる祠かな
長野縣 宮坂すみれ

山麓を繞り行くなり春の水
佐賀縣 四千代子

澁柿の一つとなりし隣家哉
山梨縣 塩田美津子

枯木立川一筋の月寒し
豐前 角銅 露枝

木立出て五重の塔や冬の月
京雛の小き行燈や宵の春
霽晴れて山の端に見ゆる月朧ろ
犬吠えて月の入りけり露佛
廣き野の草むら毎に虫のこゑ
梅提げて歸る主や梅の宿
夜は寒し森の彼方に月の出づ

伊豆 上原露子
結城町 齋藤もと子
豐後 甲斐ふい子
淡路 小山田徽子
府下 森田しま子
伊豫 曉子
やぶ入



廣島市 雲 英子
長崎市 永井きさ子
新潟縣 尾島歴子
熊本縣 宿野笑惠子
德島縣 藤野花子
肥後 梅子

梅さくや頻りに動く旅心
空晴れて門松高き眺めかな
月の戸や雁の影落つ手水鉢
よき人の水汲む朝や梅の宿
鶯や長者に啞の娘あり
元日や大古に似たる山の家
三重縣 加藤つたへ

相模 鎌田靜子
相模 目代奈加子
青森縣 三浦あや子
本所 三ツ森ゆき
常陸 はま子
下總 夢豬女
金澤市 顯越蘭子

筆凍る夜の灯や我が日記
神田 三浦秋野

ものおもふ肩に散り來る木の葉かな
京橋 三好まさる

氷山の漂ふ海や月あかり
岩代 根本富代子

雪の日の谷間馳せ行く騎者
新潟縣 榎並操子

病葉の風無きに散る霜の朝
越後 村山君子

柩送る行列長き枯野かな
千葉縣 川島初子

灰汁桶や松葉こぼれて初氷
上總 あい子

春寒き木の下道や鹿の糞
羽後 大沢つる子

狐塚灯ともる頃や一人旅
信濃 金子三好

亡き人の遺書繰返し冬籠
石狩 鈴澤濱子

蝦夷は野に雪の花散る今朝の春
山形縣 峰谷花子

花の色は移りにけるか初鏡
神田 鶴岡とく子

春風に生れて蝶の美しき
伊豆 尾崎そひや

香に知るやあつたら梅の藪の奥
千葉縣 佐藤よし子

枯菊の垣に人立つ夜寒かな

實用文

谷江風光先生選



▲規定　所謂日用の往復文にして、手紙文又はハガキ文の實用を主としたる文字を歡迎す、二十四字詰十五行以內用紙も締切日も前同斷、懸賞は甲種規定に據る。

二等　○遠き友へ

遠江　菊笠光子

こまく〜との御手紙誠に有難うございました、美くしい詩趣に富んだ山川御道筋の有樣が眼の前に見えるやうてありました、御望みにより今度は妾の里の御話を致しませう。

まだ鐵道の開けぬ以前、東海道の五十三次と云へば御承知の通り有名なものでございました、妾の里は其の五十三次の一つなる菊川の宿でございます、けれ共今は最早狹い谷間の寂しい里となつてしまつて旅宿一軒ございません、しかしその谷奥に咲く幾十本の梅は每年時を忘れず春の便りを齎らし鶯は未だ初鳴の節さへ調はないのが却つて面白うございます、其の花の雫が凝り集まつて谿川となり菊川と名がついて美くしく澄み切つて水晶の連珠を流したやうな水が、石に小さく激しては泡立ち、叢の奧に聞ゆるかとばかり優しい美妙な樂を奏でつゝ南へ南へと急いでゆくのであります太平記に俊基朝臣が「古しへもかゝるためしをきく川の同じ流れに身をや沈めん」と詠じたそれでありなす。扨て貴孃は汽車を堀之內驛で下りたならば、其の場末の汚ぐるしい煤け障子に一膳めしと書いた家から、空馬曳いた馬子の出るのを見付けて、それに跟いてお進み遊ばせ――得意な追分節を聞きながら――小川を渡り小さな隧道を拔けて廣い廣い田の中の道を眞直に突當つた所で馬子と別れて暫らく步むと、頭の欠けた石地藏が芒になぶられて居ます、貴孃は其處から右に折れて桑畑の間をお進み遊ばせ、最早其れからは數丁で廣い並木街道です、やがて小夜の中山に登つたなら下り坂の半ば大きい榎の下に立つて山下を御覽遊ばせ、赤い襷の水汲み娘、點在する茅屋根、之等が妾の里の風光であります、そして白梅のかをる小路を分けて紅椿ほろ〳〵散る戶を叩いて御覽遊ばせ、大きい聲で本を讀むのは妾の弟ですよ、その傍で機を織るのが――いゝえ〳〵妾はその前既に小夜の中山夜泣石の邊りに貴孃を擁するでありませう。

實は其樣な事を書いても、西海の波東山の雲、萬里相距る貴孃と妾と何時手をたづさへて話されませうか、汽車でこそ通へ京の夢大坂の夢、行いて行いて千鳥と一

所に關門海峡を渡つて、そしてどなければ行かれません、せめて貴孃、御寫眞でも頂きとうございます。さよなら今日はこれで。

（評）凡手にあらず叙状といひ記述といひ整然として其の序を亂さず而かも言ふべからざる情趣に富むたゞ男らしきが難なり、其に今少し女らしきところ見えなばと思はれつ。

三等

○紅葉狩より歸りて

しら浪

今日の日和を幸よしと、敬子つれて、紅葉狩にとうかれ出て申候。

嶮しき山又のぼりつくして、白根の絶頂に立ちたる時の嬉しさ、眺むれば、山又山の綾錦、濃き薄きとり交へたる中に、松の二本の緑いやまされるやうに生ひ出でし、又一入の眺めにて候らひき、そが西に伸びたる枝の下は漫々たる大わだつ海、折から白帆のたゞ一ついそぎゆく様、粟生島はたゞ中に浮び出て、佐渡が島遠くおぼろに靄かれしやう、かへり見すれば、山つゞきつゞきのあなた、月山の峯らしう既に白雪のつもれるなど、絶好の眺望には候はずや。

危きも厭はず折りとりし紅葉、多くは、先生先生と集ひくる子等に分ち與へ候へども、色濃き枝の三つ四つは家土産に持ち歸りて候、床の間にも机上にも室のあちこち燃ゆらんやうなるあざやかさ、獨其中に座して、微笑の禁じがたく候よ、人は狂へりとも見候はんが、詩の友のそゞろに愛らしう候、さりながら、二日三日このまゝ置かば散るは必然、今の間にこそ候へ、御歌箋携へまして、早うこの紅葉の庵へ入らせ給へ、お湯もわき候柿も採りて候、一時も早う入らせたまへ、かしこ。

（評）その紅葉狩の樂しかりしがさぞと思ひやられて面白く、のびのびとせる筆に自ら餘裕あるが嬉し。

四等

○故郷なる親に

宮城縣　川口敏子

寒さやう／＼相增候折柄如何御暮し遊ばされ候や伺ひ上候扨私事も此の程はやうやう家の事にもなれ候上夫をはじめ舅御樣も誠に親切に御指圖下され候へばきき及び候嫁の勉の辛さも知らず暮し居り候弟にて候兄の何かと惡戯に困りいり候へ共心は親御樣に似て誠におとなしう候へば少しも意地惡き事なく家内打よりて面白う暮し居り候夫も朝はとくより夜は晩く迄商賣に勵みをり候へば親御樣方も殊の外御機嫌よく先日も母樣より其方の心掛よき儘にて等樣々御褒め下され候事有之私等の力の如何で及ぶ事なるべきと存じ候へ共偏人樣よりかく思はれ候も實に稚きよりの御教訓故と今

更身にしみて有難く他所ながら御あたりの空拜し上げ候其に付ても今更仰せにもとり候樣なれど御あたりのみ懷しく如何なれば甲斐なくも女の身に生れ年長けさせられし御兩親樣を雲井のよそに思ひ置き御介抱をも申し上げ難き事ならんと悲しさに堪えず候何卒御身御大切になし下され度其の中よき人を御見立遊ばされ貞雄殿の御嫁に御迎へ遊ばされ少しも早う御心を安められ候樣願ひ上げ候來春に入り候はゞ夫も私同道御伺ひ申し上ぐべくと申し居り候へば遠からず御目にもかからるべくと樂しみ居り候早々。

（評）母ならぬ餘人が讀みてだに心地船し、まして其の人ならんにはいかゞならまし、文章も暢びやかにて遮り氣のなく佳作といふべし。

五等

○航海中の有樣を友の許に

大連市　よね子

出帆の際は御多忙にもかゝはらず、埠頭まで御見送り下され、いつもながらの御親切幾重にも御禮申上げ候。同日は、たゞ〳〵御國の遠ざかり行くが悲しく、綠濃やかなる山々は、刻々藍色に變じ行き、いつしか薄墨色と相成り、果てはいづこともなく消え失せて、たゞ目に入るものは水と空のみ、あゝこの時の妾が心、誠に夢の如き感に打たれ候、思へば君と絶えがたなの思ひして、かたみに御機嫌ようとハンケチふりしは、實に今し方なるに、もはや陸も見えず、人も見えず、呼べど叫べど答ふるものはたゞ浪の音のみ、あゝ昨日の今頃は二人手を取りて、磯邊の根上り松に腰打ち掛け、はるか北の方水や空なるあたり眺めつゝ、斷腸の思ひいたしゝ頃に候を、君は故郷に、妾は玄海の浪上に、實に人の運命のはかりがたきをかこち申候、幸に玄海も荒れ申さず、無事すぎ行き申候。

翌日はます〳〵浪穩かに、鏡の如き海の面に、大島小島散布して、面白き松の危く立ちすくみたる樣、繪の如く、朝鮮人二人、怪しき舟に乘りて、何かしきりに釣いたし居り候ひぬ、此所は濟州島附近に候よし、此夜板上にて月見いたし候、晝とは變りて何となう物凄き夕、暗々たる空に星二つ三つ怪しき光放ち居候折から、雲を破り檣上高く澄み渡りたる月影、海面を照して、さながら白晝の如く、浪を切つて進み行く船の姿浪上に長く影をうつし候、あゝこの時實に、御兄上樣の尺八一曲聞かまほしく候ひしよ、かくて十一時頃部屋にかへり、しばしまどろみ候ひしに、海上俄に荒れ來りて、怒濤逆卷き、船の動搖はげしく、高く空中に押上げられては、又忽ち奈落の底に沈むかとばかり、目暈ひ、胸惡しくて、その苦しさいはん方なく、夜明けてもやみ申さず、終日苦しき〳〵目に逢ひ候、夕方

になりて少し凪ぎ候折から、人々の大連に着きぬと語り合ひ候まゝ、重き頭をさゝへつゝ甲板に上りしに、果して市は目前に見え候、電燈の赫々たる光、濛々と昇る煙筒の煙、遠く轟々と響く汽車の音など、思ひしに勝る繁榮の様、羽根あらば飛んで上りたく候ひしも、其夜はゆるされず、翌朝十時頃上陸いたし候。海路先づかくの如くに候、兎に角始めての航海に候まま、萬事珍らしく、そは〳〵いたして、皆様に笑はれ申候ひき、市中の様は、又いづれ後便にゆづり申候。

御母　　新潟縣　和田直子

（評）記述の順序誠によく、徒に冗雑に流れず、げに要領を得たる文といふべし。

秀逸

○料理に添へて

しら萩

祖母様、今日はめづらしきもの御おくり申上げ候、そは外ならぬ私が手製の料理に御座候、兼てより何がなつくりて差上げばやと存じ居り候處幸ひ今日は日曜にて殊に豊子様も入らせられ候まゝ昨日習ひし料理の實習かたがた祖母君にも吾等が手並を御目にかけばやとの相談まとまり候てすぐさま例の白きものなどかけ甲斐々々しう臺所の人と相成り候、かくて數時間の後やう〳〵出來上り候はこの品に御座候、少しく柔かきは御許したまはり度こは決して我等の罪には候はず、祖母君が御齒に合せばやとの心づくしに御座候を、かくまでに氣の働く料理人は我等のほかには中々に御座なく候。さはれ兼々「女にして料理の道にくらきは己れ一人の不幸ならで引ては家庭のためにも大なる不幸なれば常常心がけよ」との御言の葉かくはまもりてしつらへたるものに御座候まゝ何卒御味ひ下され度、何れ次の日曜日には二人にて參上いたすべく候まゝ其折こそは色色の御批評御きかせ下され度願ひ上げ候、まづは何れ御目もじの上に申上ぐべく候、時候がら御風など召したまはぬ様祈り上げ候かしこ。

（評）おとなしき中になかしみある雅のあや見手ならざるべし。



○在院の兄様へ

岡山縣　内田しげる

此頃は餘程寒くなりました、兄様御容躰は如何ですか、お伺ひ申します、宅はお父様もお母様も私も皆な健やかで無事に暮して居ます、此頃宅は秋の牛で大そう忙はしくて猫の手も借りたい程ですが今日僕を雇入ましたて大勢で働いて居ますから大丈夫です、何分に寒い時

分の事ですから十分に御注意なされ宅の事はお氣に掛けずに氣長く思つて御養生なさいませ、私は毎日兄樣の病氣が早く全快するようにと神に祈つて居ます、さよなら。

（評）幼き心に切なる情あり、文の平明なるがよし。

〇入營中の兄へ（繪はがきにて）

群馬縣　森田とし子

イ　便

兄樣これは今度開通したる東武鐵道の開通式の景にて候、當日は母と春ちやんと三人にて妾も參り候、式場は舊城跡にて隨分廣き三之丸も狹い程に感ぜられ、館林始まつて以來の振ぎやひてしたと老人の話にて候、とにかく當片田舍も朝夕汽笛を聞く樣に相成り候が何より嬉しく候。

ロ　便

春ちやんも今年は六歳にて來年は學校へ行かれるとて喜び居り候。
妾は毎日春ちやんと家事を手傳ひ、時々イロハなどを習はせ居り候まゝ御安心下され度く候。

ハ　便

これは館林の停車場の景にて候。
昨年兄樣が御出發の時には工事中にて候ひしが漸く去る八月開通して、只今ては御地東京へは三時間にて行かれ申候、昨日の御手紙によれば來月は除隊に相成り候由、老母へ御話し申候處非常の喜びにて、停車場が近くなりましたからわたしも其時は迎へに行きましやうなどゝ申され候。
實に待ち遠うにて候。

（評）取り出づべきふしはなけれど平明なるが中に情こもれり。

〇友　に

茨城縣　齋藤すみ子

あなたは何時に御着きになりました。妾は二時に着きました、歸てからは、寒さも一層烈しくなつた樣ですね。毎朝々々妾が家の前の畑などは霜柱で雪の樣ですよ、家へ歸たなら廣々しい野原や田圃などでも歩たなら愉快でせうなどゝ言ひましたが、どうして、中々歩く處てはありませんね。
妾が歸りまして直ぐ、翌日、里ちやんの處から休暇で來たなら遊びに御出てとの御使が來たものですから行きましたら、里ちやんは、もう赤ちやんが出來ましたよ。だが、まだ、あの學校へ通た時分の風は拔けませんよ。あまり話しが面白いので午前一ぱい遊んで來ました。
妾の家では貴孃の御好きな栗と柿を澤山貯藏て置きましたから御遊びに御出て下さい。

（評）前半まことによし、されど後半は物足らず。

〇晩餐會を開くとて

備後　井上年子

今日私が晩餐の支度をしたのです。かねて學校で習つた腕で美事仕上たと思つて居るのに、惡口屋の兄さんは見ない内からさんぐ〵けなすのです、お父樣はまあ見てからとのお言葉、お母樣は屹度宜かろうと私の御ひいきなんです、ですから未だ開かずにしまつてあるのです、そこでかねて斯道には御鍛錬の貴孃樣をお招き申して御批評をお頼みしては何うでせうとは、優しい妹が言葉なんです。宜い所へ氣が付いたと一同賛成致ましたやうな次第ですから、お忙しいでせうが何うぞ、只今直ぐと御來車下さいまして、不味い晩餐の支度に御批評の程御願ひ申ます。

（評）おもしろし。

○同行の約束を取消す

長野市　すゝき

百合子樣！まあ何と御わび致したらいゝでせう、だつてあれ程迄堅く御約束したんですもの今更破るなんて……………。

私も今朝起るまでどの位ゐ樂しんで居たか知れませんの、そうしたら先程東京から電報が參りまして、叔母が危篤との事で、すぐ母が二番で參りました。で私は御留守居番をいたす事になりましたの、私の心中も御察し下さいましな。おみやげ待つて居りますよオホヽヽヽヽ何うぞ露子樣と靜子樣にもよろしく御傳へ下さひまし。

（評）親しき情見えてよし、されど手紙の文は自ら多少の禮あらんを要す、親しき中へなりともその心して欲しとぞ思ふ。

○土產物に添へて

初霜

東山のみどりがもと去り難く鴨川の淸き流なつかしさに數日がほどと訪ひ候を、一旬あまりとゞまり申候、御ともぐ〵幼き頃親に連れられて遊びありき候ひし淸水よ南禪寺さては永觀堂智恩院など目あたらしうなつかしう思ひ出つきがたうてものいはぬ山に語り水に答へを促がし候もおかしや、さてつきがたき名殘も遂に昨夜歸京致し候、とくぐ〵參上致しよろづ申しあげたく候も今日一日はとにかく引きこもり候まゝとりあへず御しるしばかり玉おしろい、小町紅御氣にめすまじけれど半襟と名につき候ばかりを御めにかけ候はるばる京都より上りきて私よりさきに御目にかゝり候此品品の幸をおもひたまうて御笑納下され度、まづは何事も御めもじの上に、かしこ。

（評）行筆流るゝが如し。

○口繪原色版の說明

本號口繪の原色版は、、セ、イ、ミレー氏の筆でエベリーンテナント孃が庭園を逍遙しながら花を摘んでゐる處です、孃は後にフレデリック、ダブリウ、エッチ、マイヤー夫人となりました、此繪は英國初代の優雅な畫風に似て、何處か人を惑動させる處が有ます

新歌謠

編輯局選

▲規定　無邪氣にして野卑ならず、現在の言葉を以て優美の思想を手近にうたふべきこと、是も一人一首限り、投書に新歌謠と明記せよ、用紙及び締切日等は前同斷、懸賞は乙種送呈



二等

○山が紅ふなりや雁歸る妾もいにたや海こえて

長崎市廣馬場町二ノ十七懽藤光造方　夕　雲

生氣全幅、迭語飽くを知らず。

三等

○昔めいたる花がさかむり花の路行く村祭り

若狹　早　水　そ　の

天さかる鄙のうた。

四等

○北海道では梅桃櫻みんないつしよに花が咲く

札幌區北一條東四丁目札幌麥酒會社々宅服部方　宮　増　喜　良　久　女

自然の技巧。

五等

○手紙やるなら墨こく太く朧月夜にわかる樣に

相模國高座郡大和村下鶴間　鍋　田　美　代　子

有心無心。

秀逸

○麥を刈る頃早苗が育ち稻を刈る頃麥伸びる

山形縣　杉　葉　女

○男鹿啼きやるな山守與作妻に死なれて寐て居るに

木　曾　か　せ　き　子

○歌は袂に千程あれど聲が惡くて歌はれぬ

茨城縣　須　崎　せ　い　子

○お繪は蕉園お筆は鶯堂花は遠州茶は千家

北海道　寒　國　女

○かゞる手毬は赤糸黄糸どれに少女は染まるやら

秋　波　日　出　子

○私や下野下駄屋の娘はやり〳〵の緒をすげる

下　野　花　香

○わしが里には楓はないが蔦がそめますお城山

栗　の　花

○私一ばん樂しい事はこたつて雜誌を見るのてす

柏崎町　町　田　竹　野

○涙つきぬは憂き世のならひ何うせなくなら戀に泣け

富山縣　仇　野　花　子

○雪は降る〳〵一丈餘り隣通ひも旅仕度

越　後　日　下　き　よ　の

○娘ざかりのわたしが縫へば針の縫目も笑ひます

和歌山　森

○月が出た出た船上山にわしの心は雲のうち
大阪　生田さくら

○山に登れば古郷が見える飛んで行きたや羽ほしや
長崎市　子鴉

○肥後の阿蘇山煙が二本日和南に雨は北
肥後　富丸敏子

○チラリ〳〵とふりくる雪は絹のちぎれか紙きれか
千葉縣　高城しげ子

○妾のお祖父は八十八よそれに毎日米を搗く
石狩　横尾浜子

○家連み機織る西陣チヘコ虫もまれすろ秋の夜は
チヘコは織工の總稱なり
京都　島田千代

○そんなお話もう厭なのよ止して頂戴けふ限り
筑前　深町よし子

○あたい十六學校通ひ笑ひなさるな我が身體
茨城　永井誠子

○信濃じや正月花嫁樣は馬でお里へゆきまする
長野縣　おくに

○汽車が出來たら澤山送ろ若狹名物ぶりに鯛
若狹　梅露

○田舍いやだと都へ來ればいやな田舍が又戀し
越後　山口しげ子

○朝日さし込む妾の室で白い息吹く人見える
下野　瓦井政子

○妹稻よす妾がこげば兄は馬ひき運びする
佐賀縣　樋口御幸子

○菊とばらとを一つ所に生けりやばらは拗んで背を向ける
神奈川　木村はる

○明日は妾が一番早う起きて汲みましよ若水を
三ツ森ゆき

○姉は月が瀬妹は吉野二人が唄ふ手毬歌
大坂市　大村はな子

○降れよ大雪大雪降れよ大雪降ろ年稲豐か
長崎市　山口峰子

○汽車の窓から筑波が見へる常陸戀しや乳母の里
名古屋　渡邊緣法師

○わたしなりたや谷間の百合に心はゆかしく美しく
宮城縣　千葉よし子

○富士のお山にかさとる時はさなぎ山から雨がたつ
靜岡縣　青木靜山

○花見月見は御供をします私しや越後で雪はいや
越後　藤村三枝

○廿世紀でも女は女男子らしいのが何よかろ
沼津　笑村

○友の皆んなは洋行したが私しや日本をめぐりたい
長野縣　内山けさよ

○私しや蝦夷の國松前そだち追分節より外知らぬ
北海道　ふみ子

○私は行きたいあの星のくに親も妹もあれに居る
遠江　ぼたん女

○試驗出來して免狀をもろて明日は學課の習ひ始め
秋田縣　佐々木貞子

○朝戸あければ小千谷の町も見事咲いたよ雪の花
越後　瀧澤親都子

○むこの燈は大津か膳所か湖の薄月雪となる
大阪府　辰井はな子

○筆も及ばぬ自然の巧み虹がかこんだ山と川
伊豆　堀井りゑ子

○遠州御前と石廊の崎で波も靜かにするが灣
京都市　波多野かつら

○櫻千本瀧をめぐりめぐり一里の花の雲
熊本市　靜間富榮

滑稽談

編輯局選



▲規定　實際にありし滑稽談もよし、所謂一口噺もよし、摸倣や有りふれた作は採らず、二十一字詰五行以内、半紙又は郵紙に認め一人一章に限る、締切日は毎月十五日懸賞は乙種。

二等

○高盛　　羽後　さゆり子

私の土地では結婚式の時にはお高盛と云つて大きい茶碗に山の様に高く御飯を盛り上げて花嫁と花婿の前とに出すのですそれは只形式で飾つて置くのださうですのに姉様は何も知らずに其山盛を漸々の思で半分丈食べ「もうとても食べられません」とホロリと涙を落したさうですそれがあまり可笑しかつたと云ふので今でも兄様からからかはれてます。

三等

○いたみ入る　　濱松　岸　次子

あや「アラマア、お久しぶりで！」私昔は隨分生意氣なスタイルしましたつけね……」

みよ「併し貴女ちつとも御變りなくつて結構ですわ」

四等

○人込み　　滋賀縣　婦貴子

娘「お母さん行つてきますよ」

母「縁日は大そう人が込むのにお前一人では危いから松と二人がお行き」

娘「妾一人でもいゝわお母さん松まで行つたら又一人だけ人が込むでせう」

五等

○もらひもの　　大分縣大分郡日岡村三三四　平田つみ子

爺さん孫に向ひ「坊やお前學校に行て甲をもらふか、乙をもらふか、それとも丙をもらふか。」

坊「私はお菓子と砂糖をもらふ。」

○流行好　　北海道　秋雲女

小間物屋「此おかんざしなら二年は受合ます」流行好の女學生「アラそんなものはいらないよ半月か一ケ月でこわれる様なのをお見せな」

○おまけ　　芝　ひさし

始めて電車に乘つた人が乘換切符を不審さうにながめて連の者に「これや何かね」連の者「ナニそれやおまけさ」

○剽窃文　　神奈川　木村はる

甲女得意げに「妾今度之を文章世界に投書仕様と思ふの」乙女「ドレ一寸拜見……アラ女子文壇に此の文が有つてよ」甲女「オヤじやもう之を剽窃したんですれ。」

○月の大きさ　　土佐　門田菊意

妹「姉さん月の大きさはわかりましよ」姉「どれ位あるか」妹「一寸あまりです」姉「どうしてわかつたのだれ」妹「手洗鉢にうつつてゐるのを測すの軸ではかつたのです」

○此年の歳　　宇都宮　石原とみ子

貴女は何歳にお成りですと問はれた娘、無言て右の手の指を五本、左の手て二本出して十七と云ふ意味なりしに、問へる人、則々と思ひ、「ハー二十七ですか」と。（實話）

○病氣　　宮城縣　楓子

夫「お前の病氣は醫師も神經病だと云ふだらう」妻「エヽそうでは有りませんヒステリーとか云ふのださうです多分外國からでもうつゝたのでせう。」



道行く人

前がき

道行く人と云ふ題で諸孃に道行く人の事を作つて頂いた處、非常に澤山原稿が參りまして、恐らく日本橋の上を通る人の數より多からうと思ひます、それで本號にも一等より五等まで秀逸佳作數十篇載せましたけれど、なほ次號の定期增刊『春日影』にも讃岐、香川政子さん以下入賞當選者及び秀逸佳作數十篇を揭載しますから、本號に載らなかつた諸孃はお待ち下さい、皆さんも面白いのが澤山ありますから讀むのをお待ち下さい(選者)

一等　○海國の女

越前丹生郡吉野村氷坂　永宮こよね

妾の家のすぐ南の方は、四ヶ浦から武生へ通ずる街道ですから、朝の六時頃になりますと、ポテと申しまして、十五六から四十位迄の女が、さつくりと云ふ、粗末な麻でこしらへた紺の衣服に、白い手拭をさげて、脚袢をはき、バチ笠と云ふ(少し大きな雨が降りても呉座を着ませぬ)のを被ぶつて、七八貫目程有るのでせふ魚を荷負ふて、四五十人も連れ立ちて走る有樣といつたら、それはそれは美事なものです。そして朝早くからこうして働く姿を見るものですから、ひとり仕事にせいを出す樣になります。

事の奇なるは勿論、文章も上手です(評)

●賞品圖書切符金壹圓

二等　○人の步み

鹿兒島　芳子

一時間に一里半步けたらいゝと思ひつゝ私は大急ぎです。あれ向ふから郵便配達夫がかけて來ます、此人は二里半もゆきましよう。扨六十位のお婆樣が三つ子の手を引いてかれ行るのを追越しました。之では半里もむづかしい。暫く行くと年頃廿二三と思しき令孃二人、絹のお召に重草履をバタリ〳〵と、此足なら半里、七合とは步けまいと、此樣に並べてみると成程人の境遇は步方に迄及ぼすものだと氣がつきました。してみると私はやはり急ぐべく生れついて居るのです。

此れは事の奇なるでなく、考へが奇なるのです(評)

●賞品圖書切符金七十錢

三等　○逢ふ人

芝區櫻田本鄕町電燈社宅今川内　ひさし

私が山手の學校へ通ひ始めて、もふ二年に成りますが、每日黑の服を着た女の西洋人に逢ます、始めの中は別に氣にも止なかつたが、約束した樣に同じ場所で、每朝顏合せるものですから、何だか極が惡くなつて、

知ず〳〵目禮を致合ふ樣になり、亦逢ふ場所の遠近て、ア丶今朝は早やかつたとか、少し遲かつたとかを察しるのです。

事も奇てなく、考へも奇てなく、それても眞面目に作つてある文章は人を動かします(評)

賞品圖書切符金五十錢

四等　○うたの巷

芝區三田四國町二ノ十三號池田方　捨小舟

私が夜のお仕事に掛りますと浪花節をはじめ、どゝ一流行ぶしなどを歌ひながら通りますのは工場返りの職工らしく、すると可愛らしい聲でお寺のやねから飛んで來たなんて坊ちやんが歌つてゆかれます、向ひの竹さんのお湯返りでしよ、今頃は半七さん何處にどうして、まあ太ひ聲の義太夫、だん〳〵ふけては夜學返りの書生さんでしよ、毋に賜ひし小袖をばなど丶餘音永くびわ歌です、ああどこまでも詩人國では御座ひますまいか、そして横町あたりから、チチリンチ丶ンテッと美しい糸の新内流しが通りますと、私も休むならひです。

能く注意しました(評)

賞品圖書切符金三十錢

五等　○二人連れ

羽後横手富士見町鈴木和吉方　大坂つる子

男は二十四五、女は廿歲前後、男は銘仙の羽織に東郷形とやらの帽子、半ズボンに靴、女は瓦斯縞の羽織に繻子の帶、友仙の蹴出しに玉虫甲斐絹の脚袢と云ふ出て立ち。男は二升入の酒樽を持つて嬉しそうに何やら話し乍ら行きますが、女は耻しそうにうつむいて居まして、可笑しい事には始終男の先になつて行くのであります。妾は多分お里歸りだろうと考へました、なぜと云へば何時でも二人揃ふ時は、男が先きになるのですが、嫁のお里歸りばかりは、女が先きになる樣です。

田舍には能く見る二人連、野趣ある文字です(評)

賞品圖書切符金二十錢

秀逸

○女工

芝區　吉田かつ子

この頃の寒さに、毎朝まだうす暗い時分、私の宅の前を通る二人の女工がムいます。一人は十七才位て、も一人は十四才位てす、が、二人は姉妹てはないやうてす。

『今朝はまだ早いワネ』

『昨日と同じ時分てせうよ』

『ちやー始まる迄に三十分位あるワ』

『さうネ』

二人の會話はいつも同じやうに時間のことばかり。私は毎朝この二人の後姿を見送つては何かあの二人の身の上に悲哀な歷史があるやうに思ひ又一方には多大の敎訓を得るのです。

○雪

名古屋　ちやう

午後二時頃帳場に居たが、あまり寒いので二階の炬燵にはいり、文壇を讀み行と道行人と題があるので思付障子を明た。私の内は角家てすから東西南北見渡せます、色々な人が通るのでじつと見て居るとちら〳〵雪が降り出した、寒いと思たら雪になつたと思つて居る間に大きなのがどん〳〵降出た、サー皆な走り出した、北向て走るのは頭も胸も眞白に、南へ行くは背中が眞白島田髷を眞白にして走る娘、蝙蝠な兩手に

持てキヤキヤと言て走る酒屋の小僧、羽織を裏返しに着て走る田舍人、小供が白く成てあびの樣な手を振廻してワッと言つて走る、犬も走る、車も走る、ゴーと電車が眞白て走る、見ると前の家の嫁樣が丸髷を眞白にして二階から首を出してゐる、自分も氣が付と前髮に雪が付て居る、寒いので障子を閉て又炬燵へもぐり込んだ。

○學校ぶり

名古屋市 鵜飼瑤子

每朝學校への途すがら行き會ふ方の中て、縣立と市立の方は一寸氣取つたようて、私立の淑德はやさしく、金城と淸流はハイカラの方が多く一番地味に見へるのは裁縫の方てす、私ももう直きこの中のお仲間になるので御座いますが、お母さんは裁縫が可いて仰やるし兄さんはどうしても市立へやると言はれますけれど私は亦ぜひぜひ淑德へ入りたいと思ふて居ります、それに春子樣も富子樣も淑德へいらつしやるから一袴の二本線の方を見ますと私ほんとになつかしう御座いますわ。

○あはれ

愛知 紫雲女

髮は亂て結び破れ〳〵てつぎ〳〵の衣を纒て體よりも大きな籠を背負ひ長い竹の箸を手にして落ち散る屑紙を拾ひつゝ行く婦人の後よりかあさんよいものがあつたとさも嬉し相に六つか七つになる女の子がちり箱から石鹼の空函を探し出してついて行つた、あはれあの函に何を入れるだろう。

○嫁入の行列

長岡市 浪子

書に倦んて障子をサッと閉ければ眼下は大通、最早黃昏、道行く人は何となうふせか〳〵として居る、がや〳〵と賑かな足音、何だろうと頸をのばして見ると、派手やかな嫁入行列を大勢が見物せうとてどや〳〵と取捲いて來るのでした一番先が媒介人夫婦、次が一族惣代、嫁の兩親、次が大切な花嫁御、末は供の女中、いづれも紋付に白襟、花嫁御は大層美しい、二十位、お髮は文金の高髷、衣裳は紋羽二重の裾模樣、華かな錦の帶を立矢の字に、淡紅の扱帶?。まあお美くしい事、ほんとに幸福な方だわ。

○自轉車

仙臺市 原霜峯

私が伊皿子に居ました時、いつも自轉車で華族女學校へ行らつしやる御方がお在なすつたのよ其御樣子といつたら本當にたまらな位い、ハイカラなの!! 若し御歸りが遲くなつて、もう夕日が海の波を奇麗に彩つてる頃、柔かい風がそよよと袂をあふつて眞白いのと眞紅な絹の釉口が翻がへる、其間だから雪の樣なオホヽ、綠の髮のマガレートに眞白いリボンが上にヒラヒラ下にヒラ〳〵、二年の昔都で每日此の御方を見るのが何によりの樂みてあつたのに今私の身の上は! あゝもうあとは中上げますまい。

○歳の暮

盛岡 白桃

十二月も殘り少ない或る夕、車を連れた鼻下八の字の紳士四五人、何れも意氣揚々として向ふの忘年會會場と大字に記された秀芳閣の內に消える、續いて目に入つたは左褄の花形、雪路のむつこい御上をこわそうにキザミ足でやつて來る、是も同じく秀芳閣の門に消えると、今度は六十計りの婆樣が、赤緖の下駄をブラ下げて、トボトボと歩いて來る、恐らくあの赤緖は孫への心盡してせう、次いて十四五の小間使らしい女の子が、御歲暮と記した蜜柑箱を重そうにかかへて行くと、隣の質屋から一人の婆樣が大きい風呂敷包を背負て出て來る、向ふから郵便遞夫が急しそうに走つて來る、フイに横道から門松賣が現れた。

○電車

本郷 朝井松子

「本郷四町目」と車掌の聲男ましく一輛の電車が止まれば、山高や中折、角帽、廂髮やら丸髷島田が我先にと出て來る、混雜を押し分けて「あれ祖母さんあぶないよ」と廿歲前後の鄙びたる娘が一人の老婆の手を取って下りると、衆目悉く老婆に集つた、其の老婆はきやらこの黑紋付に紅絹の下着を重ねて、襟へ八十八歲と書いた布を縫ひ付けて、杖も輕げにすた〳〵歩く樣は、漸く七十歲位とよりは見えません、嗚私にはモーお祖母樣は無いが、どうぞ母樣をあの人の如にと心に祈乍後影の見えず成る迄見送ました。

○歩きながら讀む

愛知縣 內山ふみ

至て人通りの稀れな庄內川の堤の上を十五六歲の少女が紫風呂敷の包を左手に右手には何かの雜誌を擴き面白さうに讀みながら行くと突然「上を行く子は勉强家、道々本を讀んて行く」と畫いて聲する方へ振り向くと南側に草刈男が鎌持

つたまゝ上を見上て莞爾して居るので忽ち顔あからめて早速本をとぢ少しく足を早めて行く少女を見送て私はさう思ひました。　あの人も矢張私が何時もする如く町へ御使の歸りに好きな御本を買つて家迄が待遠しくて人通りの無いを幸此所をあゝして讀んで行くのであらうと何んだか其人が懷かしかつた。

○情けない　赤坂　春蘭女

妾は、過日電車内て、一人の學生にあひました、それは日比谷公園の所て乘つた、十九か二十の男、それは着て居る羽織の裏は、紫と白の大きないちまつのカイキ、ひもはオリーブの女らしいの教科書をつゝんだ風呂敷は、赤の澤山にはいつた、友染のメリンス、何となく女らしい樣子てした、あゝこれが當世のハイカラ學生てせうか、かりにも世界の強國と言はれる此日本に生れ、ましてやこれから御國の爲に勉めなければならぬ若い方々がこんななりてべらべらして居らつしやつてよいのてせうか、妾はなさけなく思ひましたれー。

○新聞配達　廣島縣　花　霞

三百六十五日暑き日も寒き日も はた雨の日も風の日も、一日缺かさず通るのは新聞配達夫てす年は十五才位てすが、誠に可愛子なのてす、我が家へも置て行きますから、少し休んて御行きなさいなと申ますと、ハイ有難ふ御座いますが、次の家に行くのがおそくなりますからと申てさつさと行きます。

○中學校前　岐阜　愁の人

嫌いな裁縫の時間も濟んて歸途についた、丁度中學校の前まて來ると向から四つか五つになる鼻を垂らして居る小供の手をひつぱつた田舍臭い爺さんが來た、そうして中學校の生徒が澤山運動場て遊んて居るのを見ながら「なあ、坊や手前も大きくなつたらこんなゑらい學校に入るだぜ」といつて居た、この子供大きくなつたらどんな人になるか知らん。

○小僧　羽前　笑花女

此頃は寒さも強うなつたので、嘸や奉公の身の弟も寒からうとて、昨夜迄にやつと調へた着物の小包を郵便て送らうと出掛けたのに、秋の田舍道とて、人な恐い、生憎深山颪の寒い風が顏を交へて飛んて來ます、妾は漸々中里と云ふ處まて來かゝつた時、アゝ可愛そう、年頃十三四位の男の子が小さい草鞋に菅笠を冠つた儘、印ある醬油樽を五つ六つ積けた車を引いて、今此坂を登らうと、僅か登りては元に歸り、登つてはあゝ力盡きたのてせう亦元に歸つて來るのを見兼ね、妾は車を後ろから押してやりました、小僧は大層喜んて行きました、あゝ奉公の小僧てあらう、此寒い日に難儀なしながら働くのてあろかと、思へば弟の身の上も忍ばれて知らず涙がこぼれました。

○ドン　澁谷　田中若菜子

朗らかな小春の散歩日和、妾は猫をヂヤラシ乍ら南條に出て往來の人を觀察する（十一時—十二時）街道を見てゐますと、前の檜林から畫架と三脚を持つて四人の學生が宅の樫根の下に來て、今出て來た檜林を寫生し初める、少したつと又林から農夫が車に大根をつんて出てくる、其のあとから女學生が二人ついてくる、農夫は寫生を覗く樣に見て街道を左に曲つて土手に消える、女學生がスマシて同じ道を通ると、四人の畫家が一齊にフキ出す、今度は林の中から一隊の人馬が落葉を散らして街道を東に走る、澁谷の騎兵隊だそうてす、急にドンがなる——十二時！

○花賣少女　長崎市　山口　蝶子

暑い夏の朝も冷やい霜の朝も雪の降る冬の朝も私が起きて顏を洗ふ頃、いつも〳〵天然の美しい聲て、花ヤイ花はいりませんかと、時もたがはず、優し肩に少さい花籠をのせて通る少女が有ります、私この少女を見ますと、可愛くつて床の間のさし花が枯るればじきに可愛少女の花を買つてやるので少女は喜んて毎朝行きも歸りも私を見ればあいさつするので、猶更可愛のてす。

○門口　德島市　河　里子

私は今家の門に立つて居ますが通りがない、さて町へ行くには留守居がと思案最中に、みいちやんは湯屋からてあろう、手拭さげて向から、隣の花子さんは母樣とお買物に行く、後を見て不思涙ぐんて居ますと、突然姉樣と呼ぶ聲は三つの年から養育した末の妹の文子てす、あれ小姉樣かと目に付いたのは高等三學年の晴子が、ニコ〳〵しながら歸つて來るのてす、二人の妹を連れて家へ入りました。

學校通信

○學校の遠近

愛知縣愛知郡中村字稻葉地　內山ふみ子

私の村から尋常學校へ行くには道程八町あります、高等小學へは十八町、中學及び高等女學校へは一里半程づつあります、それて雨ふる日にも雪の朝も、何れの學舍へ通ふ人も皆徒步ばかりです。

○冬の朝

信濃　世良田優子

私は寒さを耐えて二里の道を女學校へ通學して居ります、每朝學校の間近に來ますと、直其屋根に立つて居るストーブの煙突を見るのてございます、もしも煙が盛にたつて居りますと眞實に嬉しくありますが、徹てありますと寒さが一層增してきて、急に物悲しくなつてきます。

○妾の學校

上總　鈴木梅子

妾の學校は町のまんなかの小高いところにありまして、運動場は廣く、そこからは町を一目に見ることができます、生徒は百五十人もありまして、一同熱心に勉强して居りますから、非常に成績がよく、其中ても妾の四年級はことに成績が優等て、妾の一番親しい梅子さんは何時も首席を占めるのです。

女學校近事

○卒業生と結婚

都下の各女學校生が業を卒へた曉に主に何う云ふ方面に嫁したいと云ふ希望を抱いて居るかと云ふ事を或る新聞に書いてあつた其摘要は▲學習院女子部　長袖公達に白羽が立つは勿論なれど彼れ等許嫁の外は多く學習院出身の法學士次に軍人（殊に海軍將校）第三に外國大學出身者を望む者多しとなり▲女子大學　活な澄ろ陸海軍人を慕ふやうに思はるれど之れは又文士を一位に置き次に敎育家音樂家▲虎の門高等女學館　ハイカラ女學生とし云へば先づ指を此の校に屈す可く婿殿の撰擇も中中凝たものにて外交官（法科出）を第一位に置き次に洋行歸りの實業家にして近くは高等商業學校出身者なり▲女子高等師範學校　此の學校に入學する程なれば其の意氣組も天晴れ天下の敎育家となりて女子敎育の發展に勉むる丈け中々に結婚話には耳もかさゞる所なれど可惜結婚期を過して後に悔める多きは他に於て見ず業成りて遲蒔ながらも敎育家に嫁ぐ者七分を占む▲お茶の水高等女學校　此所の生徒は主に中流以上の家庭に育ちし丈けに其動作淑かに見ゆれど大のオキヤン揃ひなるも面白し夫選みは學士なれば何んても御座れて中には音樂家に嫁けるも多し▲第一二三高等女學校　婿選みに種々の方面に涉るは此の三校なるべし第一高女は主に官吏軍人商人にして何れも學校出身を好み第二高女は學士の內にて醫理を第一に次は軍人にして特に海軍將校に心を寄する者割合に多く第三高女は高商出か農學士醫師に望を屬す▲音樂學校　此の校の出身者は主に音樂家ならんと想像するもの多けれど事實はさに非らずして文士を好めるは文藝と音樂とが或る點に其の趣味を同じくするが爲めか▲女子美術學校　同校生徒の望は無論美術家に多く次は文學士軍人なり。

○國民英學會女子部

神田の國民英學會は英語の學校としてずゐぶん古くから聞えて居るが今回新たに女子部を設けて神田區北神保町十五、十六番地に校舍を新設した。

○東京女子實業學校

と云ふ學校が新しく麴町區飯田町四丁目一番地に設置された、專ら女子の實業敎育を目的とし官衙銀行會社等の女子部員を養成する方針てあると、校長は松島剛氏、前月より開校した。

○女子大學生徒募集

日本女子大學校ては大學部、豫科、高等女學校、小學校、幼稚園の各部に若干の生徒を募集す、願書受付は三月二十日迄なれども出願の順序にて入學を許す筈なれば志望者は早く申込むがよい。

學校通信募集

▲諸孃が每月通はれる學校の有樣なら何てもよろしい▲學校全體の近況ても又は一部の近狀ても▲學校の評判、特色、學科、敎師、生徒、或は風景なり建築なり凡て學校と關係したこと▲又諸孃が御自分逹と學校との關係も面白い▲原稿は十行內外▲〆切は每月十五日

文學顧問

問　私は初めて和歌を習ひたいものですが、東京によい歌の會か又は歌學の雜誌はありませんか(片田舍の一少女)

答　佐々木信綱氏の竹柏會は和歌專門の會です神田小川町一番地竹柏會に宛てゝお問合せあれば規則書を送るでせう、「心の花」と云ふ歌の雜誌も出て居ます。

問　新歌謠を集めた書物はありませんか、又古い雜誌を送るのに別に郵便の規則がありますか(千葉縣賤の女)

答　お尋ねの新歌謠とは明治になつてから新作された民謠の類を指す(例へば本誌にあるもの丶如き)のでせうが、それなら未だ纏つた書となるやうな集もありません、次に古い雜誌と言つても二三年前のなら現今の郵便に定めてある通りてよろしく、ずつと古いのになると近所の局て聞き合してからお出しになる方がよろしいでせう。

問　新派和歌と舊派和歌と例を擧げて御說明をねがひます、それから新派の和歌集ては誰のが好いでせうか(柳月女)

答　例は擧げるまでもなく其過の新聞雜誌を御らんになれば直ぐ分ります、最も新派和歌の方は新派和歌と名乘つてゐる方が多いけれど、舊派の方は自ら舊派和歌とは言つてゐません、新派てなく單に和歌とあるもの丶中には舊派も含まれてゐるとみなければなりません。それから新派和歌の最も優秀なる集は與謝野晶子女史の著にあること言ふまでもなく、「みだれ髮」「毒草」「小扇」「戀衣」「舞姬」「夢の華」等の諸集があります。

問　記者樣、上野音樂學校ては箏曲も敎へますか、また入學の學力は何程ですか、私は將來箏曲て身を立てたいとおもひます敎へ下さい(東京の東京知らず女)

答　箏曲も敎へます入學の學力はさまて深くを要しますまいが音樂は天成のものですから其點を注意せんければなりません、規則などは同校へお問合せなさい。

問　和歌を習ふによき本がありましやうか麓の塵は完全して居ましやうかどうか御敎へ下さい。(沼津 A 丑)

答　麓の塵などて和歌は稽古出來ません、參考にはなるでせうけれど、それて歌を作らうと思へば間違ひです、古今多くの歌を讀むのが上手になる近みちです。

問　新體詩及び新派和歌作方を初學者の爲めに丁寧に敎へてある書物の名及代價發行所を敎へてくださいませ。(越前永宮笑島)

答　「新體詩作法」定價三十錢神田錦町修文館發兌、岩野泡鳴氏の著てす、新派和歌作法は未だ知りません

問　(一)ゆかり(二)ゆくりなく(三)こゝだくの意味を問ふ(靜岡縣良水女)

答　(一)ゆかりは緣故(二)ゆくりなくは不意に(三)こゝだくは澤山の意。

問　高等女學校を卒業して美術學校の本科一學年へ無試驗入學が出來ますか(石見、千代)

答　出來ます、猶おたづねの美術學校は本鄕弓町の女子美術學校ては如何。

問　水野葉舟樣と伊藤銀月樣の御住所を御敎示願ひ升(羽後、柳子、敬子)、

答　東京府下西大久保百五十四水野葉舟氏、東京下谷區上根岸九十四伊藤銀月氏。

問　二葉亭四迷の傑作と云はるゝ小說をなしへて下され、又發行所も敎て下さい(京都、はるしほ)

答　二葉亭四迷氏の處女作として且傑作として其名を知られてゐるのは『浮雲』です、(博文館發兌太陽增刊「明治傑作集」に在り)『片戀』(春陽堂發兌)最近ては東京朝日紙上に『平凡』あり。

●●

▲注意　前々號の本欄に羅甸語敎授所の有無を問はれた方がありましたが、麴町區飯田町四ノ一東京商業英語學校內語學研究會ては目下外國語學校敎授水野繁太郞氏に依囑して羅甸語の日曜講習會を開いてゐるさうです、篤志の方は勿論入會出來ませう右わざ〱通知がありましたから一寸(記者)



誌友倶樂部

熱帶の太陽
の下にも兩
極の寒冷の
地にも婦人
あれば又必
ず幸福あり
ムーア

諸嬢の交際

○賢明なる誌友の諸姉様よ妾はまだ十四歳なのよ妾と同年の方とよろしく御交際を願ます。（岩手縣石鳥谷、橘なみ子）○妾も古き女子文壇の愛讀者で御座いますが本年聊か見るところが有りまして此上海に淋しき月日を送つて居りますから どうぞ御寫眞や繪葉書其他の物も御交換おねがひいたします 諸姉様にて此後ち未開の子女を敎育し 或は此地にて活動しようとの御思召の方は及ぶだけ 御盡力いたす考で御座いますから 深き御交際の上で御通知下さい御報知申上ます 序に男子の方の御交際はかたくおことわり申ます （淸國上海英大馬路エイカ洋行内西出ゆり子）○諸姉様淺學な私をあはれと思召ならなにとぞ御敎へ下さい （尾道市東御所柿本よしの）○妾等は紀州の山又山にかこまれた山水を友として居る者ですが あはれと思召しの御方あらば何卒これより 玉章ゑはがき編物の御交際をねがひます 妾はきつと御返事いたします男子の御方尙よろし （紀伊有田郡五西月村米田てる子、三角きみ子、前田ふみよ、米田トミ子）○靑ばしげる南海の里にさびしくくらす妾を不便と御思召しの御方あらば何とぞこれより玉章やゑはがき、こうかんをして下さいれがひます （和歌山縣有田郡五西月村彦ヶ瀨、奥つや子）○玉章や繪はがきの御交換を願ひます、文體は羅馬字又は日本字でもよいのです （千葉縣長生郡豐岡村萱場鈴木梅子）○繪はがき玉章を御惠み下さいお返辭はキツト差上ます （大阪市西區九條新道五丁目五二二谿本はる方登代子）○妾のやうなものにいろ〳〵の雜誌御惠下さいまして有難うございます 又妾の所此所になりましたからお知らせ申ます （大阪市北區蜆橋郵便局内鈴木ふさ子）○繪葉書や玉章の御交かんを何卒永久に御願ひ申ます 御返事は早速々々致しますから（長野市夫婦川二十五番森方丸岡照子）○皆様私は不幸にも此文壇紙上で 御交際する姉様で心から誠な方は只二人きり 繪葉書の取りばなし古切手を送つても 御返事一度下さらないとはあんまりですわ 早く心あらため一日も早く御返事を下さい（仙臺市元柳町五十今泉英子）○誌友の諸兄姉と繪葉書、寫眞、玉章等交換を永久に希望す返築は、確實（大阪市博勞町二丁目一五小下誠）○繪葉書玉章や御寫眞の御交換を願ます必ず御返事は致します （福島縣安積郡郡山町安藤伊助方安藤いよ子）○妾は濱松の片隅に住んで居る者ですがどうぞ 御玉章や寫眞の交換をして下さいましな （靜岡縣濱松町後道四九杉浦登美子）○妾は上京しましたが不幸にして御交際を休めなくつちやなりませんの また暇がありましたなら御知らせしますわ 其れては懐かしき皆様御機嫌よく 御達者で御勉學遊ばして頂戴よさよなら （茨城縣杉山芳子東京麻布にて）○誌友の姉様達よ妾は本年郷里の高等女學校を卒業しまして 今回井戸中の蛙大海へ遊學に出ました故郷遠く離れて淋しく暮して居るのです 何卒寫眞玉章の御交換を願ひます （神田區猿樂町廿一天野たよ方靑木八重子）○記者様私は誠にふつゞか者ですが何卒諸嬢方へ御紹介を願ます （三河國岡崎町龍田天野きよ子）○一筆申上ますいよいよお寒くなりまして 記者様皆様御かはりはありませんか 私はきふに用事ができて皆様と御交際する事をやめる事となりまして 實にざんねんな事で御交際をやめます （埼玉縣川越松江町園田さく子）○妾は昨年三月頃より病氣しまして姉上さまへ御返事もよう致さずに 今日迄音信不通の罪は御わび致しますどうぞ〳〵 本年も相變らず趣味ある交際をして下さいな （京都市四條寺町角赤井又七方吉村愛子）○私の手許には不如歸あこがれ天地有情徒然草竹取物語 方丈記英國文學史言海春雨金色夜叉 良人の自白詠歌自在等不用の本上等繪葉書三十六枚ありますから 絹あみものひぢつき 栞等と御交換して下さいませんか それに私の所にはロシヤ人の持つた金製十字架が一ッありますから 御望の方はちりめん風呂敷模樣縫取り（御自分て）か又は絹物相當の品と御交換して下さいこれは 一つしかありませんから御望の方は御通知の上御送り下さいな 迷惑するといけませんから （下谷區仲徒町二ノ五六山口方栗原早百合）○御葉書なり御玉章なりを御ねがひ致します （下谷區谷中淸水町二〇森田壽子）○誌友の諸姉様妾に下さるのは手紙にし

てよ屹度御返事致しますわ遠方の方にて當地の雜誌御望みの方へは先着五名へ差上げます（周防大島郡蒲野村中谷幸子）○御懐しき名古屋の諸姉様方に御願いたしますの 妾事故あつて長らく皆々様とも御無沙汰しましたが以後永久に親密なる交際を願ひ升よ空吹く風と御見捨て遊ばさずれ（遠江濱松田町四七番地中村露子）○私は去年三學年をすませ今は家にありて悲しんでゐる者でありますが御手紙や寫眞エハガキの御交際を永久に願ひます（武藏入間川越町松江町内田さく）○雜誌の交換寫眞繪葉書なども送つて頂戴な妾もきつと御返事致します（千葉縣東葛飾郡福田村字下三ケ尾内藤芳子）○東京の敬子さん外數名の諸姉様私病臥致し居りし爲約束にそむきまして相濟ませんでした扨て全快致しましたから玉章、繪葉書、書籍の交換を願ひます編物や繪葉書て御申込下さい早速御送り申します（下野荒川村小堀七番地佐藤かほる子）○私は能州の片田舍に住する者て御座います何卒繪葉書玉章の交換をねがいます（能登國輪島河井森之下武井花子）○皆さん澤山エハガキ有難う御座いました丹波の入木村春日神社二軒目の福島榮子さんはれ先日御病氣て死なれましたのよそれで妾しに御禮を云ふて下さいと御母さんが言はれましたのよ、妾は榮子さんの一ばんの友人てすいづれ榮子さんの御母さんから御禮をなされるてしようけれども妾が榮子さんに代つて一寸御禮申上てよ（田舍の賤女）○私は當地高等女學校卒業後淋しく暮して居りますから皆様どうか末永く御交際を願ひます（佐賀縣佐賀市中之橋小路古賀さだ子）○親愛なる姉君方よ不束な者てすが何分末長く御交際下さい願ひます（佐賀縣佐賀市柳町三〇副島なか子）○諸姉さま明けまして御目出度う本年も相變らずおつきあひを祈ります（高知縣安藝郡井口村梶原しげい）○なつかしの姉様りボン編物送て頂戴きつと御禮は致しますから御うつしもれ又不用書の交換もねがひます（讃岐多度津東濱町香川政子）○備前の廣江英附女様と聞けば懐かしい様てすがもしや岡山市上の町てはありませむか違ふたら御赦し下さい何地にしても御住所御本名を必ず知らせて給ひてよそれから山城の廣江正枝さんへ妾は今迄妾と同姓の人はないと思ふて居ましたが御芳名を聞きまして嬉しう御座いましたよ今後密に御交際を願ひます其の外の誌友の姉様方も永久に御交際を願ひますなるべく自作の和歌俳句を以て御寫眞をお送り下さる姉様方へは面白い小説や雜誌を差上げます（岡山縣川上郡大賀村廣江壽子）○妾は淸淨なる本誌面を拜借致して諸姉様に御交際を一重に懇願の次第に御座候（南總君津郡小櫃村淸子）○何卒御交際を願ひます尚アミモノやエハガキの交換もてすよ（茨城縣那珂郡神崎村小園井すみれ）○繪葉書の交換を願ひますよ私は男子の方ても玉章交換を願ます必らず御禮は致します（常陸新治郡田余村大字上玉里須崎せい様方秋月女）○愛讀の皆々様どうぞ私にも御交際なすつて下さいゑはがき其外の交換も御願します（北海道後志國朝葉郡有戸村橋本ちよ子）○誌友の皆様よ新年には英文か又和歌の交換して下さいませんか常は郡に居りますけど一月には下名に居ります（茨城縣西茨城郡北山内村田村波津子）○才媛の皆様玉章寫眞の御交換を願ます（水戸市上市西町島田方小桃子）○私は繪葉書や編物が大好てすから御交換を願ひます又音樂も好きなのよ曲譜の交換も願ひます（山口縣玖珂郡新庄村板田信枝子）○皆様私は練成小學校高等三年修業したばかりの不束者てすが何卒お交際下さいましお手紙もよ（下谷竹町一九桝崎佐喜子）○妾は一年計り他方へ行かねばならぬことになりました以後御手紙下さいましても返書を上げる事が出來ませんから惡しからず思つて下さいな（越後小千谷山口千代子）○今年も相かはらず繪はがきや玉章の御交際を願ひます（北海道空知郡上富良野村湯淺すみれ）○妾は雪深き信濃の片田舍に住んで居る拙ない者てすがどうぞ繪はがきや玉章寫眞などの交換して下さいませ（信濃東筑摩郡麻績村坊平宮澤澄子）○御情深き姉上様よ繪はがきや玉章御送り下さいまして御禮申す尚永久に御交りを（京都府相樂郡高山村田山有野坂枝）○先號の諸姉様何分よろしく御引立の程を願ひます又玉章の交換などもお頼み申します（三重縣伊勢飯南郡射和村川原操子）○妾は山又山のたより少き今年取て十九才の女何卒幾久しき御交際を（美作弓削出口屋内時子）○あの諸姉様よどうか幾久しく親密の御交際を願ひます（岡山縣久米郡弓削驛沼元りん子）○諸姉様、今日までは誠に厚いお情けをもつてお交はり下され有難う御座いました つきまして今後は都合上しばらく御交際を中止しなければならない事になりましたので誠に殘念て御座いますおどうぞ其御つもりて（船津康子）○諸君よお望みてございましたら以後レツタア、アンドセクチ

アーホストカアト等の御交際を願ひます お返事には美術絵葉書 又は肉筆のて差し上げます故安心してお送りなさいさよなら （茨城縣稻敷郡岡田村大字下根永井愛花女）○記者様並びに誌友の皆さん明けまして御芽出度存じ升誌上を拝借して一寸初春の御挨拶まで （東京府下大島町中之郷四村二七三吉田たつ子）○本誌の大發展を祝し記者様や誌友の皆様へ新年の御慶幾久敷御祝ひ申あげます （本所區外手町五高岡方寺尾登美）○誌友の諸姉様妾は故國遠くはなれたる布哇にある身ですどうぞ消息や寫眞の交換をして頂戴そして妾の寫眞と布哇眞宗敎會雜誌を贈つて御禮します （布哇オアフ島ワイパフ本願寺附屬小學校内上土井定子）○皆様よ片田舎に淋しき月日を送り居る妾へ 御同情くだされて盛んに絵はがきや玉章や 寫眞の交換を御願ひ申します私も御返事は乾度致します （長野縣下高井郡瑞穂村中條周遊樣方中條ちか子）○誌友皆樣絵葉書や賀状や寫眞等の交換を願ひます （千葉縣上總國山武郡二川村芝山五木田種子）○誌友諸嬢の内で佛敎を御信仰なさる方々を喜びます（加賀國能美郡川北村字三反田小島政女）○誌友の諸姉樣將來末ながく松のみどりの變らぬ心もて御交際下さいませんか （近江國蒲生郡中野村坂重子）○淋しき吉野の山奥に僅に詩を友として世を送る妾をあはれと思召し親しき交りを結んて下さる御方があらば妾はどんなに嬉しいでしよう。（大和吉野郡賀名生村中窪よしみ）○諸嬢よ幸に文書の交換を願ひます （千葉縣君津郡豐岡村松節原田水仙女）○女子文壇愛讀の君よ妾は文學は愚か、和歌だつて作ること能はぬ者です。皆様、察して下さいな、若くば、君よ研究の爲め、文章の交換いたしたいのですから、何卒手紙てれがひます、又俳歌の交換もいたしたいのです、不束な私ですが、一生懸命にかゝりますから。（秋田縣角館川町、無花果會内鍛杏子）○私も縣立女學校の第三學級にも早なりましたから通學して居る方は學校の名とお歳をきかせて下さい私も拾七歳になりましたから私と同じ位の歳のお人方よ願ひます外に絵ハがキや雜誌や寫眞しをりをも交換して下さい （秋田縣平鹿郡横手町御町三ッ梨様方管芳子）○皆様お目出たう本年は華近おはがきに筆もて認めし美しき水ぐきのあとの御交換をねがひます （靜岡縣沼津上土町八代榮代子）○記者様はじめ誌友の皆様明けましてまことにお目出度うございます、紫の瑞氣東の空にゆらぎ黄金色の光り野に煌めく時、妾は渡良瀬河畔の…………………この日許りは樂しく…… 機織る音をやめて皆様の多幸ならん事を祈つてゐます、（下野足利郡三重村五十部内郷鈴木重子）○妾は久しく購讀して居りますが未だ一度も投書はした事のない者ですが今後は少々づつ投書します誌友の皆様繪ハがキ文章等の交換も願ひます （近江國坂田郡鳥居本矢倉有川内北川つや子）○誌友の皆様不束な私に御はがき下され誠に〳〵有難う存じますが母に固く止められまして如何ともなし得ません何卒悪しからずれがひます （福島市石田芳子）

寫眞の寄贈を請ふ

誌友面影はどなたでも本誌の愛讀者でさへあれば載せますから大いに寫眞を御寄贈して下さい、既に御住所姓名と「乞返送」の三字さへお書添くだされば用濟次第御返しいたします又風景の寫眞御友人の寫眞御家族や子供の寫眞、學校の寫眞なども口絵用として御寄附下さい、勿論これも御都合でお返しいたします。

繪葉書交換

○愛する未見の友よ母國の美しき繪はがき（但し花の繪はがきにかぎる）と布哇の目新しき繪はがきと交換を願ます、處がきは英字はいりませんから日本字にてしたゝめて下さい（米領布哇マウイワイルクエース商會日本人主任酒井）○妾は千葉縣の東南なる、東洋女學校に通學する不束者ですが、今手元に美しき繪葉書五組と、妾の見苦しき寫眞三組とがありますから寫眞やもしくは繪葉書を、添へて御送り下さる御方に御送り申します、（千葉縣長生郡豐岡村弓渡高山ひで子）○東宮殿下山陰道行啓紀念繪葉書たくさん持つて居ますから美しき繪葉書にて御申込み下さいますれば必ず早速御送り致します（鳥取市立川町一丁目猪口壽子）○善悪問はず多く集るが嬉しいから繪葉書交換を願ます （日向國南那珂郡吉田村字西辨分甲斐玉歌子）○姉上様よ妾も繪葉書（但し未使用の物）や玉章の御交換を御願ひ申ます （京都市新烏丸竹川上ル戸野幾久榮）○誌友の諸嬢様よ神聖なる交際を繪はがぎにて願ひます何人にかゝはらず寫眞の交換を致しませうれ但し男子の方は御免よ（京都新京極錦上ル明田英子）○此度米國の

兄樣より西洋美人の繪はがき七枚程送り被下たので諸姉の中に美術繪はがきにて御申越の先着七人樣へ差上ます（岩代國若松市大町鍛田方安倍はつ子）○繪葉書先着五名のお方には橘神社の紀念繪端書一組三枚づゝ差上ます（千葉縣長生郡二之宮本郷村眞名蒔田靜子）○皆樣の御自筆の繪葉書御送り下さいませ御禮に私の書いたのさし上ます（東京府南千住一四〇大須かの）○誌友の姉上樣妾は本年高等女學校てたばかりの不束者てすが何卒繪葉書の交換を願ます（神田區猿樂町廿一あまの方今井みつゞ）○何卒可憐娘と思召繪葉書御惠みくださいませんが御惠み被下し方には妾の寫眞と東京勸業博覽會紀念スタンプ付繪葉書二枚差上ます。（膽振國西紋鼈小林花子）○繪葉書及び寫眞の交換を願ます必ず貰きりには致しません（下野國足利町三荒畑方大竹ふみ子）○よろしく繪はがき（殊に自筆水彩畫を望む、但諸雜誌の御交換を一頁にねがひ上ます（京都市高辻新町、中島ゑん）○皆樣肉筆の繪葉書や御手紙の交換を願ひます（大阪南久太郎町三丁目荒木信子）○澤山の遞信省各種紀念スタンプ押捺の上等繪葉書を持て居ます肉筆か船來繪葉書と交換して頂戴な（東京小石川東青柳町二九淸水とく）○紀念繪はがき及大阪名所はがき持て居りますからおのぞみの方は上等繪はがきて御申込み下さい但し男の方はいやですの（大阪市東區高麗橋詰町四五西田方岡部紫星女）○繪葉書の交換を願ひます先着十名の方へは東宮殿下行啓紀念スタンプ附の繪葉書を差上ます（大分市中柳町木村米造方首藤光子）○私は千葉縣の南端なる本納女學校の女生徒ですよそれて私はこんど皆樣と名所の繪葉書や寫眞の交換を願ひます（英文や和文等も願ひます）（千葉縣山武郡瑞穗村永田大藤秋子樣方四之宮あや子）○私は異國に淋しく暮し居るものてすがどうぞ御交際して下さいまし尙又當地には英國露國佛國獨乙支那等の各國の郵便局が有りますから御希望の御方は二十錢丈（實費）御送り下さいましたら極上等の外國繪葉書に各國の切手を貼り各國のスタンプして御送り致します又寫眞の交換も願ひます（淸國天津河北大胡同東亞藥舖内たにぐち）○親愛なる諸孃樣繪葉書誠に有がたう存ます私都合により繪葉書交換をとめられまして交換なす事が出來ませんのよ私悲くて〳〵しかたがありませんわ（埼玉縣入間郡川越町連雀町渡邊かれ子）○何分田舍の者てすが繪葉書が三度の御飯より好きてありますから御取り換したいのてあります（京都府相樂郡林津町字鹿脊山杉谷たかへ）○久しく信實に御交際下さる五名の方に日本橋の繪はがきをさし上ます（關東都督府郵便電信局寄宿舍高橋榮方美代子）○誌友の皆々樣不束な妾と繪葉書の交換をおねがひ申します（石狩國雨龍郡北龍村字和繪澤源子）○誌友の御姉上樣よ何卒繪葉書及び玉章の交換を願ひ上げます（岩代高田町字仲町波田野瀧子）○お情け深き誌友の姉樣方よ永劫にお見捨てなく繪葉書の交換を願ひます御返事には屹度々々より以上の品を差上ますから（岩代大沼郡高田町丹藤春子）○わたし和歌がすきなのよそれて玉章や繪葉書交際して下さるとき和歌一首れ一寸端にても書いて頂戴な然してれ和歌のきらいなお方は玉章や繪葉書の交換ばかりてもよろしいわ（筑前嘉穗郡穗波馬池、細川方香月綾子）○お正月もはやすみましたれ、皆樣、雪に有名なる北國の、高岡に住むものてございます、同情あるお方は繪葉書の交換を願ひます、高岡電話開通紀念スタンプ付を送ります（高岡市通町三十一番地北本歌子）○皆々樣どうか繪はがきの交換をねがひます、成たけ教育繪はがきのようなので願ます、また教育に關する新聞雜誌などを惠んて下さい、きつとお禮はいたします、（茨城縣眞壁郡河内小學校内きく子）○誌友の諸孃樣に告ぐ未永く繪葉書の交換を願ひます（山口縣豐浦郡勝山村大字楠乃山の谷石川陽湖）○皆樣妾は各地名所繪葉書を集めたいと思ひます澤山封入して御送り下さい御禮には圖書繪葉書の御望ののを差し上げます（岡山縣兒島郡興除村曾根丙川、孝忠幾美）○繪はがきや玉章の交換を願ます妾は片田舍の至て淋しい所て家内四人むつましくくらして居りますのよ御情深き姉樣よ誠の友情を以て永久に御交際を然し一時的のは堅く御斷申ます（京都府相樂郡西和束村字白栖松田種次郎方松田操子）○愛讀諸姉よ奇麗な繪葉書に和歌一首宛書いて交換を願ひますよ、又寫眞の交換もネ（佐渡畑野村栗野江谷川桂月子）○繪葉書交換御願申します早速返事上ますから（岐阜縣加茂郡和知村野上永田淸子）○妾の手許に繪葉書二三百枚あります御望の方は各地名所繪葉書を送り下さつた諸孃に御送り申します（岡山縣兒島郡興除村字曾根孝忠幾美）○滿天下の御姉上樣よ今度始めてお目にかゝります只今手許に月瀨名所及び近江八景のエハガキ少しばかり持つて居ります誠に粗末なれども御禮として

差上げますから何卒御なぐさめ下さい（京都府相樂郡笠置局區內朋子）○御情深き皆樣よ各地の名所繪葉書御交換な切に望みます（磐城國石城郡神谷村山下修子）○前紙に交換を願ひましたら十五六枚應じて下さつた方がありましたけれども望みの上等は只二人でした此度は五錢以上か未使用五枚以上の交換を願ひます御返しはきつとします（東京本所區番場町磯野すみ）○妾は信濃の山ふかき地に住む者でありますが、天下のなつかしい、誌友の皆さん繪葉書の御交換をして下さいませんか、必ず御返事致しますから（長野縣東筑摩郡坂井村瀧澤ひで子）○誌友の皆樣私は或銀行に勤めて居ました時外國から來た郵便物の古切手を澤山集めて置きました御望の方は寫眞の裏へ生年月日と姓名を書いて御送り下さい種々取混ぜて送ります又遞信省發行凱旋觀兵式紀念端書へ紀念切手貼用の上紀念スタンプ捺印の物甲乙二枚一組所持して居ます遞信省發行觀艦式紀念端書一組御持の方は交換して呉れませんか望の方は書留にて送るか又は御照會あれ（安房舘山町新井浦宮本濟子）○諸姉さんよ妾はエハガキ交換するのは何よりの樂みて其日を暮す貧女てすが舶來肉筆。舶來スケッチ。舶來圖案及外國製。ポンチ。以上のエハガキの裏面へ短文を書いて送られよ妾も必ず送升（磐城國亘理郡荒濱町武者けいせつ子）○環友諸姉樣よ繪はがきの交換を願ひます乾度返禮は致します（靜岡縣榛原郡萩間村東萩間原木京平方すみれ女）

寫眞編物交換

○御手製のひじつき及しなり等を送て頂戴な必ず御返禮として美しきあみものを送りますそして寫眞を送て下さる御方へは妾しの寫眞と婦人世界か文藝倶樂部一部そへて御返し申ます（靜岡縣引佐郡金指町伊藤靜枝子）○妾の手許に花しなり寫眞掛しなり其他いろいろの編物有ますのよ皆々樣の內に新小說文藝倶樂部婦人畫報小說御送り下さいましたなればきつと御返禮致しますのよ雜誌も色々持つてますのよ（門司市小森江淺野セメント會社々宅鹿村さち子）○何卒寫眞や編物の交換をして頂戴な只今あれば先着拾名樣に限り御恥しながら妾の寫眞か編物か相當のものを遊なく差上ます繪葉書の交換もネ。（福島縣若松驛前相田倉庫方吉川文子）○地方の名所エハガキ編物及寫眞の交換して下さいれ乾度返事いたします（宮城縣柴田郡大河原尾形町鈴木キク子）○今度は編物を送てくださいれ（神奈川縣三浦郡浦鄕村字田浦四七三澁山方加藤梅子）○陸中の若生仲子樣に申升私が先日御かし申ました裁縫のひな形御返し下さる事は出來ますまいか（水戸由利子）○誌友の御姉上さまひじつきと栞とを送つて下さいよ御禮に繪葉書と小せつを進呈致します（兵庫冴改道り二丁目二十三ノ四佐伯松子）○諸友の諸姉上樣よどうぞ私に編物の雛形か若くば細工物の形を御めぐみ下さい御返事は必ず上等繪葉書て申上げますまた唱歌の交換もいたしませう（埼玉縣比企郡七鄕村越畑柳とよ）○誌友諸姉樣不束な妾と寫眞の交換をお願ひ申します（富山縣東礪波郡油田村字堀內村山東丘子）○造花編物網籠を送て頂戴御禮には必ず拙ない繪畫てはありますが掛物額面栞書等に書て送ります畫樓樣は御孃樣の御希望に應じます（山口縣吹珂郡南河內村貴船麗子）○誌友の諸姉樣私は編物を一つも知りませんどうか皆々樣の內で面白い編物があつたらお教へて下さい（岡山縣邑久郡豐村大字五明桐本梅子）○御惠み深き諸姉上樣よ編物寫眞の御交換を願ます妾もきつと相當の品物を御禮に差上ますから（三重縣津市藏町三番地服部小枝子）○諸姉樣の御寫眞を御送り下さつたお方には美人エハガキか寫眞にて御禮致します（靜岡縣志太郡伊久美清水さち子）○誌友の諸孃樣私千曲川畔に住むやつと高小を出た無學の少女てす、繪はがきや御手製の栞と交換してれそれから寫眞を御めぐみ給へや妾の見苦しきのをきつと差し上げてよ（信濃下高井郡往鄕村庇背木幸）○皆樣御寫眞を送つて下さい妾もみにくいけれど小說や繪葉書などそえて差上ますよ（熊本縣玉名郡伊倉町前田ひろき）○妾は近頃編物の寫眞掛や栞を習ひかけましたが未だ新奇のを知りませんて珍らしい物を送つて下さいませんか相當の物て御返禮は致します亦妾が手元に、みにくいが寫眞が七枚ばかりあります故添へて送りますからどうか喜んでください（名古屋市米屋町梅屋內東富美子）○誌友の姉上樣よ私は淋しくくらしてなりますがお頼みてすから編物や造花を送つて下さい御禮はリボンや繪端書てきつと御かへし致します（京都綾小路高倉西へ入中根ふみ方松岡ふさ）

圖書換讀

私の許に女夫波、不如歸、伯爵夫人、濱子、乳姉妹、女學生、やどり木、夏子、等ありますから皆々様の許に女學世界、婦人世界、文藝倶樂部等お持ちの方は おとりかへいたします早速お送り下さい（北海道函館音羽町七十八富下藤子）○満天下の諸姉よ、妾は心の涙、罪のゆくえ、草枕、理想の人が不用に成つて居ますが附突、寫眞掛、ランプ敷等二個以上にて、御又外にも不如歸、忘がたみ、從舟、其の日哉の日、などもあります以上は脱物、栞數個にて然れも御申込下さいました御方に差上げますさよなら（佐賀縣下高橋町字中野田代光代子）○田山花袋先生の南船北馬、草枕、旅すがたの内一冊と私の三宅先生の水彩畫手引一冊と御交換して下さる御方は御一報を願ひます 誰方様にても御寫眞絹栞を御惠送の御方には中學世界、文章世界に繪はがき挿入にて御禮いたします（千葉縣東隅郡國吉町刈谷今井直子）○妾は乳姉妹女學世界中學世界各増刊女子文壇成田名所瀧參現代美文想文文集などの不用書があります皆様の中で中學罵倒論、濱子、雛子、ハイカラ令嬢已がつみ後編多情多恨などの不用書がありますれば妾の何れかと御取り換へ下さい（千葉縣印播郡成田町林優子）○誌友の御姉上様方よ妾は女學校に通學して居る者ですが誌友のよしみとして玉章や繪葉書の御交換を永久に御願ひ致します（千葉縣印旛郡成田局區内林俊子）○誌友の姉様方妾は北の端の者ですが之から繪はがきや玉章の御交換を又小說新ほとゝぎす罪と罪御持ちの方は何卒御送り下さいきつと御禮致し升（北海道有珠郡伊達村役場前渡部茂子）○瑞物雜誌の交換を願ひ升妾には左の不用の本があります「四季料理」紫爾子、もつれ絲、浮氣の罪」、御入用の御方は申込下さい又孝女白菊、寒風戀風、御持の方は御交換下さい（栃木縣栃木町萬町福井八重子）○皆様の中女子文壇三卷五號以上の水彩畫口繪のみお送り下さる方は有ませぬか御禮相當致します若しお送り下さるのでしたら勝手ながら折らずに其儘願ひます（京都府葛野郡嵯峨嵐山前芹川冷陽子）○なつかしき姉様私誌上で御目もじはじめてよ以後交はつて姉様方文學のすき私大すきでも未だ書けないのよ私みなさまのうるはしき御顔に接したいのよですから玉章御寫眞小說迄つて下さいな先輩九名には鴻雁破戒、懺悔照淵、運命踏怨錄、綠葉集、思出の記子規小說集、につたなき寫眞添へて返禮してよ（東京日本橋區大傳馬町二ノ一鐵江發行方梅田久爾子）○皆様の内に綠不綠、寒風戀風、けむり、病間錄、釋宇全集其他の本にても又は寫眞を添へて送つて下さる方はありませんか御禮には紅葉全集、無花果くらげ、月に立つ影、にせ紫、英獨戰爭未來記、オルレアンの少女、等何れにても見にくい私の寫眞を添へて差上ますからね、（秋田縣仙北郡藤木村川越もり子）○今妾手元に、ふところ鏡、鍵眼泉、小說觀音堂、少女世界、等不用になつて居りますから相當の品と御交換して下さいな、皆様の内「不如歸の歌」（藤村操の歌）御存じの方は御致へ下さいな御願よ御禮は屹度しますわ（神奈川縣桐畑五三六篠原皆子）○貴姐様の御許にハイチ詩集ありつれば御恵みの程を願ひに願ひつる必ずや妾よりも相當の御禮は差上げ參らせむ（茨城縣猿島郡新合村中山埼今泉桂花子）○心の波、宮美子夫人、天うつ浪、みだれ髮、百合子、破戒等御持合の御方は妾手許にある不如歸 女夫波 伯爵夫人 雛子 濱子 又は婦人世界 女學世界 文藝倶樂部等と御交換して頂戴な（靜岡縣引佐郡金指町秋月幸枝）○諸姉様方の内に源氏物語、枕の草紙、など御持ちなれば私の小さなハート、嫁が淵、罪とつみ、女學世界深山、婦人世界、女子文壇其内どれでも御交換下されませ、又栞編物など差上てもよろしう御座います（東京日本橋區中洲十八號堀新居たみ子）○諸姉様よ小說か詩集の御不用なのがあれば御れがひですから御送附下さい名所繪葉書か雜誌かで御禮致しますからそれから私は伊豫の片田舎に淋しく暮して居るものですがどうかよろしく御交際下さい（伊豫今治室屋町一丁目神尾きさ子）○誌友の皆様私手許に中等教育日本地理女子萬國歷史理科書 國文讀本其他色々不用の書物ありますから皆様の内で愛らしき子供の繪はがきか異色の繪葉書とて御交換なし下さいませぬか（石川縣羽咋郡高濱町南たれ子）○懐かしい誌友の皆様よ妾の手許には左の不用の書がありますのよ宮子夫人 伯爵夫人 夫さだめ宋の娑百海不如歸國語 漢文新辭典高等女子文かきぶり 青春全部三册家庭辭書思出の記多情多恨天うつ浪有耶無耶集實用錢縫全書 血の涙など其外いろ〳〵 不用の書がありますのよ皆様の内孝女白菊の歌乳姉妹金色夜叉全部、雛子夏子化粧かゞみ源氏物語 平家物語寫眞畫報婦人畫報寄圖畫報女學世界婦人世界 自由結婚新婚旅行闇の光明治女子用文五千題美人エハガキ などお持の方はお送り遊ばして頂戴な 殊に男子の方へはお禮

として妾手製の花形シチリや寫眞掛其外いろいろの編物を差上げます（常陸國眞壁郡關本町寺田樣方みや子）○色鐵梅、眞人の自白、天地有情、黄菊白菊、無花果、コブシ、行營、花守、破戒、門の草、塔影、以上の本お持の方は送つて頂戴なさすれば造花の美はしい、ハイカラ束かんざしを一個づゝ丁寧に箱に入て小包て差上ます但し二十人限り、（備後福山東町、矢野志奈女）○誌友の姉樣方よ私の手許に「新體詩集の夏びさし」小說乳姉妹が不用になつて居ます故皆樣の中て黄菊白菊か小說夏子又は伯爵夫人とかへて下さいませんか（京橋松屋町二ノ五野田はつみ）○只今諸孃へ百五人分進呈する不用書籍がありますこれは永久交際をして下さる方へ交際開始のしるしとして進呈するものですから寫眞、編物、栞など御送り下さいました方へ一人分宛進呈します日本大辭典、明治節用大全、文藝倶樂部一册、少女界二册てす。（岐阜縣土岐郡明世村河合澤田鐵平方村上眞子）○なつかしの誌友の皆々樣、若し貴孃方に「多情多恨、アラビヤンナイト、寛風戀風女夫波、青春、無果花、紫笛集、ハイネの詩、美文作法、新體詩作法などの不用書がありましたら御惠み下さい。御禮としては「福翁百話、新社會、朧月夜、紅葉の錦、卯の花月夜、葉櫻集、十六夜日記其の他中學生、中學文壇、秀才文壇等を送ります（上總長生郡豐榮村岩川關芳枝子）○皆樣の中で趣味、笑、文章世界、婦人畫報、ムラサキなどて四十年六月以後の御不用がありましたら婦人世界、女學世界、女子文壇の御好號のと御交換下さい（靜岡縣沼津上土町入代榮代子）○誌友御姉樣へ私の手許に女子文壇少女世界新撰大日本帝國史文章世界學術自修法幼年知識新作全波淨瑠璃集及致書有りますが皆樣の內て未使用の絵葉書皆樣の御寫眞其外雜誌御送りの方へ御禮として必ず御送り致します（愛知縣海東郡津島町神田丈方同すへ子）

年賀狀御禮

本誌愛讀の諸孃より例の通り御自筆又は美しい繪葉書の年賀狀をたまはり社中一同ありがたく拜見しました左に貴名を掲げて聊か謝意を表します。

○赤倉とみ子○澤田あい子○吉田○倉成彌生子○根本松江○大沼なみ子○服部貞子○長澤ふく子○梶原しげい○小林しづ子○森井せい○三浦花香○岩淵國子○入重子○沼倉ふく○有野貞子○井澤菊江○渡邊たか子○千代○朝がほ○秋庭みき○岡部なか○松ヶ枝雪子○野村光子○神林せい子○横川露枝○今泉磯千島○本郷磯子○中島たか○高梨靜春子○杉山梅子○秋山靜子○久野のゑ○市原つゆ子○李壽子○中島一葉○吉田しのぶ○土田りた○池田とな○ゑみ子○みのり子○俣野かすみ○篠根紫枝○安部富士子○木枝子○辻林みどり○乙幡もん子○葉子○中山道江○牧野くに子○北川ゑつ子○安田崎子○たか○眞間秀影○汲川こう○北田のぶ子○荒垣千代子○岡垣幾重○四谷梅子○船水白梅子○篠田とみ子○有賀まさ子○森山たの子○紫雲女史○山田くにえ子○ふじ○木村はる子○中野荒月子○峽ちか子○豐原れい子○米倉久子○北島いし子○高橋きみ子○輝月子○宇佐美文子○小田よれ○串山たけの○姫百合○岩本芳子○植本良子○入崎りん子○片山千里○橋奈美子○永富小米○松浦信子○弘光芳樹○相馬千代野○大藤としの○富來みふれ○ちゑ子○高垣よし○佐川若江○堀保子○中村政子○稗貫みつ子○川村喜代○鎌田りか○赤澤千代子○細川村雨○清水孝子○山下若江○田村波津子○永井清子○角本嵐友女○とき子○小國敏子○小山せつ子○瀬井とめ子○吉田さい○依田よしゑ○篠原皆子○渡邊とよを○田上竹子○岩永くに子○三上てる子○靜野○長井とら○山本すゞ子

懸賞品發送報告

第三卷第十六號の當選諸孃には一月十三日それぞれ賞品をお送りしました。猶、下名の方は至急住所姓名を御知らせ下さい。

○淺草、登美子○名古屋、內藤てつ子○鹿兒島、犬飼たき子○姫路、操子○石狩、愛花操子（猶塔、孝燕恐女○京都、小笠原あき子。

剽窃詩文の注意

第一號の分　○近江、坂重子。實用文四等「都にある妹に」は『秀才文壇』四卷十三號より

第三卷十五號の分　○尾張、奧田くえ子。和歌秀逸「桑摘み」は『勸業月報』第二十七號より

右何れも剽窃せるものとす。

今回注意を與へられたる諸孃は○埼玉縣、大目玉○大隅、染香女○上總、芳枝子○千葉縣、きさ子。白薬女。熱心女。愛讀女。孤影女○楓月。

文壇餘興 好きな音樂（●課●題）

未だ皆さんに音樂の事に就いて聞きませんてしたから次のやうな方法で承らうと思ひます、方法を御らんの上て例の通り山のやうに御投書をねがひます

▲音樂とは日本西洋どちらも言ふのて琴、三味線、笛、太皷、琵琶、明笛又は學校の唱歌、讃美歌、踊、義太夫、ハーモニカの西洋樂、清笛、ヴアイオリン、ピアノ、風琴、ドラ、チヤハチ何でも彼ても一切の音樂を言ふ▲其内て皆さんの好きな音樂は何か、嫌ひな音樂は何か▲聞いて居る時の感想▲自分が演奏する時の心持▲各地音樂會の事▲好きな曲の名▲音樂といろ〳〵の聯想▲其外凡て音樂に關する事なら何でもよろしい、題は假に好きな音樂として書きましたけれど音樂一切の事を含んてあるのてす▲文壇餘興の四字は必ず書添える事▲〆切は本月二十日▲原稿は十六字詰十行まて▲懸賞は一圓、七十錢、五十錢、三十錢、二十錢の五等に分ち圖書切符にて呈す

雜報

○常宮殿下の御容態。高輪御殿なる同殿下には藷臘熱の御病に罹らせられ一時頗る御重らせ給ひけるが昨今大に快方に赴かせられたり。

○下田歌子女史の叙勳。前學習院女學部長下田歌子女史には多年の功勞により左の通り叙勳の御沙汰ありたり。

叙勳四等寶冠章　　下田歌子

○婦人記者の元祖逝く。米國婦人記者の元祖ドレンプイー夫人は六十歳の高齢にて此頃逝去したり。

名士の訃

▲三木竹二氏　森鷗外博士の令弟なる醫學士森篤次郎（雅號三木竹二）氏は多年劇評家として其名高く夙に雜誌『歌舞伎』を發行して演劇界に貢獻するところ尠からざりしが病氣の爲め去る一月十日逝去されたり。

▲橋本雅邦翁　日本畫の巨擘として美術界の重鎮たりし畫伯橋本雅邦翁も昨秋以來病褥にありしが療養効なく三木氏に後るゝこと三日去月十三日遂に永眠せられたり。

懸賞呈品

（甲種）

▲壹等	金拾圓	貴金屬品
▲貳等	金參圓	呉服物
▲參等	金八拾錢	小間物
▲四等	金五拾錢	圖書切符
▲五等	金四拾錢	圖書切符

（乙種）

▲壹等	金五圓	絹張洋傘
▲貳等	金壹圓	帯止半襟
▲參等	金六拾錢	文房具
▲四等	金三拾錢	圖書切符
▲五等	金貳拾錢	圖書切符

▲各種の賞品は發表翌月上旬に贈呈する事

定價

女子文壇（毎月一回（一日發行）定期増刊年四回二月、五月、八月、十一月の十五日發行）

一册（大判百頁）	前金拾錢	郵税共前金拾壹錢
八册（半年分増刊共）	前金七拾六錢	同　前金八拾四錢
十二册（一年分増刊除ク）	前金壹圓八錢	同　前金壹圓貳拾錢
十六册（一年分増刊共）	前金壹圓四拾四錢	同　前金壹圓六拾錢

振替貯金又は爲替に限る事

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は第壹七貳九番てす

○爲換料、通信料、書留料何もいらぬ安全の送金法

此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何度でも無代て呉れます○此方法にて送金の節は登記料二錢算入を乞ふ

明治四十一年一月廿九日印刷
明治四十一年二月一日發行

定價金拾錢

不許轉載

東京市京橋區大鋸町十一番地
編輯兼發行者　野口竹次郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷者　石川金太郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十二番地
電話〔本局六〇七番〕
女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂



寒氣と『レート』の關係

烈しき寒氣の爲めに皮膚の脂肪分泌を奪はれ折角美しく生れ得たる貴重の身體を、あたら疵物にせんとする季節に在ては先づ是が豫防の第一として乳白化粧水レートの準備を要す蓋しレートは牛乳の主成分を以て精製せる一種稀世の衛生化粧料にして其特効は恰も無形の頭巾手袋を着用すると一般皮膚の乾燥より生ずる總ての憂苦疾患を除き完全なる家庭的化粧料として毫も遺憾なからしむ。

發賣元
東京市馬喰町
大坂市南久寳寺町　平尾　賛平

定價特別大瓶金壹圓、大瓶金五拾錢、小瓶金參拾錢、送料金八錢
『女子文壇』愛讀者に限り右定價の一割引○各地の文明的化粧品を販賣する店にあり、
◎にせもの、あり乳白化粧水レートの文字及發賣元平尾賛平に御注意を乞ふ。

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

女子文壇 無比廉價 金拾錢 郵稅壹錢